

RAINY CROWN

KAMENRIDER

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

「止まない雨を見せてやろうか？」もはや見慣れた転生物をオリ主は行く。程々に頑張り、程々に人生を謳歌し、敵を倒す。

## 目 次

ありふれる転生	1
第二の人生	4
修行 その1	7
修行 その2	13
New Power and NEXT STAGE	20
有ると無いとじや大違い	24
見慣れた入学試験	28
浜○「結果発表とおーー！」	36
〔何時もの〕個性把握テスト	40
【お馴染みの】プロフィール紹介	48
△一度は目にする△戦闘訓練	51
雨冠はチート？	57
雷神・天之助	61
マスコミ、委員、昼飯と説明	68
嵐の前の静けさ	75
マンインオンレイ	79
少し変わるその後	88
STANDING BY	92
体育祭だよ！全員集合～！	96
騎馬戦	104
決着	112
1 or 1のトーナメント戦	116
影に水をぶつける	122
I don't do anything to him.	127

雨冠 技 一覧 一検索 —

E L E M E N T A L B A T T L E —

ひよーしょーしき —

ヒーローネーム —

職の場を体で験す行事 —

人生舐めんと飴なぶれ。 —

ヒーローとは —

期末じやー。 —

誰? —

力差 —

数刻後… —

林間合宿までの話 —

一步踏み込む —

そして○○に○る。 —

# ありふれる転生

俺はいつの間にか、謎の白い空間に居た。

(え？ 何処ココ？)

白い空間に戸惑いつつも、状況整理する。

(えーっと、俺の名は法雨（みのり）天之助。俺は普通に街中を歩いてて……そつから先は覚えてねえな……)

そんな事を考えていると、1人の老人が奥から現れた。するといきなり、

「済まなかつた。」

急に謝ってきた。え？ ドユコト？

話を聞くとこの人はこここの神様らしく、人の人生記録の管理してるので、人が死んだ際に転生するかしないかの案内役を任せられているらしい。

神「いやはや本当に済まない。本来なら君はもつと長生きするのじやが、儂が誤って君の人生記録を破いてしもうた……」

成程、やらかしちやつたのか……つまりその場でフツと息途絶えたと……どうりでその先が思い出せんはずだ。おそらく変死体として扱われるだろうな。そしてここは怒る所なのだろうが、性格上、怒れるような人間ではないので、

法「構いませんよ。ミスは誰にでも起こりうる事ですし、特にやり残した事も無いですし。」

と、神様を宥めた。ん？ 優男過ぎる？ キニスンナ（ヽヽヽ）／＼

ヽヽア、オウ：

何分か話していると神様が転生するかどうかの本題に入り、

神「……と言つて君には転生を勧めたいのじやがどうだろうか？ 無理強いはせぬが……」

転生ねえ……こんな話、断るはずがなかろうて。

法「良いですよ。俺そういうのに憧れてましたから。と言うよりか、まさかこの人生でホントに転生出来るのは思つてもいませんでした。」

人生つつても、もう死んじやったけど（へへ；）

神「そうか：：ならば早速転生の手続きといこう。ちなみに君が転生してもらうのは『僕のヒーローアカデミア』じゃ。」

ああアレかー途中からしか見てないけど大丈夫かな？

神「転生してもらう際には転生特典、言わば個性を着けるからのう。」

成程、そこもちゃんとあると。ヒロアカとなればどんな個性にしよう。あまり被らないようにはしたいけどどうしよう

N o w L o a d i n g : :

法「良し、決めた。」

神「ほう、どんな個性にしたのかな？」

法「俺の個性

『雨冠』でお願いします。』

神「『雨冠』？」

法「はい。雨冠がつく漢字全てを再現する能力です。俺の苗字に『雨』つて付いてるんでそれに決めました。」

ヒロアカファンならオリジナル個性は作りたくないっちゃう物ですよ。（多分）

神「ほおー中々の強個性になりそうじゃのー。分かった。では早速転生の準備を始めるぞ。」

すると俺の足元に魔法陣のようなものが出でてきた。

神「ではな、どうか良い人生を。」

法「はい！行ってきます！」

そして俺は魔法陣と共に消えた。

神「第二の人生をしつかり謳歌せよ。法雨天之助君」

## 第二の人生

目が覚める。知らない天井（当たり前）。そしてこの動きにくさ。

確信した。

赤子からのスタートだと。

周りを見ようとモゾモゾしていると、

？「あら？起きちゃつたかしら？」

女性の声が聞こえてきた。確認したいが、思うように動かせん。

？「どーしたのかなー？」

女性が俺の顔を伺ってきた。おそらくこの人がこの世界での俺の母親なのだろう。名を美空と言うらしい。

というよりか、流石アニメ・漫画の世界、美人だ。後どこがとは言わないがデカい。こんな美人に世話されるのか（＾＾；）まあ、男なら誰しも美女に世話たれたいと思うだろう。

？「ただいまー」

母「あ、おかえりなさい」

どうやらこの世界での俺の父親が帰つて来たのだろう。名は勇人と言う。

父「ただいまー美空、天之助（天之助）今日も可愛いなー」

ただいまの挨拶と同時に俺の頬をムニムニしてきた。少し強めにしてくる。地味に痛い。

母「うふふ、じゃあ私もやるー」

そう言うと母もムニムニしてきた。暫く父と母はずつと俺の頬をムニムニしてた。よく飽きないな（＾＾；

ちなみに父は大手企業のエリートらしくて、収入もかなり良さげだそう。やつたね。

食事を済ませた後、二人は日常的会話をしていると、母が、

母「ねえ… この子の事… どう思う？」  
ん？どう思うとは？今度は父が

父「可能性は余り期待しない方がいいかもな…。」

と言った。可能性？待て？もしかして何かやばい病氣にでもかかつてんの!?だとしたら最悪じゃん!と恐れながら時は経ち、

5年後

病院へ来た。俺は病氣の検査か何かと思ったがどうやら個性検査をするために来たようで、

(あれ?そつち?てつきり病氣の方かと)

たちまち検査は開始された。何個かの診断を受け、その結果は

ちゃんとありました。俺が神様から貰つた個性、“雨冠”は無事発現していた。ヨシッと小さくガツツポーズをすると両親が急に立ち上がり、

父・母「ほ、本当ですか…？」

口を揃えて涙ぐんでいた。医者はハイと頷き、数秒顔を見合わせる

と、

「… や」

法「や？」

父・母「やつたああああああああああああ」

ドえらくバカでかい声を出した。二人を落ち着かせると、暫く顔を赤くしていた。

病院を後にし、二人に何故あそこまで喜んでいたのか聞いてみると、二人は無個性だつたからで、この超人社会の中で8割の人間が個性を持つて生まれる時代、自分達は持たずに生まれた。周囲に置いているかのようない感じで、自分達の子供には個性は発現しないものだと思つてたらしい。

しかし実際個性は出ているのだからそりや驚くだろうし、喜びもあるだろう。

そんな両親は俺を抱き、凄く嬉しく泣いていた。なんかこつちが恥ずかしい(・\_・△・) 後母よ、何がとは言わんがすんごい当たつとつたよ。

家に帰つてこれから的事を考える。勿論雄英を目指す。この個性を最大限引き出すために。そしてヒーローとして生き、多くを助け、ヴィランを倒すと。

まあぶつちやけそれくらいしかやることがないのだけれども。

法「さてと個性もちゃんとある事だし、明日から個性の修行すつかー。」

# 修行 その1

## 日曜

さてと毎週日曜は個性を鍛えるぞい。特にほかする事も無いからね。

まず手始めに『雲』を作る。これが出来なければ雪も雨も降らせられないからな。そいえばどうやって出すのだろう? イメージ?

まあとりあえずイメージで雲を生成してみる。雲をイメージ…

イメージ…

ぬぬぬ… | ( - , □→□ )

ポンツ

すると $40 \times 40$ の大きさの雲が出てきた。初めてにしてはいい感じやないかな。パッと見乗れそうな気もするがどうだろう? 恐る恐る雲を押し込もうと試みる…

通り抜けてしまった。体積が足りなかつたのだろうか? ならば今度は体積マシマシにイメージしてみる。

ぬぬぬぬぬ… | ( - , □→□ )

ポンツ

出た。そして先程よりか2倍大きい感じだ。これならどうだ?

お? 触れる。触れるぞー?? ? ヨシッ!! 更に座つてみたりもしたが、何ら問題はなかつた! いやー良かつた良かつた。

ならお次はこの上に乗つてみよう。そーっと… お? 案外丈夫だな。ならこのまま少しづつ上昇していこう

スウーーーー… :

母 side

母「ふうーそろそろお昼だし、ご飯どうしようかしら?・うーん、天くんの意見を聞いてみるかな」

母「天くーんご飯どうs…あら?天くん?」

何時もなら庭にいるはずなのに周りを見渡しても居ない。

母「天くーん?どこ?」

法「んー?何ー?」

声は聞こえる。だが見渡せど、姿は見えない。イタズラだろうかと思つた瞬間

「おーい。上上<sup>ス</sup>」

上?  
そう言われ見上げると…

……え?

私は疲れてしまつてゐるのではないかと思っていた。何故なら天くんが宙に浮いているのだもの。だがこれは現実だった。

母「ええーーーーーーーー!<sup>?!?!?</sup>

母「そそそ天くん!何やつてるの!?

法「雲に乗つて浮いてる。」

母「いやそれは見たら分かるけど!!危ないから降りてらっしゃい!!」

降りてこいと言われ、降りた。その後凄く心配したと怒られた。因みにこの時どれくらい浮いていたのかというと約6メートル浮いていたらしい。この事を父に話すと、即効氣絶してしまったようだ。次からは心配させないよう気をつけねば。

## 次の日曜

さてと雲は出来たから次はどうしようかと考えていると、母が様子を見に来た。

母「また個性の練習？」

法「うん、早めに慣らしておいて損はないからね。」

母「それはそうだけど、先週みたいな事は先に言つておく事！目を離してたら危なつかしいんだから！」

法「善処します・・・」

母「まあ、それはそれとして、今日は何の練習？」

法「雲を作れたから雨を降らせられるかどうかかな。」

俺はそう言つて雲を生成し、雨をイメージした。規模的には小雨くらいでいいだろう。ぬぬぬぬぬ・・・（「、～」）？

さあーーー

降りました。やっぱ俺の場合はイメージでどうにかかるモンなんだね。

母「凄いね天くん！イメージだけでここまで出来るなんて！」

と母から感心された。確かに個性にも様々な能力があるが、中には条件を満たさないと発動出来ない物もあるからなあ。イメージだけでどうにかかる俺つて恵まれてんのかな？それとも神様のおかげ？

神「（＼＼△＼＼）＼；＼・＼ヘツクショニ！　うーん、（ズズツ）誰か噂でもしておるのか？」

更に次の日曜

俺は今、山にいる。家屋も何も無い、開けた山奥にいる。  
父「ここなら誰の邪魔もされず、思う存分練習できるもつてこいの場所だ！」

と、父にそう言われた。それはいいが何故こんな場所を用意出来たのが理由を聞いてみると、どうやらこの山は家の私有地で、祖父が昔に買い取っていたと聞いた。マジすか（；・▽・）どんだけ富あんだこの家系…心の中でそうツツコんだ。

だが折角用意してくれたのだからお言葉に甘えて存分に使わせていただこう。

颶爽と雲を上へ生成し、広げてゆく。今回会得するのは《雷》。戦闘面では最強の部類に入るやつである。

ゴロゴロ…

途端に黒雲となり、電流が逆る。そして近くにあつた一本だけ孤立した木に目掛けて、

ドゴオーーーーン!!

雷鳴が轟いた。

木は黒焦げになり、真つ二つに裂け、少し燃えていた。

これは成功。次のステップへ移行しよう。

次は雷による移動法。どのようにいくか。足に纏わせて移動する？それとも身体全体に纏わせて移動する？

否。

俺自身が『雷』になる事だ。

## 修行 その2

俺自身が『雷』になること。

何言つてんだこいつ？と、思う方々もいるだろうがなると言つたら  
なる。さてイメージだ。

と言いたい所だけど、これは相当イメージしにくい。いや、分かる  
よ？分かるんだけど、もつとこう：具体的なイメージが湧かん。ビ  
リビリ具合が特に。

それは考えながらにして、身体を鍛えよう。何かいい案が浮かぶか  
もしれんし。

数時間後…：

ダメだーー。来ねー。どうしようじょ（??；）ヤバイ。考えろ  
考える。

ヽ（。Д。）ノ三ヽ（。Д。）ノ

等と、ウロウロしてる内に、ガンつて腕を木にぶつけてしまった。  
法「痛つて！」  
あーもー、これ結構地味に痺れるからやなんだよな。腕をブンブ  
ン振つていると、不思議な事が起こつた。

ビリビリビリ…：

うん？

錯覚だろうか？今腕に小さく電流が出ていたような？  
あれ？待てよ？痺れる？

あ。（理解）

我が家

母「まだ正座してるの？」

父「ああ。今会得しようとしてる技で何か掴めそなんだとか。」

母「ふうーん。でも帰つて来てから何時間もあの状態よ。ご飯食べてる時も、そこから一歩も動かずに……立った時辛くない？」

ドーキ。絶賛正座中の俺氏。別に怒られてやらされているんじやないよ。俺の意思でやつてているから。てか、忘れていたよ。人間は正座や、主に腕とかを強打した時に痺れる事を。コレで良かつたんだな。というかホントにこれでいいのか？コレで失敗したら今までの時間ただただ正座してた人になっちゃうよ。俺。まあ、いいけど。（イイノカヨ）

んーそろそろいいかな。んじや、立つか。ヨツコラショ…：

父「お？終わったのか？」

母「足は大丈夫なの？」

法「…。」

父「あれ？天之助？」

母「天くん？」

ビリ・・・

雨 「きてます。」

父・母 「え？」

ビリビリビリビリ・・・

法 「いいぞ、來てるよ、來てる來てる。」

父 「な、何だ？ 天之助の足に… 電流が… !？」

母 「そ、天くん！」

法 「あー、ダイジョブ、ダイジョブ。問題ナッシング。」

そう言つてゆっくりと庭先に出る。

父 「何で庭に？」

法 「割と危険だからかな。」

母 「え！ 大丈夫なの！」

法 「大丈夫だつて。でも二人は離れといてね。痺れちゃうかもしけないから。」

母 「あ、うん…。」

そう言つて俺は庭の片隅にある草の生えていない少し硬めの土場に立つた。だつて草燃えちやつたらやだし。後が大変そうだし。そうして右足を上げ、少し強めに踏むと次の瞬間。

バリバリイ!!

電流が広範囲に散つた。

父・母「!?

法「ふいぐ。」

父「す、凄い……。」

母「まさか電気まで使えちやうなんて……。」

父と母からは評価のある言葉を受けた。だが……

法「うーん、なーんか違うんだよなあー。」  
等の本人は納得していなかつた。

父「え!? 何でだ!? 凄い事じやないか!?

母「そーよ！普通正座だけで電気出せないよ！」

法「いやあそーなんだけど、俺が思つてたのと違うんだよねー。俺が目指してんのは雷そのものになることだから。」

母「え？ 雷そのもの？」

法「そー。これがまた難しくつて。ほら、正座し続けると足が痺れてくるじゃん？ それがヒントになると思つてずーっと正座してたんだけど結果的にはイマイチになつちゃつた。」

父「いやいやいやいや！さらつと言つたけど雷そのものになるつて  
！相当なことだろ！」

法「うーん、どうしたらなれるんだろー？」

上を向きながらそう考えていると、

キラツ

なんか光った。流れ星か？だとしたら願い事でも…

ズオーーーーーー

⋮ ちょっと待て？こっちに落ちてきてない？

ズオーーーーーー

法 「!?

父・母 「え!?

二人共離れて!!

ズドオーネン!!

母 「きやつ!?

父 「今度は何だ!?

法（轟音とともに何か降ってきた!? 一体なんなんだ!?)

暫く土煙がまつていたが、ようやく視界が晴れてきた。するとそこ  
にあつた物は……

法 「……………」

傘？」

# New Power and NEXT STAGE

いかにして雷になれるか思考している最中、突然傘が墜落したかの如く落ちてきた。

法 「…………… 傘？」

父 「…… 傘だな。」

母 「…… 傘ね。」

なんで？なんで唐突に傘が降つてくんの？怖((・ω・))。確実になんかあんでしょ、これ。このままほつとく訳にもいかんし、抜いてみるつきやねえよなー。渋々の渋沢栄一で

父 「さ、触るのか？」

母「大丈夫なの？触つたら死んじやつたりしない？脳みそ出たりしない？血管破裂ちやつたりしない？心臓潰れちゃわない？」

怖ーこと言ーなよー！余計触りづらいじゃねーか！父が何とか母を落ち着かせてくれているが、マジでなんなんだろうな、この傘：ええーいままよー！勢いよく傘の持ち手を掴んだ瞬間、俺の視界は白い光を放ち、何の音も聞こえなくなり

法 「あれ？父さん？母さん？」

そこに父と母の姿は無く、気付けば一人、立ちすくしており、遅れて気付いたが、転生前の、元の俺に戻っていた。一体なにがなんのかよく分かんなくなつた矢先、

目の前にテレビの砂嵐のようなものが現れ、7秒くらいするとそこにある人物が居た。その人物とは

神「あ、映つとるかの。」

法「神様!」

神「やあ、久しぶりだのう。これを見ているということは、無事傘も届いたようじやな。」

法「これ神様が送ったの!?」

と言うのも、もしかしたら神様が送ったのでは?と考えていたが、予想は当たつていたようだ。

神「先に言つておくが、これは録画映像でな、返答などはできませんぞ。」

法「あ、そうなんだ。」

神「君のことはちゃんと上から見届けさせてもらつてるよ。個性の練習も真摯に頑張つておるようじやから、ちょっととした褒美を用意した。それが君が今持つていてるその傘じや。」

そう言われ、傘の方に目を向ける。改めてよく見ると、鮮やかな虹色をしており、角度を変えていくと、オーロラのようにとても綺麗だ。言葉に出来ない美しさとはこの事なのだろうか。

神「その傘はな、儂が上に直々に頼んで作つてもらつたものじや。君の個性、『雨冠』のイメージを大幅に底上げしてくれるバフ効果がある。基本君にしか使えんようにはしとるから、他に使われても意味は無い。さらに耐久性も抜群に優れておる。どれくらいかというと、核爆弾を投下されても無傷で済むレベルじや。」

核爆弾でも!?スゲーな神様!でもそれがあっちじや普通なのか?

神「普段そういう想像物の名付けは此方側で決めるが、その権利を君にあげよう。自分で好きな名を付けると良い。」

へー。名付けかー。

神「おつと、そろそろ時間じや。もうすぐ会議に出なけりやならんからぬ。ではな、法雨天之助君。引き続き、第二の人生を勵めよ。」

法「……はい！」

気が付けば俺は庭に戻っていた。

法「戻ったか…」

父「！ 天之助！」

母「良かつた！ 急に反応がなくなつて心配したのよ！」

あー、そんままボツーと突つ立つてたんか。また心配させちゃつたな。

法「ごめん、でも大丈夫だよ。」

父「そつか。なら良いけど… ところでその傘は…」

法「まあ、俺の新しい力みたいなもんかな。」

母「よく見ると綺麗な色ね。思わず見入っちゃうくらい。」

分かるよ。目の付け所がいいな流石我が母よ。そういうや傘自体の能力とかどうだろう？ 耐久性は分かつたけど威力とか。

ふと俺は空に向かつて傘を横に振ると

スパン

えー？ 空を切つただけで木の葉の一部分が斬れたんですけど。エグッ。運良く父と母は話していくこちらの状況は見ていなかつた。良かつた良かつた。

法「そういや、この傘に名前付けようと思つてて、何かいい名前ないかな？」

父「んー名前かあ… うーん…。あ！ 虹色の傘だから「虹傘（こ

うさん」なんてどうだ?」

法「あ、却下で」

母「私もちよつとそれは……」

父「あり?ダメだつた?」

母「それは天くんの物なんだから自分で決めたらいいじゃない。」  
うーん、そーだなー、前世で好きだつたアニメや特撮のオマージュ

的な名前え……あ、いいのあつたかも。

法「よし、決めた。」

母「なんて名前?」

法「この傘の名前は

あまがさけんそらふり

雨傘剣天雨」

父「雨傘剣……」

母「天雨?」

法「うん、まず読んで字のごとく雨傘。んで、つるぎの方の剣。そ  
して俺の天之助の天にふると書いて雨つてな感じ。」

母「へえー、いいんじやない?私はそのネーミング好きよ?」

父「うんうん、父さんのよりもだいぶ良いな!いやー、自分で言つ  
といて恥ずかしくなつてきた。」

法「ハハツ、かもね。」

父(え、否定してくれないの……)

母「あら、もう22時過ぎちやつたわね。そろそろ中に入りま  
しょ。」

もうそんな経つてたんか。じゃあ練習はまた別の日か。  
その日はもう眠りについた。

有ると無いとじゃ大違い

今回からこの「雨傘剣天雨」を用いて修行する。俺の個性を大幅にパワーアップさせてくれるようで、ホント感謝しかございませんよ。

法「それでは早速」

天雨に意識を集中させ、今度こそは雷になると強くイメージした法「スウ—————」

「ハア—————」

(雷⋮雷⋮)

バリバリ

おや?

バリバリバリ

!?!?

これは流石に驚いた。なんせ足や腕が てか身体全体が白光していて、バリバリいつてんもん。天雨が有るだけでこんなに簡単に……俺のあの時間はなんだつたのか…（＼・ω・／）ショボン。つて落ち込んでる場合じゃねえ！こいつがあるおかげで出来ることの量が増えたんだ！おっしゃー、やる気出てきた！雨宮天之助！ ファイトオオ!! イツパー——ツ!!

雷と化した俺は木々を悠々と駆け抜け、大きな岩をタックルで破壊することができて、極めつけは県跨ぎ。普通なら何時間も掛かる移動が、俺ならほぼ数秒で着く。北海道も沖縄もおおよそ1分で着けるからめちゃ便利。つて言つても、まだヒーローじゃねーから個性も思つきし使えるんから暫くしないけど。

日が暮れかかつた山奥。夕日が優しく俺を温かく照らしてくれている。（気がする）

法「さあて、時間もいい頃だし、もう下山しよ。今日の晩飯な一つにかな♪」

晩飯のことを考えながら山を降りていると…：

熊「グルルル…」

ある日♪森の中♪クマさんに♪出会った♪（ガチ）  
つて呑気になつてんの。熊よ？見た感じ3メートルいつてんよ？  
まだ5歳よ？俺。とそんな事を思つているのも許してくれるなく、ジ  
リジリ寄つてくる。

熊「グルアアア！」

法（くつそー、この山は私有地だから他の人は入つて来ないし、無駄な動きをしたら襲つて来そうだし、いやそういうじやなくとも襲う気満々だわコレ。）

熊「グガア!!」

熊が俺に向かつて突進してきて、勢いよく爪を振り下ろした。

法「うおつと！」

距離があつたため余裕で避けられたが、地面はヒビいつっていた。  
雨（ムウ‥‥こりや殺らなきや殺られるなあ。ハア‥‥仕方ない。  
なら、悪いがこいつにや俺の個性の練習台になつてもらおうか。恨む  
なよおそちらが先に手出して来たんだから。この歳で死ぬなんざ  
真つ平ごめんだ。）

熊の様子を伺いながら、ゆっくりと後ろに下がりつつ、天雨を銃の  
様に構える。

熊「グルアア!!」

再度突進してきた。俺は前を見ながら素早く後退し、熊に狙いを定  
め

零弾（だだん）。  
バアンッ

熊「グオオツ!?」

放つた弾は鼻にヒットし、狂い悶えていた。熊は鼻が弱いとは聞いたことがあつたので用意に対処できたからまだ良かったものの、知らなかつたらどうなつてたことか。まあその時は目を撃つてたかな。  
ダツダツダツ‥‥

熊はそそくさと森の方へ逃げて行つた。あのまま戦闘にならずに済んだ。なんせ身体はまだ未発達だから、今のでどつと疲れた感覚に見舞われた。

法「あーつぶなかつたー。マジでヤバかつたー。遠距離攻撃作つと

いて良かったーひぐちカツタ━。」

俺が新たに開発した攻撃法、雹弾（だだん）。雹を銃弾に見立て、発射する技。一見するとの水鉄砲の様な物にも捉えられるが、この雹弾を侮つてはいけない。どれくらいかというと、普通の拳銃と同等の威力なのだ。殺傷能力が出てしまつてはいる。これだとヴィランならまだしも、雄英の生徒を殺しかねない。威力を調整しなくては。一応、指からもできた。こつちはパチンコ玉くらい。天雨もパチンコ玉の威力にしとかないとな。

法（そして今日の出来事は口外しないでおこう。言つたら二人がぶつ倒れる未来が見える。）

そんな事がありつつ、修行を重ね、日々精進し、勉強し、よく食べよく寝て、あつとい間には流れ···

そんな俺は今

入学試験場前に立つてゐる。  
· · · · ·

## 見慣れた入学試験

やつて参りました。試験場。ん？10年の間何してたつて？ひたすら修行と学習。前にも言つたけど、それくらいしかやることないもん。コツチのゲームとかアニメは何個か同じのはあつたけど興味湧かなかつたからかな。でもそのおかげで義務教育に専念できたからいつか。んじや、時間も時間だし、行つてきましょつか。受けに。まずは筆記試験。フムフム 分かる… 分かるぞ…！書いてある事が分かる！必死こいて復習しとくもんだな（ \*▣▫▣\* ）？グツ！前世ならこうはいかなかつたよ。だつて誘惑が多すぎるもん。兎にも角にも筆記の方は余裕のよつちやんで終えられた。次はいよいよ実技か…：

『今日はオレのライブにようことそーー!!エビバデイセイハイ!!』

シイーーーン…：

『こいつあシヴィーー！受験生のリスナー！実技試験の概要をサクツとプレゼンするぜ!!アーユーレディ!?』  
とやけにノリノリで進行してるこの人は「プレゼンター・マイク」プロヒーローの一人である。にしても生で聞くとこんなうるさいんだ。黙つちやうのも分かつた気がする。

プロ「入試要項通り！リスナーにはこの後！10分間の『模擬市街地演習』を行つてもらうぜ！持ち込みは自由！プレゼン後は各自指定の

演習場へ向かつてくれよな!!OK~!?

法（肺活量どーなつてんだろ）

プ「演習場には、『仮想敵を三種多数配置してあり、それぞれの『攻略難易度』に応じてポイントを設けてある!!各々なりの『個性』で仮想敵を行動不能にし、ポイントを稼ぐのが君達リスナーの目的だ!!武器の持ち込みは自由！それともちろん他人への攻撃などアンチヒーローな行為はご法度だぜ!!」

と色々説明していると、

「すみません！質問をよろしいでしようか！」

真面目なメガネ、略すりやマジメガネな飯田くんだ。

プ「ヘイ！そこのリスナー！何だー！言つてみろ！」

飯「プリントには四種のヴィランが記載されております！誤載であれば日本最高峰たる雄英において恥ずべき痴態!!我々受験者は規範となるヒーローのご指導を求めてこの場に座しているのです!!ついでにそこの縮れ毛の君！先程からブツブツと気が散る！物見遊山のつもりなら即刻ここから去りたまえ!!」

「す、すみません…」

法（ありやりや、怒られちゃいましたな出久くん。）

プ「オーケーオーケー、受験番号71111君！ナイスなお便りサンキューな！四種目のヴィランは0P！そいつはいわばお邪魔虫！スーパーマリオブラザーズやつたことあるか!?レトローゲーの！それのドッスンみたいなもんさ！各会場に一体！所狭しと大暴れしている『ギミック』だ！」

飯「有り難う御座います！失礼致しました!!」

プ「俺からは以上だ！最後にリスナーへ我が校『校訓』をプレゼントしよう！かの英雄ナポレオン＝ボナパルトは言つた！『眞の英雄とは人生の不幸を乗り越えていく者』と！P u l s u l t r a！それでは皆！良い受難を!!」

こうして始まつた実技試験。会場は普通の市街地と見間違うほどに広い演習場所だ。

法（雄英つて東京ドーム何個分だろ？まあ、今は試験に集中しよ  
う。）

指定されたエリアに立ち、いつでも出れるように準備した。

「はい、スタート。」

そう言つて合図と同時に俺だけが駆け出していた。

「「「「・……………え？」」「」」

「どおーしたあ？実戦にカウントダウンなんざねえんだよ！始まり  
は何時も突然にいー！賽は投げられてんぞー！」

しまつたと慌てて他の受験者も飛び出てきた。知つてて良かつた  
○U M O N式。と、早速お出ましか。

【標的発見。ブツコ r・：！】

シュンツ

【?】

法「おー、怖や怖や。だがな…」

仮想敵が突撃してきたが、それを雷移動で瞬時に後ろへ回り込み、  
そして

バゴオーン

雨傘剣天雨で横殴つて、仮想敵その1はそのまま吹つ飛び、行動不  
能になつた。

法「かあー、たつた一発であんなになるかえ？殴つた部分おもつく  
そ凹んどるし。流石核爆弾にも耐えられる万能傘。おし、次々！」

こうして俺は目に付いた仮想敵を雷移動と天雨で片つ端からぶつ壊していった。万事順調です。

それを見ていた他受験生

「何もんだ、アイツ？」

「： なんだろう、勝てる気がしない。」

「もうアイツ一人でいいんじやないかな？」

さーてさてさてサテライト。だいぶやつたかな。怪我人もアレで治したし、何となくOPの相手もしてみてーけど。すると突如、会場が揺れた。

ズシーン： ズシーン：

ビルをゆうに超えるほどのOP仮想敵、お邪魔虫ギミックが姿を現した。それを見た受験者達は逃げ惑っている。あれは無視していいとは言われた。あくまでギミック。あんなデカブツに挑もうとする奴は居ない。ただ一人を除いて。

法「へー、あのがそうかー、俺個人としては実際にどれくらいのもんなのか好奇心モリモリだーから、行ってみよーつかなー。フフツ沸いてきたぜ！」

ドゥーッン！

「おい、アイツOPに突っ込んで行つたぞ！」

「正気!?」

「無茶過ぎるだろ!?」

ゴロゴロ

「おいちよつと待て！OPの頭上に、なんだ？黒い雲？」

法「鬼さんこちちら♪手の鳴る方へ♪」

OPは俺を探しているようだが、動きが速すぎて追いつけてないようだ。ノロイノロイ！そんでコイツをよじ登つて、そんで空に向かってジャンプ！OPはようやく気づいたみたい。

法「ふん、やつと俺を見つけたか。だが時既に遅しあし。もうお前は再起不能だよ。」

ゴロゴロゴロ⋮

天雨を両手に下に突き刺すように構えた瞬間

バリイ！

天雨に雷を纏わせた。別にこれといった技名は無いけど、あれでいつか。

法「喰らえー！雷落槍!!」

ピシャーン

ドウオゴー————ン!!!!

出「な、何だ!? 地震!? 爆発!?」

飯「いいやアレは、落雷!?」

教師側

「!? 今のはつ!?

「まさか暴走!?

「早く! 映像確認を!」

地震なのか爆発なのかと聞き間違えるほどの大爆音が鳴り響いた。教師達が急いで映像を見ようとしたが先程の影響でカメラにノイズがかかるてしまっている。数秒して正常に戻ったため確認すると、そこには信じ難い物が映っていた。

何と酷くボロボロになつたOPの仮想敵が無惨に倒れている横に、受験者がポツンと一人佇んでいるではないか。

「ウソでしょ!? アレを破壊したの!?

「アレは他のより壊れにくくはしてるが、まさかあんな簡単に…」

「そう。そもそも破壊される事が目的ではないOP仮想敵。万が一の事もある為、容易く破壊されないよう他の仮想敵よりもだいぶ頑丈に作つてある筈なのだが、こうもあっさりと壊されてしまつてはただ啞然と見ることしかできなかつた。

「…彼の名は?」

「ちよつと待つてください。えーっと… 彼の名は法雨天之助。個性は『雨冠』との事らしいです。」

「… そうか。」

「そういえば彼、怪我した受験者に治療してなかつた?」

「ああ、救助Pも採点の一つだからな。そこもしつかりやつている。しかしそれで気になる点が一箇所あつてな。」

「ん? 何だ?」

「実は彼が治療した人の殆どの傷が癒えていた。と言うより、完治に近い。」

「えつ… それって」

「… ああ、あれでは、まるでリカバリ・ガールのようだ。」

「…………。」

「複数持ちか?」

「それはまだ分からん。だがこれから知つていけばいいさ。」

教師達が天之助の個性にどよめくそんな中

(なんてこつた!こんな強い子がいるとはっ!やつぱ世の中広いもんだなあー!緑谷少年もそうだが、法雨少年もまた、素晴らしい成長を見せてくれるかもしれないっ!)

感銘を受けていた人物がここに一人居た。その名はオールマイト。「平和の象徴」とされているN.O. 1ヒーロー。出久に『ワン・フォーオール』を継承させた人物でもある。オールマイトは天之助にも将来性を感じたようで、震えている。

「どうしました?トイレならさつさと行つてきていいですよ。」

とマスコミ嫌いの抹消ヒーロー、「イレイザー・ヘッド」こと相澤消太はトイレに行きたいのかと勘違いした。

オ「あ、いや。そうじやないよ。ただ…」

相「ただ? 何です?」

オ「ただ今年は… 上手く言葉に出来ないけれど、凄い事になりそうな気がしてね。」

相「まあ確かに、あんなのを見せられてはね。」

こうして無事に入学試験は終わつた。が…

法「……絶対目え付けられたな、俺。」

盛大にやらかした事に憂いながら帰宅する天之助であつた。

## 浜〇「結果発表とおーー！」

法（今日あれが届く。そう、合否通知だ。大丈夫かな受かってるかな）それとも落ちたかな（ガタガタ）

そんな事を考えながら、玄関先に立っている。

母「きっと大丈夫よ、自分を信じないでどうするの？」

法「うん、あ、トイレ。」

ヽ（・・；ゝ）＝3＝3＝3シユタタ

母「もう、天くんつたら、あら？」

ジャ一

法（フウどうにも腹が落ち着かねえな。はよ玄関戻る。）

母「あ、天くん！ついさつき届いたわよ！合否通知！」

法「ナニイイーー！」

タイミング悪っ！俺が受け取るつもりだつたのにー！まあ、過ぎた事を悔やんでもしやーないかー。では、合否の結果発表といこうじゃないか。リビングに行き、封筒の中身を確認すると、プリントが数枚と一枚のうすいタブレットのようなものは入つていた。これで合否が分かるみたいだ。早速起動させてみると、

『やあ！初めまして法雨天之助君！鼠なのか犬なのか熊なのか、かくしてその正体は……僕、雄英高校の根津校長さ!!』

俺は知っていたので、驚かなかつたが、母は腰を抜かして、驚いていた。そして目を覆い隠した。実を言うと大のネズミ嫌いなのである。なので根津校長でも駄目なようだ。

『さて、早速だけど君の合否を伝えるよ。筆記は全5科目オールパー フエクトで問題なし。実技は敵ポイント120ポイント、そして他の負傷した受験者を安全な場所へ避難させ治療を施し、更にギミックを撃破をしたことから審査制による救助活動ポイントで90ポイント！驚異の合計210ポイントで文句無しの主席合格さ!!』

法「よっしゃあ！」

母「やつたじやない！天くん！しかも主席よ主席！今夜はご馳走ね！」（目を隠しながら）

と同時に母は少し離れ、誰かに連絡していた。おそらく父だろう。電話に出たのか、母が俺の主席合格を伝えると、離れても聞こえるくらい嬉しい喜んでいるのがすぐ分かつた。周りびっくりしてるのでしょうよ。（汗）

『それともう一つ。』

法「ん？」

『実は君と2位の子のポイントの差が異様に開いてしまってね。君にある提案をしたいんだ。それは特待生としての入学さ。』

法「特待生？」

『これを受ければ諸々の優遇処置など、他者に比べて圧倒的に有利となる事なさ。』

法「ほえ？」

『君は特に凄かつたが、他の子も優秀な成績だったものでね、だから誰も削らず、特待生枠として1枠増やした訳さ。』

法「なるほどねー』

『それだけ君の将来に我々は可能性を感じたということだよ。そういう訳で法雨天之助君、君は晴れて特待生として雄英のヒーロー科に入学が決まった。おめでとう！君のこれから活躍を期待しているよ!!』

それ以降は学校関連の説明を色々された。その晩は母が豪華な料理の大盤振る舞いをしてくれた。

翌日

制服に着替え、いよいよ登校初日、今後様々な苦難にぶち当たつていく事になると思うが、今だけは清々しい気分で行こう。

母「ちゃんと持つ物持つた？」

法「持つたよ。天雨もあるし、んじや、行ってきます。』

母「ええ、行つてらつしやい。」

父「しつかりやつてこいよ！」

法「うん！」

父と母に見送りをしてもらい、俺は雄英に向かつた。

テクテク

法「着いたな。これが雄英高校、改めて見てもやっぱデケエな。これからここで色んな事をしていくんだな。」

更にテクテク…

法「えーっと1—Aは…………あー、あつたあつた。扉デカツ。」  
パツと見5メートルくらいか?バリアフリーなんだらうけど。

と言われたが、まだかな？）

と、中から相澤先生らしき声が聞こえた。

相「まず最初、本来は1クラス20人制だが、事が事でな、このクラスだけは21人になつた。つーわけで、その21人目を紹介する。入つて来い。」

相澤先生がそう言つて入つて来るよう言われた。めっちゃザワザワしてる。こーゆーの緊張するわー。短く深呼吸してー、スーサーんし、イクゾー。(デツデツデデデカーン)

ガラガラ・・

( , ↓ ) ( 0 M 0 ) ジーーーーーー

ナズエミテルンデイス!!いや見るだろうけど!

相「コイツがその21人目だ。ほれ、自己紹介。」

法「ど、どうも。法雨天之助と申すもんです。今後ともこの三年間、  
よろしくお願ひします。」（――）ペコリ

「よろしく」

「よろしくお願ひしますわ。」

「よろしく頼む。」

「よろしくな！」

「チツ！女子じやねーのかよ。」

とゆーよーに、色々な挨拶があつた。最後のは明らか違うけど…  
相「自己紹介終わつたんならお前ら、これ着てグラウンドに出ろ。」  
そう言うと体操服を渡され、相澤先生はそのまま出ていつてしまつ  
た。

法（俺はこの後行われる事を知つてゐる。個性把握テストだ。…  
全力でやらなきゃ除籍されそุดから全力で取り組まんとな。）  
そんな事を思いながら、着替えに行つた。

## 〔何時もの〕 個性把握テスト

「「「「個性把握テストオ!?!?」」」」

グラウンドに集まつて最初に言われたのはそれ。いきなりテストだなんて誰だつて驚くわな（――）ウム。

「入学式は!?ガイダンスは!?」

相「ヒーローならそんな悠長な事してると時間は無い。雄英は自由な校風が売り文句。それは先生側もまた然り。」

生徒達は少し困惑してたが、お構いなしに話を続ける。

相「これからテストの説明をする。ソフトボール投げ、立ち幅跳び、50m走、持久走、握力、反復横跳び、上体起こし、長座体前屈と、中学の頃からやつてるだろ？ 個性禁止の体力テスト。国は未だに画一的な記録を取つて平均を出してる。全く合理的じゃない。」

そう言うと相澤先生は俺を見て

相「法雨、中学の時、ソフトボール投げ何メートルだつた？」

法「えー、72くらいでしたかね。」

相「じゃあこれ使つて投げてみる。円から出なけりや何してもいい。」

法「…何しても？」

相「何してもだ、はよ。」

そう言つてボールを渡され、俺は円の中に入る。

そんな中、複数名は疑問に思つた事がある。

「なあ、そういうやあなんでアイツ傘なんて持つてんだ？」

「さあ？まさかあれで野球みたいに打つのか？」

「ええ？傘で？」

「まーでも実際見りや、わかるだろ。」

まあうつっちゃうつけどその打つじやないんだよなあ。俺がやるのは

ブクブク：

天雨に個性を集中させて

法「よつ」

ボールを前上空に投げ、天雨を銃の構えにする。よく狙いを定めて⋮⋮⋮

だはくえんだん  
雷霸遠弾!!

ダアン!

「「「?」」」

まるで戦車砲を彷彿とさせるその威力。またはそれ以上か。その場にいた全員は見ていて驚愕せざるを得ないと思わせてしまう程に、とても。

この雨冠は『霸（はたがしら）』。音読みでハ・ハクとも読む。力で天下を取った者などの意味があり、力強さなら他の雨冠で随一の能力だ。

相（先日の入学試験時の落雷もそうだったが、法雨は少し、… いや俺が思つてゐる以上に規格外な存在なのかもしれない。… 「ピピピッ」… うわ、何だこの飛距離。）

記録 10462・3M

相「… まず自分の「最大限」を知る。それがヒーローの素地を形成する合理的手段。」

「はあ!? 100000メートル越え!？」

「ヤベーなおい！」

「そつちの「打つ」じゃなくてこつちの「撃つ」かよ！」

「なんだこれすげー面白そう！」

「個性思いつきり使えるんだ!!さすがヒーロー科!!」

法（くるぞーあの言葉が）

相「面白そう…か。ヒーローになる為の3年間、お前らそんな腹積もりで過ごす気でいるのか？」

その一言で、空気が一気に重くなつた。

相「よし…トータル成績最下位の者は見込み無しと判断し、除籍処分としよう。」

「「「「はあああ!?」」」

相「生徒の如何は先生の自由。ようこそこれが、雄英高校ヒーロー科だ」

「最下位除籍つて!!入学初日ですよ!いや、初日じゃなくても理不尽すぎる!!」

相「自然災害、大事故、身勝手な敵たち。いつどこから来るかわからぬ厄災。日本は理不尽に塗れている。そういう理不尽を覆していくのがヒーロー放課後マックで談笑したかったならお生憎。これから3年間雄英は全力で試練を与え続ける。Plus Ultra さ。全力で乗り越えて来い。さて、デモンストレーションは終わり。こつからが本番だ。」

法「よーし後は流れに任せつつ、全力でやろ。」

すると、何人か寄ってきた。

「なあ…さつきは凄かつたな！金であんだけの距離飛ばせるなんてよ！」

「だよね！私ならあんなに飛ばせないよ！」

「いやいやそれを言うなら俺もだせ！」

「まあ、ワタシ達はワタシ達で各自頑張るしかないわね。」

かなりグイグイくるな。（？▽？；）目立ち過ぎたか。

「俺、切島銳一郎！改めてよろしくな！」

「私は芦戸三奈！よろしくね！」

「俺は上鳴電気だ！よろしくう！」

「蛙吹梅雨よ。梅雨ちゃんと呼んで。」

法 「うん！みんなよろしく！」（・・の・・）ゞ

### 第1種目 50メートル走

俺の番が回ってきて、スタート位置につく。普通なら雷を使う所だが、ここで使うのは雷とはまた少し違う。

位置について

ビリビリ

よーい…………ドン！ のドが聞こえた瞬間

バギュウウン！

雷鳴と共に駆け抜けた。記録は

『0・03秒』

上 「いや速すぎるにも程があるだろ!?」

飯 「何…………だと…………」

飯田くんがあまりの速さに失神しかけたがなんとか正気を保つた。因みにさつき使ったのは霹靂。某ヘタレ剣士が使う技名にもなつてるやつ。

### 第2種目 握力

これはさつき使った霸で、

バギイ・・

法「あ。」

⋮⋮⋮ マジで潰しちゃつた。

相「⋮⋮⋮ 測定不能で」

芦「控えめに言つてヤバくね?」

### 第3種目 立ち幅跳び

ここでは霄（しょう）というのを使う。（訓読みでそら）霄とは、大空を意味し、これと雲を合わせた雲霄（うんじょう）というので空を飛べることが可能となつた。

相「それ何時までやつてられる?」

法「最長で1週間弱です。」

相「じゃ無限で」

切「テキトー過ぎないか!?!?」

### 第4種目 反復横跳び

ここも霹靂で

シユシユシユシユ(。°。)三(。°。)三(。°。)

)

記録 6135回

蛙「速すぎて残像が見えたわ。」

「くそ! オイラの得意種目が!」

法「ナンカゴメヌ。」

### 第5種目 ハンドボール投げ

俺はもうやつたので、スルー。

1位は勿論、∞をだしたお茶子ちゃん。

この後、出久くんがS M A S Hして、それに爆豪がキレて、相澤先

生がその爆豪を取り押さえた。（ここだけ簡素でスンマセン）落ち着いてきた所で、俺は出久くんの方に近寄った。

出「な、何かな?」

法「いやあ、だつて見ての通り右の方がさあ…」

出「だ、大丈夫だよ。これくらい、何ともないからさ。」

法「はあー、それ見てダイジヨブな訳ねーでしょーよ。ちよい見せてみ。」

出「え? ちょっと…！」

突然出久の右手を天之助の両手で挟み込んだ。暫くすると、水が溢れるように出てきて、出久の負傷した部分に覆うように留まった。その時

出「…え!？」

不思議なことに出久が負傷した部分は、みるみる無くなり、何事も無かつたかのように綺麗さっぱり消えていた。

「「え!？」」

目の前で起こった事にクラスメイトも驚いている。

法「これで良し。」

出「え! ちょっと待つて! 今何をしたの!？」

法「何つて… ただ傷を露<sup>うるお</sup>しただけだよ。デツクン。」

出（露した？ それってどういう…）あと、デツクンつて… 僕のこ  
とだよね？）

相（なるほど… あれがリカバリ・ガールのような治癒能力の正  
体か…）

相澤は何処か納得した顔をしていた。

まーそれはそれとして

第6種目 上体起こし

ここは雷の出番。霹靂は移動手段なので、普通に雷でやる。相手は切島だ。

シユババババッ！

切「うおお!? コツチが吹つ飛ばされそーだ！」

法「あ～ごめ～ん。」（上体起こしながら）  
切（上体起こしやりながら普通に喋つてやがる…）

記録 1423回

切「バケモンじやねーか！」

### 第7種目 長座体前屈

記録 完全に閉じれるくらい。（単にどれくらいか忘れた）

((((まあ、今までのと比べたらこれが普通か…)))

### 最終種目 持久走

最後は霈。<sup>ひさめ</sup>（音読みでハイ）大雨という意味らしいが、他にも、「水の流れが盛んなさま」という意味もあるらしく、俺はそれを利用して、スイスイ滑るように進んだ。簡単に言えば、サーフィンかな？ 結果的に俺がバテるまで終われなかつた。（バテる気配0）

こうして個性把握テストは全て終えた。

相「んじや、パパつと結果発表。トータルは単純に各種目の評点を合計した点数だ。口頭で説明すんのは時間の無駄なので一喝開示する。」

開示された結果を見ると、ダントツで俺が1位だった。

法（予想通りの結果になつたかな。あと爆豪が俺の事スンゴイ睨んでるのが、背中で分かつてしまう…）

相「あー後、ちなみに除籍はウソな」

「「「「!」」」

相「君らの最大限を引き出す合理的的虚偽」

「「「「は——————!!」」」

八「あんなのウソに決まっているじゃない。ちょっと考えればわかりますわ。」

法（いやいやヤオモモさんや。あの人は見込みが無かつたらマジで除籍させるめちゃ厳しい人だかんな。）

相「つーわけで、これにて終わりだ。教室にカリキュラム等の書類

あるから目え通しあげ。明日からもつと過酷な試練の目白押しだ。」

法 「いやー終わった終わった。」

切 「ああ。つーかやつぱお前が1位だよな！」

法 「まあねえー。」

「おおい！」

俺を呼び止めたのは… 爆豪であつた。

法 「何でございやしょう？」

爆 「テメーは俺が必ずブツ殺す！そして俺がN〇・1になる！それまで覚悟しあげ！水溜まり野郎！」

そう言つて去つて行つた。

法 「水溜まりて…」

## 【お馴染みの】プロフィール紹介

こちら辺でオリ主紹介しておこうと思います。話数的にも丁度いいかなーと。ではどーぞ（？ ）？スツ。

法雨 天之助  
みのり そらのすけ  
あめかんむり

個性：雨冠

“雨冠の付く漢字ならなんでもイメージで再現出来る。”

身長：165cm

好きな物：修行・コンソメ味ポテチ・母の手料理・猫

神様のミスによつてテンプレ死亡してしまつた本作のオリ主。お詫びとして（僕のヒーローアカデミア）の世界に第2の人生を送らせてくれる事とオリジナル個性“雨冠”を貰い、後に神様から（雨傘剣天雨）を渡された。今の所、個性による本人へのデメリットは無い。

本人の性格と特徴

面倒くさがりな所もあるが、基本優しい。やると決めたらやる覚悟を持ち合わせている。勉強面では優秀な方。修行が好きで、隙を見つけてはやつてている修行バカ。面倒くさがりな癖に修行だけはする。容姿は黒髪で先端が水色のややオールバック。目の色は普段は乳白色だが、天雨と連動させることで、虹色になる。

個性“雨冠”について

上部に書いてある通り雨冠ならなんでもいい。その中で編み出した技の一部を見せようと思います。

電  
だん

電を銃弾に見立てた技。指ならパチンコ玉、天雨なら拳銃と同レベルの威力ですが、テストで見せた「電霸遠弾」の場合は大砲をイメージして撃つた感じ。大砲には『射程』『精度』『発射速度』『機動性』『貫通力』等が主に必要となるのと、霸を入れてイメージした結果、通常の大砲より数倍の威力となつた。他にも様々な銃の種類を模したものが存在しているが、それはまた追追に。

### 霹靂

雷から産んだ移動手段。雷移動とはまた違ひ、移動法に極振りしたため、攻撃性はやや劣るが、通常よりも更に速いスピードを出す事に成功した。速すぎて残像ができるほど。現場に直行する時や、相手を翻弄する時に使う。

### 雷落槍

一撃必殺級の大技。雷雲を生成し、天雨で上から突き刺す。この時は加減はしていたが、それでもかなりのダメージは与える。フルでやると、確実に感電死は愚か、肉や骨すら残らない。

### 雲霄

雲に乗つて空を飛ぶ筋斗雲のようなもの。自分以外の者は300kgまでなら乗せられる。最中滞空時間約168時間（およそ1週間）（実証済）

### 霧滑渾

サーフインをしている感覚で移動する。この時出る噴射水で叩くように攻撃する事も可能。雨を降らせる事で、水かさが増し、濁流にもなる。

### 霧癒恵

回復系。「負った傷を霧す」というイメージをした結果、治療の97%の回復に成功した。但し、切断されてしまつた部分は元に戻らな

い。

雨  
傘  
劍  
天  
雨

神様から貰った傘。貰つて以降、常日頃持ち歩いている。その精度は凄まじく、意識して振ると、剣のよう斬れたり、どれだけ攻撃を与えて、無傷で済むほどの耐久性を有している。また、天之助の個性を大幅に強化してくれる効果もあり、そのおかげで個性の精密動作性も更にパワーアップした。

というような感じです。元々自分は妄想好きで、様々な妄想をしました。この小説もその一つです。書きやすいならコレかなと思いついてきましたが、思つたより読んでくださつてる方々が居ることに驚きました。（ 。 ） そんな方々に応えられるかどうか分かりませんが、自分が書きたいように書かせていただくことを申し上げます。それではまた次回（ \* ； 一 ； \* ）ノ”

## 〈一度は目にする〉 戰闘訓練

今日は戦闘訓練の日。あ～早くしてえなう。新しい技でやつてみたい奴があるから早く午後にならぬかなく。

フ「さて、こん中で間違つてんのはどれだ?」

(((((普通だ…))))))

(クソつまんねえ…)

(あーアレだな。)

普通授業が終わり、場所は食堂へ

切「お前はあんま食わないんだな。」

法「うん、太りにくいというか、食つてもすぐ出ちゃうからな。俺。」

上「因みに今何キロ?」

法「えー今は確か52kg前後だつたかな。」

飯「何つ!君の今の身長でそれは少し痩せすぎだ!君はもつと食べたほうがいい!」

法「いやだから食つたらすぐ出るんだつて。」

午後……遂に来た…

オ「わーーたーーしーーがーーーーー、普通にドアから來たーー!!」

法(待つてました!)

「オールマイトだ…!!すげえや 本当に先生やつてるんだな…!!」

「シルバーイジのコスチュームだ!」

「画風が違ひすぎて鳥肌が………」

俺の世界じやアニメだから気にしなかつたけど、こうして見ると、ホンマ画風違うな。

オ「ヒーロー基礎学!ヒーローの素地を作る様々な訓練を行う科目

だ!!早速だが今日はこちら!戦闘訓練を行つてもらう!!

オールマイトは「B A T T L E」と書いたカードを見せた。

((((((( 戰闘訓練: : )))))) )

オ「そしてそいつに伴つて…こちら!!」

すると壁から番号の書かれたスチールケースが出てきた。

オ「入学前に送つてもらつた個性届けと要望に沿つてあつらえた…

コスチュームだ!!」

「「「「おおお!!!」」」

オ「着替えたら順次グラウンド・ $\beta$ に集まるんだ!!」

「「「「はい!!」」」

それぞれが着替えを終え、グラウンドに集合した。  
上「へー、中々似合つてるじゃねーか!」

切「ああ! 法雨つて感じがして、カッケーゼ!」

法「ふふ、どーも。2人もかつこいいよ。」

俺のコスチュームは群青色のレインコートで、右腕に「雨天候」、左腕に「R A I N Y」と書かれている。そして、シンプルな白い長靴。大きく顔に「雨」と書かれた仮面を付け、左手には雨傘剣天雨を持っている。

オ「良いじゃないか皆!! 最高にカッコイイぜ!!」

飯「先生! ここは入試の演習場ですがまた市街地演習を行うのでしょうか!?」

オ「いいや! もう2歩先に踏み込む! 屋内での対人戦闘訓練さ!! 君らにはこれから(敵組)と(ヒーロー組)に分かれて2対2の屋内戦を行つてもらう!!」

蛙「基礎訓練もなしに?」

オ「その基礎を知る為の実践さ! 但し、今度はぶつ壊せばオツケーな口ボじやないのがミソだ。」

確かに入試の時は口ボだつたけど、ヴィランとて人だ。その力加減

を学ぶ為の訓練でもあるからか。

「勝敗のシステムはどうなりますの？」

「ブツ飛ばしていいんスか」

「また相澤先生みたいな除籍とかあるんですか…？」

「俺ら21人なんすけどーするんですか？」

「分かれるとはどのような分かれ方をすればよろしいですか？」

「このマントヤバくない？」

オ 「んん～～聖徳太子イイ!!」

オ 「いいかい！状況設定は（ヴィラン）がアジトに（核兵器）を隠している！（ヒーロー）はそれを処理しようとしている！（ヒーロー）は制限時間内に「ヴィラン」を捕まえるか「核兵器」を回収すること！（ヴィラン）は制限時間まで「核兵器」を守るか（ヒーロー）を捕まえること！」

オ 「コンビ及び対戦相手は……くじ引きだ！」

飯 「適当なのでですか？」

緑 「なるほど…プロは他事務所のヒーローと急造チームアップすることも多いからじゃないかな？」

飯 「そうか！先を見据えた計らい、失礼いたしました！それと先生！我々の人数は21人です！2対2なのならば1人余ってしまう事になります！」

オ 「H A H A H A ! その事なら心配いらないよ！何故かつて？それ  
は…」

オ 「法雨少年が別枠として控えているからさ!!」

え…。え…。?

法 「え!?俺え!」

「どうゆう事だ!?」

「法雨が別枠!?」

「先生！説明してくれよ!?」

オ「まあまあ落ち着きたまえ。驚くのも無理はない。あまり知られていないが、実は法雨少年は入試の際、ダントツの主席合格で特待生となつたからさ！」

飯 「何!?法雨君が特待生!?」

麗 「えー!?てことは、めっちゃ凄い人!?」

八 「噂には聞いておりましたが、まさか法雨さんだつたとは…」

切 「おい、法雨！何で言つてくれなかつたんだ!?」

法 「いや、だつて聞かれなかつたから…」

皆がスンゴイ攻め寄つてくる。だつて自慢話とか得意じやない

し :

轟（なるほどな… それならテスト時のあの規格外さにも納得がいく…）

爆（へつ、そーゆ一事か… なら、更にブツ殺し甲斐があるつてこつた… !）

オ「法雨少年には皆の訓練が終わつた後、法雨少年と代表2人で戦つてもらう！」

法（2人があー、ちとキチイかー?）

オ「さあ！理解した所で、早速くじ引きといこう！」

各々がくじを引き、決まつた所で、訓練が開始された。そして時は流れ… 各訓練が終わり…

オ「皆お疲れ様！良い訓練だつたよ！そして！法雨少年と戦うのだ  
がそれは誰が「俺だ!!」つと爆豪少年!?」

轟 「俺がやる！」

オ（爆豪少年… カなり本気のようだ…）

オ「ふむ… そこまで本気の目をされてしまつてはしようがないな！では1人は爆豪少年！あと1人はどうする!?」

誰が行くか皆がザワザワしていると、

轟 「俺がやります。」

オ「轟少年！」

轟「俺は俺自身の力でコイツにどこまで通用するのか確かめてみた  
い。」

オ「なるほど！ 法雨少年の意見は？」

法 「大丈夫です。問題ありません。」

オ「OK！ それでは特別訓練と称して、法雨少年対爆豪・轟少年ペ  
アの戦闘訓練を行う！」

こうして決まつた俺（敵組）対爆豪・轟（ヒーロー組）ペア。予想  
はしてたけど、どつちも強えからな作戦ネリネリしこんと…

それぞれ所定の位置に着いて、始まる合図を待つていたそして…

ヴウウウウーー！

特別訓練が始まつた。

轟 「さて、どうする？ 爆豪？」

爆 「速攻でブツ殺す！」

そう言つて爆豪と轟は核兵器のあるアジトへ向かつてゐる最中、

ヒュウウウウウウ：

轟 「ん？ ちょっと待て！」

爆  
ん  
だ  
よ

2人は目を疑つた。何故この月にこの光景が目に移つてゐるのか、現実なのかと。

轟「これは…」

爆  
—アアン…  
?

ビユウウウウウウウ：

何故4月に、吹雪が吹き荒れているのかと

雨冠はチート？

ビュオオオオオオオオ：

轟「これは一体…」

爆「んなことすぐに分かんが。水溜まり野郎の仕業だろ。」

モニタールーム

「どーなつてんだ!? 今4月だろ!?

「何でこんなに吹雪いてるの!?

「これも法雨の個性なのか!?

しかもただ吹雪いでいる訳ではない。その範囲はこの演習場をまるまる覆う程の雪雲に包まれている。

オ（法雨少年よ、そいつは規格外にも程があるってやつだよ！）  
緑（なんて広範囲…！今の年齢で考えれば、相当キツいはずだけど…）

飯「先生！彼の個性はどのような物なのでですか!?

オ「おや?、本人から聞いていないのかい?」

飯「ハイ！詳細は聞いておりません！」

オ「そうか…では教えよう！彼の個性の名を！それは！」

「「「それは…!?」」

オ「それは…『雨冠』さ！」

「「「「「雨冠?」」」」

オ「そう！」

上「えー、つまり?」

芦「つまり…」

切「微妙に分かんねえ!」

飯「意味は分かるが具体的な能力が…」

緑（個性の名前は“雨冠”。そうなつてくると考えられるのは…：今までのことを思い出せ！ 雲に乗れる事… 雷みたいに速く動ける事… 他には… うん？ 待てよ？ 雲？ 雷？… 雨の漢字… まさか！）

緑「そうか！ そういう事か！」

麗「おお！ デクくん何か分かった!?」

緑「法雨くんの個性、“雨冠”的能力は…： 雨冠の付く漢字が関係しているんだ！」

(((((!?))))))

オ「H A H A ! 緑谷少年！ 大正解だ！ その通り！ 彼の“雨冠”的能力は、雨冠の付く漢字を再現する能力なのさ！」

((((('ええ?''))))

蛙「そくなつてくると、かなりの数になるわね。」

切「だよな！ どんだけあるかは知んねーけど！」

峰「雨冠の漢字だけでどれくらいあんだけよ！」

八「少なくとも、意味のある物で40以上はありますわ。」

上「最早チートじやねーか！」

天之助 s.i.d.e

現在アジトの中

法「ようし、いい感じに吹雪いてきたな。やつぱ??だと雲出すのが

手つ取り早く済むな。そして、霊<sup>えいほう</sup>?のコンボ、良いねえ。それじゃ、2人が今居るここまで直行するか。」

轟・爆豪 side

轟「こりや、かなり厳しくなりそうだが…」

爆「ハツ！ビビつてんのか？じやあテメエはさつさと帰るんだな！その間にオレが水溜まり野郎をブツ殺 s 「誰が水溜まり野郎だつて？」！」

2人が振り向いた先には何と天之助が居た。所定位置の場所は知らされていない筈だが…

爆「ソツチから出向いてくれるなんざありがてえな！んでもつて、死ねええ！」

爆発音とともに爆豪が突っ込んできた。

法「おおつと？」

爆「オラア!! バゴオーン！」

爆豪が爆破を放つたが、

法「フフツ。シユンツ!!

それを天之助は瞬時に霹靂で避けた。

爆「ツ?!チイツ！」

天之助は一旦2人から距離を置いた。

法「やっぱし爆発範囲広いなあ。気一付けんと。」等と考えてると、轟が話しかけてきた。

轟「なあ。お前に1つ聞きてえんだが、良いか。」

法「んー？何ー？」

轟「お前： 何で俺らの居る場所が分かつた？探し回るにしても早過ぎると思うが？」

法「あー、それね。それはね〜〜、ここさ。」

俺は心臓の方を指差した。

轟「…心臓？」

爆「フザケてんのか!!」

法「いやいやマジマジオーマジオウよ。ほら、もつと他に意味あるでしょ？ここń。」

心臓に関係している言葉それは

轟「心臓…：広く考えりや魂…：魂に関するのは…」

爆「…：そういう事かよ。テメエ、オレたちの居る場所が靈たましいで分かつたつて事か！」

法「フツフツー、ご名答♪」

そう。使つたのは靈。「生物の魂を見る」とイメージしたら、よく知る火の玉が見えるようになつた。しかも生物によつて色味や形が違つてくるので、誰が何処にいるかも分かる。射程範囲は60km。2人の場合、爆豪はとても荒々しく周りが常にバチバチいつてる。危なつかしい。轟はなんか静かだけど色が濃い。静かなる闘志つてやつかな？

技名：靈探心視れいたんしんし

轟「つまり誰が何処にいても、すぐに割り出せちまうのか」

法「そゆこと。」

轟「おい！いい加減おしゃべりはいい！さっさと戦え！」

法「スマンスマン。話しあんじやつたな。んじや…」

## 雷神・天之助

法「んじや、戦いましょうか。」

こうしてようやく始まる吹雪の中の戦闘。先に仕掛けたのは

轟「オラアア!!」

爆豪。またしても突っ込んでくる。

法「それはさつき見た。」 シュツ!!

先程同様、霹靂で避ける。しかし、避けた所に

轟「フンツ！」 ビキビキッ！

轟の氷攻撃で足の関節部分まで凍つてしまつた。

法「ありや？」

爆「半分野郎！余計なことしてんじやねー！」

轟「俺はコイツにどこまで通用するか試してるだけだ。」

爆「うるせえ！水溜まり野郎をやるのはオレだ！」

轟「だつたら2人でやりやあいいんじやねえのか？」

爆「誰がテメエとなんかやるか！オレ一人でやるつつてんだよ！」

2人が少し揉めてる最中

法（どーしよつかなーこの氷。アレでいくか？うーん、でもアレうるせえし、近所迷惑になりそうだし……アツチにするか？範囲を抑えれば、ギリ大丈夫っぽいかな？よし、これでいこう。）

天雨を振り下ろす姿勢で上げた。

轟「ツ！アイツ！何かする気だぞ！」

爆「アアン!?やらせるかー!!」

法（ちよいと遅かつたな。バツクンよ。激しい揺れにご注意ください。範囲集中：：！）

法「ぬううん!!」

ドゴオーノン!!

爆 「くつ!?」

轟 「ぬおつ!?!」

上 「うわ!? 地震!?」

麗 「頭守らんと!」

飯 「いや待て！ 爆豪君が突撃する前に法雨君は傘で地面を叩いた気がする！」

葉 「てことはこれも法雨くんの仕業なの!?」

麗 「つて、あ！ 地震か！」

緑 「……そうだ！ 地震の震も雨冠だった！」

天雨で地面を叩く、するとオモツクソ揺れる。はい、「震」です。シンプルに「震」です。揺れる範囲は狭められたと思う。制限なくやつたら、災害レベルになりかねん。あとは名付けるなら震撃一突かな？

爆 「クソが！」

轟 「吹雪の次は地震かよ。」

法 「どう？ 驚いた？」

爆 「誰が驚くか！」

法 「そう。それとそろそろ体が堪えてきたんじゃない？」

こんな猛吹雪の下に何時までも曝されていてはもう限界が近いは

す。

爆  
「こんなもんちつとも寒くねーわ！」

法一まいまい そう強かりなせんなりと得てな直ぐに晴らす

九

そう言つて天雨を拔刀術の構えで意図的

卷之三

霽天日和

ブオント！

アワアツ!

爆轟

なんという事か。彼が天雨を上へ振るつた瞬間、つい先程までの猛吹雪が嘘のように、一瞬にして晴れに様変わりしているではないか。

法「だから言つただろ、直ぐに晴らすつて。」

芦 「あれ!? さつきまで吹雪だつたのが!」

八 「晴れていますわ！」

切  
—マジか！そんな事も出来んのか！

峰 こんなんモリト確定だ!!

紅一漫い  
漫い過ぎるよ 法雨君！

才（やれやれ……）君は何回我々を驚かせれば気が済むんだ！法雨少

年！）

法「さーてと、これで心置き無く戦える訳だけど、2人には少し俺の技の手合させ人として付き合つて欲しいんだけど。」

轟「つたく、今度はなんなんだよ。」

爆「何だろうが関係ねえ！やつてやるからさつさとしろや！」

法「へいへい、んじや。」

天之助は構え、気を集中させる。

ビリビリ：

法「ハア―――――。」

ビリビリ

すると天之助が宙に浮き、電流が彼の体中を走る。そして、

法「ハア!!」

バリバリバリバリ!!

2人はとっさにガードした。光が落ち着くと、2人が目にした者は：

爆「…………!?」

轟「何だよ、その姿!?」

天之助のその姿は、全身が蒼白く発光しており、電気がバチバチと鳴り、背中には雷神の太鼓の様な物が浮いており、更には、龍の様な物が2匹、周りを漂っていた。

法「これか？そうだなあ……名付けて言うなら…………。」

▣<sup>れい</sup>

?  
露かな？つつても、この形態はまだ未完成だけど。」

轟「それがどおしたー！」

爆豪が臆せず再度突っ込む。

轟「死いねえー！！」

法「……」

BOOOOMB!!

強烈な爆破を放った。

轟「ハツ！粹がってんじやねーぜ！」

確実に入つたと誰もがそう思つた。が、

法「なんなんだア……今のはア……」

轟「ナニイ!?」

轟「……もう驚くのにも疲れてきたぞ。」

法「ハツハ。クリティカルヒットしたと思つたか？残念だつたな。  
人間がどうやつて雷を倒すというのだ。」

轟「ふざけやがつてえー！」

法「さあ、次は轟、お前の番だ。どこからでもかかるつて来い。」

轟「挑発のつもりか？だが乗らせてもらうぜ！」

轟の冷氣が増してゆく。

轟「ハア!!」

氷が瞬時に天之助を覆つてゆく。見る見る内に、天之助は氷の厚み  
で見えなくなつた。

轟「……どうだ？」

ビキツ

轟「！」

ビキビキッ

轟「マジか…」

バツキーノン！

天之助は何事もなかつたかの様に平然としていた。

法「ただ凍らせるだけでは、我に意味は成さんぞ。」

轟（やつぱここで使うべきか？いや、これだけで戦うつて決めてんだ！）

法「それでは、今度は此方からいくぞ。」

天之助が右手を挙げ、2人は身構える。何が来るのか想定できないからである。

法「身構えるのはいいが」

シユツ。

法「敵が瞬間移動でもしてきたらどうする？」

「!?」

またしても後ろに立たれる。攻撃しようとしたが、遅過ぎた。何故なら…：

霎霆しょうてい

バンツ!!

爆・轟「ガハツ!?」

既に攻撃されていた。

爆「チキシヨウ‥‥」

轟「ク‥‥ツソ‥‥」

2人が気絶したのを確認すると、元の姿に戻った。

法「安心しな、だいぶ手加減して打つたから。それとすまねえな、2人共。出番あんまり見せれなくて。けど、圧倒的な奴が近くにいれば、もっと強くなれると俺は思うよ。」

かくして天之助の敵チームの勝利に終わった。

## マスコミ、委員、昼飯と説明

訓練終わつて帰つて来たら、どちらそ質問責めされた。なんとかは予想してたが。そりやそうか。吹雪降らせるわ、いきなり晴らすわ挙句には雷になるわ。聞きたい事は山ほどあつただろうね。あらかた説明したら、納得してくれた。

所変わつて翌日。校門前にやたら人集りができる。マスコミだ。オールマイトが教師になつたから、その取材だろう。その中にデックンとお茶子ちゃんらしき人影が見える。巻き込まれたのか。どうしよう、昨日あんだけ質問責めされたのに、今日も質問責めとか勘弁願いたい。

「あつ！雄英の生徒だ！すいませーん！」

あ、やべ、ロックオンされた。コツチ来んなよ。ヤダよ。捕まりたくねえよ。こうなつたら！

「すいません！ちよつとい・（ビュンツ！）…え？」

ステップ！≡ ? (   ) / ステップ！≡ ((((( (つ・ω・) つ  
スススのステップ！≡ 「( 、 ०^ )」

自前の身体能力の身のこなしでマスコミの集団を瞬く間に搔い潜り、

緑「うわっ！」

麗「わわっ！」

デックンとお茶子ちゃんの手を引き、何とか抜けられた。

法「ふいぐ。2人共大丈夫？」

緑「う、うん。何とか…」

麗「ありがとう。助かつたよ。」

法「どいたま」

またマスコミに捕まらない内にさつさと教室に向かつた。

相「昨日の戦闘訓練お疲れ様。Vと成績を見させてもらつた。自豪。お前はもうガキみてえなマネすんな、能力あるんだから。」

爆「…わあツてる。」

相「で、緑谷はまた腕ブツ壊して一件落着か個性の制御。いつまでも『出来ないから仕方ない』じゃ通させないぞ。俺は同じことを言うのが嫌いだ、それさえクリアすればやれることは多い。焦れよ緑谷」

緑「つはい!!」

相「それと法雨。制御できるからとはい、アレは流石にやりすぎだ。それで慢心してるなら改めろ。慢心してる奴は大抵碌なモンじやない。」

法「分かつてます。」

相「さて、HRの本題だ。急で悪いが今日は君らに…」

((((また臨時テスト!))))

モノではないだろう！周囲からの信頼あつてこそ務まる聖務！民主主義に則り真のリーダーを皆で決めるというのならこれは投票で決めるべき議案！」

と中々説得力のある言葉だ。が……

(((((腕そびえ立つてんじやねーか!))))))

法（その腕が無ければもつとあつたよ。説得力……）

上「なんで発言した!?」

蛙「日も浅いのに信頼もクソもないわ、飯田ちゃん。」

切「そんなん皆自分に入れらあ」

飯「だからこそここで複数票を獲つた者こそが真に相応しい人間と

いう事にならないか？どうでしようか！先生！」

相「時間内に決めりや、なんでもいいよ。」

そう言つて相澤先生は寝袋に入つて寝た。

そして投票結果はと言うと……

俺が委員長になつた。なして？どうやら俺に3票入つてたようだ。  
おい、誰だ入れたヤツ。

相「つーわけで、委員長が法雨、副委員長が八百万に決まりだ。」

八「悔しいですわ……」

俺なんか悔しくもなんともないよ。ねえ誰か変わつてくんnaせえ  
よ。

昼時。食堂に来ております。

麗「にしても人が多いね」

飯「ここはヒーロー科のほかにサポート科や経営科の生徒もここで  
食べるからな。」

法「にしても何で俺え？務まる感じしないよ。」

緑「法雨君ならきっと上手くやれるよ！」

飯「緑谷君の言う通りだ！委員長に任命された以上、務めを果たさねば名折れになつてしまふ！自分の出来る事をしつかり全うするんだ！俺は応援してるぞ！」

法「あー、うん。ありがとう…でも、それを言うなら飯田君は委員長になりたかったんだよね？」

飯「そ、それは…やりたいか否かの判断は別として僕は僕の正しい判断に従つたまでだ。」

緑・麗「僕!?」

飯「あつ…」

法「僕？俺じゃなくて？」

麗「前々から思つてたけど、飯田君つてもしかして…坊ちゃん？」

飯「…ぼつ?!…そう言われるのが嫌で一人称を変えていたのだが…」

更に話を聞くと、飯田家は代々ヒーロー一家で、彼の兄こと「インゲニウム」に憧れ、この雄英に来たと言う。しかし、自分には人を導くのは早いと、デツクンに入れたらしい。

緑「アレ飯田君だつたの！」

法「んー？じやあ俺に入れたのは一体？」

麗「私は入れてないよ。」

緑「あ、その、えと…君に一票を入れたの…僕なんだ…」

法「ふーん…そつかーデツクンかー…」

緑「み、法雨君？」

法「いや、今はもうめんどいから辞めたけど、もし俺に入れた奴見つけたらヌツ殺すつもりだつたからな。（？　？　？　？　？）」

緑・麗・飯（笑顔で凄く怒つてる!!そんなに嫌だったの（か）!?)そんな事を言つてると、お茶子ちゃんが話を変えるべく、俺に質問してきた。

麗「そ、そういうえば！法雨くんの個性についてもつと詳しく聞きたいなー！」

緑「（ナイス麗日さん！）そ、そうだね！法雨君の個性“雨冠”、僕も凄く興味あるよ！」

法（無理矢理変えた感あるけど、まいつか。）

法「良いよ。これから長い付き合いになるんだから話しておいても良いかな。んじゃ、俺の個性『雨冠』についてもう少し言及してみようか。では質問どぞ。」

飯「まず、b：俺からいいか？訓練が始まった直前、吹雪を発生させていただろう？雪を降らせるのにも雲がいる。しかしあれだけの範囲の雲ともなると、最低でも数秒は掛かる筈だ。どうやって出したんだ？」

法「あーそれね。それはねえ…雲は？？雪は霧？を使つたからだな。」

緑「イイン？」

麗「エイホー？」

法「そう。??のは【雲がもくもくと起こるさま】？は【曇くもる・陰かげる・雲が太陽を覆ふくう】とかの意味を持つてる。それらを合わせることによつて、あれだけ早く広げられたつてわけ。」

飯「なるほど…？」

法「で、霧？の霧は（みぞれ）の事で、？は【雪がさかんに降ふるさま】つて意味。最終的には猛吹雪になつたけど。」

麗「そーなんだく。」

飯「では次に、あの猛吹雪を一瞬にして晴れにしていたが、あれは？」

法「それは霧せいくてんびより天日和ひわだね。霧は【晴れ渡わたる】の意味があるから、猛吹雪さえも瞬で吹つ飛ばすのよ。」

緑「じ、じやああの雷神みたいなのは!?かつちやんや轟君を一瞬で倒す程に強かつたけど！」

法「…それはね、▣・?れい靈ほうりゆうと俺は呼んでる。」

緑「う、うん…」

麗「名前からして、何か強そう！」

法「そもそも『?靈』つてのが雷神を意味してて、▣は（おかみ）とも読めて、【水、雨、雪を司る水の神、龍蛇の神】と呼ばれてたらしい

よ。」

飯 「なんと！そんな雨冠の漢字もあつたのか！それは俺も知らなかつた。」

法「まあその辺は中国とかそんな所からだから。そんでもつて、▣？闇の一番の特徴が『雷そのものに成れる』こと。」

麗 「えー！？」

飯 「雷そのものに!? それであの時、攻撃が効いていないように思えたのか。」

法 「そだね。あの状態なら大抵の物理攻撃とかは効かないし。」

麗 「マジか……！」

▣・？闇のあまりの強さに3人は少し引いた。

緑 「ホントに凄いね…… 法雨君は。神様級の力も持つてて」

法 「あんがと、デツクン。でもアレはまだ未完成だから調整中だぞ。」

緑 「あれで未完成!?」

飯 「今でも十分に強いと思うのだが……」

法「何を言つてんだい。俺だつてまだ学生よ？成長の真っ最中なんだから、今以上に強くならんと。」

緑（君の場合、もう色々なプロに通じるほど強いんだけどなあ。）  
様々な説明をしていると……

ブーー！ブーー！

『緊急警報発令!! セキュリティ3が突破されました!! 生徒の皆さんは屋外へと避難してください!! これは訓練ではありません。繰り返します……』

緑 「な、何だ!?」

飯 「どうやら侵入者がいるようだ！ 皆を落ち着かせねば！」

そう言つて大声で

『大丈夫!!! ただのマスコミです!! 何もパニックになることはありません！ 大丈夫!! ここは雄英!! 最高峰の人間に相応しい行動をとりましょう!!』

しかし、まだパニックを起こしている生徒が大半いる。…俺も一言だけでも言うか…

法「スウ———」

『皆さーん！ 一旦落ち着きなはれーい!!』

「？？」

するとたちまち騒がなくなつた。

法  
—はい飯田君  
もう一度

飯一あああ！分かった！

飯田君が再度呼びかけた事でハニツクも無事収まつた  
の 人 委員長に向いてるよ。

因みにさつき俺は個性を使つた。それがこちらの雨冠（ ～ 〇 ～ ）  
?? 読み（コウ、ショウ、ソウ、トウ）と読む。雨関係もあるが、【や  
かましい】という意味もあるそう。

どうやらマスコミが大勢侵入したようで、警察が来た途端、足早に去つて行つた。雄英の防衛システム、雄英バリアー。（ナマエダサツ）防衛性能が働かなかつたのか、それとも誰かの仕業なのか。用心するに越したことはない。

## 嵐の前の静けさ

午後、飯田君の活躍によりパニックを収えられた為、俺は飯田君を委員長に任命した。本人もやる気なようで助かつたよ。ぶつちやけて言つちやうと似合わないのとめんどかつたから。ガンバ飯田君。はてさて、えーと次は… 何だつけ？あれ？ここに来てド忘れが。

・・・・・

相「今日のヒーロー基礎学だが… 俺とオールマイトそしてもう一

人の三人体制で見ることになつた。」

瀬「ハーア！何するんですか？」

相「災害水難なんでもござれ、人命救助訓練だ。」

あーU.S.Jだ。 そうだそうだ。 ヌツボリ忘れてた。

上「レスキュー… 今回も大変そうだな。」

芦「ねえー！」

切「バカおめーこれこそヒーローの本分だぜ！鳴るぜ!! 腕が！」

蛙「水難なら私の独壇場。ケロケロ」

法「俺も救助系のはあるから大丈夫かな？」

相「おい、まだ途中。今回コスチュームの着用は各自の判断で構わない。中には活動を制限するコスチュームもあるだろうからな。訓練場所は少し離れた場所にあるからバスに乗つていく。以上準備開始。」

俺はコスチュームを着ていこう。レインコートまんまだし、雨の中の救助もあるかもしれないし。

飯「みんなー！バスの席順でスマーズにいくよう、番号順に2列で並ぼう！」

と笛を鳴らしながら皆を纏めるべく、しつかりと委員長を果たそうとしている。やつぱ変わつて良かつた。

緑「飯田君、フルスロットル…」

こうしてバスに乗つたのだが

飯 「くそぅ、こういうタイプだつたか…」

芦 「意味なかつたなう。」

乗るバスは前の部分が対面式の座席で、結局は好きな席に座る事となつた。DONMA I I DAだね。

蛙 「私、思つたことは何でも言つちやうの。緑谷ちゃん。」

緑 「あ!? はい!? 蛙吹さん！」

「梅雨ちゃんと呼んで。」

緑 「つ、つつ」

蛙 「あなたの個性オールマイトに似てる。」

緑 「えつ!? そそそうかな?! いや、僕はそのえと…！」

切 「待てよ梅雨ちゃん。オールマイトはケガしねえぞ。似て非なるアレだぜ?」

まあそりや言えんよな。自分がオールマイトの個性受け継いだなんて。機密事項だし。俺は知つとるけんど深堀はせんとこ。今後の為にも。

切 「しかし増強型のシンプルな個性はいいな！ 派手で出来る事が多い！ 俺の硬化は対人じや強えけど、如何せん地味なんだよなあ。」

緑 「僕はすぐかつこいいと思うよ。プロにも十分通用する個性だよ！」

切 「プロなー!! しかしやっぱヒーローも人気商売みてえなとこあるぜ？」

青 「僕のネビルレーザーは派手さも強さもプロ並み??」

芦 「でもお腹を壊しちやうのはよくないね。」

青 「うつ…」

法 (純粹は時に人を傷つける。ハツキリ分かんだね。)

切 「派手で強えつつたら、やつぱり轟と爆豪と法雨だよな！」

爆 「ケツ」

法 「そーかな？」

蛙 「でも爆豪ちゃんは切れてばかりで人氣でなそう。」

爆 「んだとコラ出すわ!!」

蛙「ホラ。」

上「この付き合いの浅さで既にクソを下水で煮込んだような性格つて認識されつるつですげえよ。」

爆「てめえのボキヤブラリーは何だコラ殺すぞ!!」

八「低俗な会話ですこと！」

麗「でもこういうの好きだ私。」

縁（かっちゃんがイジられてる……！）（（；△。））

相「もう着くぞー！いい加減にしとけー！」

「「「「「はい！」」」」

「ホープー皆さん、待つてましたよ。」

縁「スペースヒーロー【13号】だ!! 救助活動でめざましい活躍をしている紳士的なヒーロー!!」

麗「わあー！私好きなの13号！」

中に入るととてもなくただつ広い。ココだけでどんだけ金かかったんだろ。

切「すっげー！U.S.Jかよ！」

13「水難事故、土砂災害、火事、暴風、エトセトラ。あらゆる事故や災害を想定し、僕がつくつた演習場です。その名も！ウソの災害や事故ルーム！略して、U・S・J!!」

（（（（（ホントにU.S.Jだった！）））））

あれだね。関西のテーマパークの方を想像しちゃうね。

13「えー始める前にお小言を一つ、二つ……三つ……四つ……」  
（（（（（増える……）））））

13「皆さんご存じかと思いますが、僕の個性はブラックホール。どんなものでも吸い込んで塵にしてしまいます。」

ブラックホールと聞くと某火星人を連想してしまって自分がいる。

縁「その個性でどんな災害からでも人を救い上げるんですよ！」  
その横でお茶子ちゃんがえらい速度で頷いとる。ハエエーイ。

13「ええ……しかし簡単に人を殺せる力です。皆さんの中にもそ

ういう個性がいるでしょう。超人社会は個性の使用を資格制にし、厳しく規制することで一見成り立つてゐるようには見えます。しかし、一步間違えれば容易に人を殺せるいきすぎた個性を個々が持つていることを忘れないでください。相澤さんの体力テストで自身の力が秘めている可能性を知り、オールマイトの対人訓練でそれを人に向ける危うさを体験したかと思います。この授業では… 心機一転!! 人生のために個性をどう活用するか学んでいきましょう。君たちの力は人を傷つけるためにあるのではない。助けるためにあるのだと思得て帰つて下さいな。以上ご清聴ありがとうございました。」

「ステキー！」

「ブラボー！ ブラボー！」

カツコよ。俺のも例外ではない。個性はもちろん、この雨傘剣天雨もそうだ。こいつも単体ながら殺傷力は充分にある。肝に銘じておきます。

相 「よーし、んじやまづは…」  
法 「…！」

噴水近くの奥の方に黒いナニかが現れ、その瞬間、空気が変わった。  
相 「ひとかたまりになつて動くな！」

「…！」

相 「13号、生徒を守れ！」

すると黒いナニから複数人の誰かが出てきた。

切 「何だアリヤ？ また入試の時みたいにもう始まつてるパターン？」

相 「動くな、あれは… ヴイランだ！」

「…！」

法 (来たか… 死柄木弔さんよ…)

## マンインオンレイ

「13号に…… イレイザーヘッドですか…… 先日頂いた教師側のカリキュラムではオールマイトがここにいるはずなのですが……」相「やはり先日のはクソ共の仕業だったか」

「ど、だよ？ せつかくこんなに大衆引き連れてきたのにさあ。オールマイト…… 平和の象徴…… いないなんて…… 子供を殺せば来るのかな？」

法（アレが敵<sup>ヴイラン</sup>。途方もない悪意…… か。）

切「敵ツツ！ バカだろ！ ヒーローの学校入り込んでくるなんてアホすぎるぞ！」

八「先生、侵入者用センサーは!?」

13「もちろんありますが……！」

轟「現れたのはここだけか学校全体か…… 校舎と離れた隔離空間。そこに少人数が入る時間割…… バカだかアホじやねえ。これは何らかの目的があつて用意周到に画策された奇襲だ。」

相「13号、避難開始！ 上鳴、お前の個性で連絡を試せ」上「つス!!」

緑「先生は!? 先生は一人で戦うんですか!? あの数じやいくら個性を消すって言つても！ イレイザーヘッドの戦闘スタイルは敵の個性を消してからの捕縛だ！ 正面戦闘は……」

相「覚えとけ緑谷。一芸だけじやヒーローは務まらない。」

そう言つて下へと降りて行つた。個性を消しながら連携を崩していく。

多人数戦も対策済みのようだ。しかし、向こうには脳無がいるから…… ん???

(；つ△) ゴシゴシ (；・) ジー

アレレ？ おつかしいな、脳無が2体居るように見えるぞ。

アイエエエ!? ナンデ2体!? 2体ナンデエエエ!?  
待て待て待て!!? 原作では1体だけな筈だろ!?

ヤバい（確信）

ともかく今は指示に従おう。と言つても…

「させませんよ。」

うん。知つてた。黒霧が妨害してくるの。

黒霧 「初めまして我々は敵連合。僭越ながら……この度ヒーローの巣窟雄英高校に入らせて頂いたのは平和の象徴オールマイトに息絶えて頂きたいと思ってのこととして。本来ならばここにオールマイトがいらっしゃる筈……ですが何か変更があつたのでしょうか?まあ……それとは関係なく……私の役目はこれ……」

切・爆 「オラア!!

ドカーン!!

切 「それまでに俺たちにやられることは考えてなかつたか?」  
しかし効いたかのように思えたが黒霧には効いていなかつた。

黒霧 「危ない危ない……。そう、生徒といえど優秀な金の卵……」

13 「!!ダメだ、どきなさい2人とも!」

散らして、斃り殺す

そして皆が黒い霧に包まれていった。

うーん……お?ここは……火事?火災ゾーンか。

法(さーてライト、ここまで原作通り。だがどういう事だ?何故1体だけの筈の脳無が2体になつてんの?まさか俺が介入した事によつて、一部改変が起こつたのか?)  
そんな事を考へていると…

「「「へへへ…」」  
敵だ。

「よおく僕ちゃん。お前に恨みは無いが s… グボア!?」  
「な!? 居ない!? 一体ど k… グハア!?」

「ひつ!？」

法「個々の個性も知らん癖して粹がるのはダメでしそう。もーちつと情報集めて来いよ。」

「ひつ… …こ、こんなのは聞いてないぞ!？」

法「そりやそでしょ。てーい。」

「グギヤア!？」

やれやれ? (?) (?) (?) 皆もこんなの大にならない様に、気を付けましょうね。

「おい…こっちにも居たぞ！」

おーおー、群がる群がる。広範囲技も幾つかあるけど… …あ、アーレがあるな。威力抑えりや、死なないでしょ。

「死ねやアア!!!」

敵が突っ込んで来る。が、俺には特に関係ないけど。  
ブンブンと天雨の持ち手の引っ掛け部分を回転させていると、

「な、何だ!？」

「なんつー風だ!？」

「巻き込まれる!？」

はい。思う存分巻き込まれちゃってください。

法「ソイヤア!」

「「「「うわあああ?!?」」」

霾とは。巻き上げられた土砂で空が曇ること。風に巻き上げられた土砂が降ることを意味する。

この時、風と一緒に土も生成されている。知らんけど。まあそれが敵にべしべし当たつてるから良いや。（イインカイ）

バタバタと敵が落ちてくる。全員気絶しているようなので手間が省けるつてもんだ。とりあえず集めて一塊にでもしておくかな。

「おーい！ 法雨ー！」

「おや。確か尾白君だつたか。」

尾「ああ。お前もココに飛ばされたんだな… つてええ!? 此奴らもしかして全部法雨がやつたのか!？」

法「そだよ。軽くあしらつた程度だけど。」

尾「ええ…」

法「ちよつと此奴らまとめときたいから手伝つてもらえる?」

尾「あ、ああ。」

しばらく俺と尾白で敵を1箇所にまとめておいた。

「う、うーん…」

法「当身。」

「うつ!」

法「そーいやそつちつてどうだつたの? 敵。」

尾「あー俺は逃げるの専念したから戦闘はしてないかな。」

法「そつか。まあそれも1つの手か。」

無理に戦う事もない。逃げてもいい。そういう時もある。

尾「それじやあ、皆と合流しよう。」

法「了解（・・・）ゞ」

俺らは広場の方へ向かっていると、オールマイトが脳無と対峙している真っ最中だった。最終的には脳無を遙か彼方へ吹つ飛ばすのだが、脳無は2体。流石のオールマイトも荷が重すぎる。

死「脳無は対平和の象徴の怪人… いくらお前でもそれを2体も相手するのは可哀想か! フフフ…」

オ（くつ! 1体だけならまだしも、2体は流石にヤバいな! だから

といつて、ここで引くわけにもいかん!!)

死「頑張るね。それが何時までもつかな?俺的には早くリタイアするのをオススメするよ。」

オールマイトが1体の脳無に殴りかかろうしたその背後から

「ウガアアアアアアア!!!」

もう1体が襲いかかってきた!

(?ヤバい!?)

緑「オールマイト!!」

法「させねえよ?」

ドゴオツ!

「グギヤツ!」

俺の蹴りで脳無は後ろへと転がつて行つたが、すぐ体制を立て直した。

オ「フンっ!!」

「グルツ!」

死「オイオイオイオイ、何だよ、あのガキイ…」

オ「法雨少年!?

法「オールマイト。「危険だから君は下がつていなさい」だなんて温いことは言わんといつくだせえよ?アナタはもう1体の方に集中してください。もう片方は俺が対処します。」

オ「しかし!脳無のあの個性は…「シヨツク吸収」…！」

法「でしょ?」

オ「そ、そしだが…」

法「なら何ら心配要りません。俺は奴を倒す術を持つている。」

オ「何ツ!?あの脳無を!?)

法「だから、大丈夫です。俺を信じて。皆がオールマイトは絶対に勝つと信じてくれるよう、アナタも俺が勝つと、信じてくださいえ。」

オ（法雨少年…！）

少し考えた末…

オ「… 分かった。だがこれだけは約束してくれ！」  
法「…。」

オ「死ぬなよ。」

法「委細承知」

死「話し合いは終わつたか？じやあ仲良く死ね。」

「グガアアアアアアア!!」

法「さてと、いっちょやつりますか。」

俺と脳無の対決が火蓋を切つて落とされた。

一方…：

切「おーい！そつちの状況は!?」

緑「大変なんだ！法雨君があのオールマイトを殺す為の脳無つてやツのもう1体とやり合つてるんだ!!」  
「「「「ええ?!」」」

「グルア！」

法「ホイツ！」

天之助は今、常時【霸】と【雷】を発動している。相手が「ショック吸收」と分かつていてからだ。なので【霸】のゴリ押しと、脳無に触れた時に【雷】を流しているので、吸收の許容を限界にまで上げている。

法「行くぞおー!!」

「グラアアア!!」

法「はくりょくてんげ霸力天下!!」

法「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ!!!」

「ギヤオオオオオオオオオオ!!」

天之助と脳無のラツシユの速さ比べが勃発した。迫力は有無を言わずとも圧巻の一言。凄まじい競り合いに皆言葉を失っていた。

緑（何て氣迫！あの脳無と互角に戦っている！）

切「なあ、アレつてオールマイト専用の敵だろ!? 法雨のヤツ、互角にやり合ってねーか!？」

轟「いや、よく見る。法雨の攻撃がアイツに当たる回数が多くなつていつてやがる！ 法雨が押してきてるんだ！」

法（そろそろアイツの出番かな。使うことがまず無いだろうけど、此奴になら容赦なく使える。）

脳無を遠くへ飛ばし、一度距離を取り、準備をする。

「グガアアアアア!!」

飛ばされても、またこちらへ向かつて来る。

緑「法雨君!!」

法（心配すんな、デツクン。ただ、今から使うヤツはヤベエからな。）

法「ハアアア……………」

すると天之助の足元から薄い黒煙のような何かが吹き出てきた。たちまち黒い物体が線を引き、横6m、高さ10mの長方形の形を作り、真ん中に線が降り、まるで扉のような物ができた。

緑（何だ？アレ？ 法雨君はなんかボソボソと言つてるし……）

他の皆も固唾を呑んで見ることしかできなかつた。

法（ショック吸収……物理的には強いが……）

精神的にはどう

だろうな？ただ突っ込んで来る脳無には分かりっこないか。）

ギイーーー

軋む音を立てながら、扉はゆっくりと開き、その中は暗闇に包まれるかの如く、何も見えない。天之助が一言こう言つた。

法  
「行け。」

それと同時に扉の向こうで声が聞こえた。呻き声のような……悲しむ声のような……恨んでいる声のような……その中から出てきた物は……

そこから飛び出した物は手だ。その手は黒く、ただ黒く、悲鳴に似た声で脳無へと真っ直ぐ伸びて行つた。その時、緑谷達は戦慄した。嘗てこれほどまでの恐怖があつただろうかと。

三が次々と脇無に續着く 脇無は必死に氣がそよごと搔撓するが 三の数が圧倒的に多い為、次第に体全体を覆い尽くしていく。 それも最早意味の無い事だろうが。

法「じゃあな。平和の為の礎と成れ。」

バターン！

扉が閉ると、黒い物体も消えていった。

緑「み、法雨君…」

法「おー、終わつたぞ。いやく、疲れた疲れた。」

そう言いながら腕を回していた。

緑（本人は至つて疲れているようには見えないけど…）

轟「なあ、何なんだ？アレは？」

法「それはまた今度。今は別の事があるだろ。」

オールマイトも方がついたみたいだし、援護にまわるか

死「何だよ…衰えた？嘘つけ…！チートが！」

法「さて、どうする？手駒はいなくなつた。残るはアンタらくらい  
だが？」

死「もういい…帰るぞ、黒霧。」

緑「!!待てっ!!」

法「お前が待てい。」

緑「！何で？」

法「その体で何ができる？それで今どれ程のことができる？見ただ  
ろ？俺が言えた事じやねーけど、これが敵と戦うつてこつた。」

緑「…………」

死「じやあな、オールマイト。次こそは必ず殺す。お前もだ。覚え  
たからな。」

法「あつそ。そんときや返り討ちにしてやるよ。」

そうして死柄木と黒霧は居なくなつた。

後ほど飯田君がプロヒーロー達を連れて来てくれて、残りの敵達も  
捕えられた。俺は相澤先生など負傷した人を霧癒惠で片つ端から治  
していく。一先ず一件落着だな。また質問責めされないかな…。

## 少し変わるその後

街中・とあるB A R・

死「……………！ クソが、あんの野郎… 何なんだよ……………！ 脳無もやられた… ! 手下共は瞬殺… ! ガキ共も強かつた！ 平和の象徴も健在… ! 話が違うぞ！ 先生!!」

『違わないよ。ただ見通しが悪かつたね。』

『舐めすぎたな。敵連合なんてチープな団体名で良かつたわい。』

通話で2人声だけが聞こえた。

『所で、ワシと先生の共作、（脳無）は？』

『回収してないのかい？』

黒霧「…… 吹き飛ばされました。」

『なにつ!?』

黒霧「性格な位置座標も把握できなければ、幾らワープとはいえ探索しないのです！ … そのような時間を取れなかつた…。」

『もう1体の方は？』

黒霧「もう1体は… 雄英の生徒と思わしき人物に… 消されました。」

『消された？ 一体どういう事だ!?』

黒霧「詳しい事は分かりませんが… その時、彼の後ろに扉のような何かが現れ、その中から無数の手が伸び… 引き摺りこまれたのです…。」

『折角オールマイト並のパワーにしたのに… !』

『ま、仕方ないか… 残念…。』

死「… パワー…。 そういやそいつ、オールマイト並にパワーもスピードもあつたな…。」

『へえ…。』

死「そいつが邪魔してなけりや、オールマイトを殺せたのに！ イレザーヘッドもガキ共も殺せてた！ 許せねえ…。 いつか必ず殺して

やる！」

『悔やんでも仕方がない。今回の事だつて決して無駄にはならないハズだ。精銳を集めよう。じっくり時間をかけて。我々は自由に動けない。だからこそ君のようなシンボルが必要なんだ。死柄木弔。次こそは君という恐怖を世に知らしめよう！』

そこで通話は途切れた。男は一人、考え方をしていた。

『全盛期のオールマイトとほぼ同等の……またはそれ以上の少年か……フフフフ、是非とも欲しくなるなあ……彼の個性。』

後に警察が来て、残つたヴィラン達を逮捕した。怪我人は全部俺が治療したんだよ。もうクタクタなのよ（＼・＼；＼）。

「19：20：21：と、良し。ほぼ全員無事か……」

クラスの皆から安堵の声が聞こえた。

葉 「尾白君……今度は燃えてたんだって。……強かつたんだね。」

尾 「ヒット＆アウエイで凌いでいたよ。……まあ倒したのは全部法雨だけど……葉隠さんはどこにいたんだ？」

葉 「土砂のとこ。轟君クソ強くてびっくりしちゃつた！」

尾 「なんにせよ無事でよかつたね。」

轟 （凍らすとこだつた……危ねえ。）

青 「僕がいたところはね……どこだと思う？」

常 「そうか……やはり皆の所もチンピラ同然だつたか……」

切 「ガキだつて舐められた！」

青 「どこだ？」

瀬 「やっぱり大穴空けたのオールマイトか……」

佐 「相変わらずスゲーパワー。」

障 「ああ、流石だな。」

青 「どこだと思う!?」

蛙 「……どこ?」

青 「秘密さ!」

「取り敢えず、生徒たちは一旦教室に戻つてもらう。すぐに事情聴取  
という訳にもいかんだけれど。」

蛙 「刑事さん。相澤先生は…」

相 「何だ?」

蛙 「……ケロ?」

。。。。。。

「「「「「相澤先生!?!」「」「」「」」

相 「何をそんなに驚く?」

切 「いやそりやだつて驚くでしょ!あの化け物に酷くやられたん  
じや…」

蛙 「どうよりも… 何ともなさそうに見えるけど…」

相 「その辺は法雨の個性のおかげだ。アイツの治療でモノの4、5  
分で怪我がほぼ完治しちまつてんだからよ。後遺症も残らずに済ん  
だ。」

切 「ス、スゲエ…」

麗 「そうだ! 13号先生は!」

相 「そつちも心配ない。13号も法雨が治したから安心しろ。」

麗 「ホツ。良かつた!」

切 「法雨! やつぱオマエ、スゲエ奴だよ!」

蛙 「法雨ちゃん。ありがとう。」

法 「礼はいいよ。あんな中皆も頑張つてたんだし、俺は当然の事し  
たまでだよ。」

相「まあ何にせよ、全員無事で済んだんだ。ほらお前ら、教室戻るぞ。」

「「「「「はい!!」」」」」

緑「法雨君！」

法「ん？ どしたデツクン。」

緑「改めてお礼言いたくつて。ありがとう。また怪我治してもらつちやつたね。」

法「だくかくらく、礼はいいつて。俺はそれが当然の事だと思つて実行したまでなんだから。それもヒーローとして当たり前でしょーよ。」

緑「うん。 そうだね… そうだよね！ それがヒーローの在り方だもん！ それに、今の僕なら確信できるよ。君は最高のヒーローになれるつて！」

法「… ! フフツ。」

緑「あ、あれ？ 僕、変なこと言つた？」

法「… いや、そんなことねーよ。ただ…」

緑「ただ？」

法「その言葉が俺らヒーローを強くするんだなつて。」

緑「!… そうだね！」

法「さあくて、これからどんな困難にぶち当たろうと、Plus ultraで乗り越えたろー！ オー!!（団子団子）？ はいデツクンも！」

緑「お、オー！」

## STANDING BY

U.S.Jの襲撃事件により、翌日臨時休校となり、その翌日。  
相「雄英体育祭が迫ってる。」

「「「「クソ学校っぽいのキタ——!!」」」

耳「待つて待つて!!ヴィランに侵入されたばかつのに大丈夫なんですか!!」

尾「また襲撃されたりしたら…」

相「逆に開催することで雄英の危機管理体制が盤石だと示す……って考えらしい。警備は例年の五倍に強化するそうだ。何より雄英の体育祭は……最大のチャンス。ヴィラン」ときで中止していい催しじゃねえ。」

峰「いや、そこは中止しようぜ? 体育の祭りだろ?」

緑「峰田くん、雄英体育祭見たことないの?」

峰「あるに決まってるだろ。そういう事じやなくてよ…」

相「ウチの体育祭は日本のビッグイベントの一つ。かつてはオリンピックがスポーツの祭典と呼ばれ全国が熱狂した。今は知つての通り規模も人口も縮小し形骸化した……そして日本において今、かつてのオリンピックに代わるのが雄英体育祭だ!」

八「当然全国のトップヒーローも見ますのよ。スカウト目的で!」

上「資格習得後はプロ事務所にサイドキック入りが定石だもんな！」

耳「そつから独立しそびれて、万年サイドキックつてのも多いんだよね。上鳴そーなりそう。アホだし。」

上「え!？」

相「当然名のあるヒーロー事務所に入ったほうが経験値も話題性も高くなる。時間は有限。プロに見込まれればその場で将来が拓けるわけだ。」

年に一回……計三回だけのチャンス。ヒーロー志望なら絶対に外せないイベントだ！」

「「「「はい!!」」」

## 昼休み

切「あんなことはあつたけど……なんだかんだテンション上がるなオイ!! 活躍して目立っちゃ、プロへのどでけえ1歩を踏み出せる！」

切島を含む、クラスメイト皆が盛り上がりしている。3回しかないチャンスか…俺もアピール的なのしどくべきかな?

緑「皆すごいノリノリだ…」

法「(・ω・) ネー」

飯「君は違うのか?ヒーローになる為在籍しているのだから燃えるのは当然だろう!?

蛙「飯田ちゃん独特な燃え方ね、変。」

法「動きのクセよ。」

緑「僕もそりやそうだよ!?でも何か…」

麗「デクくん… 飯田くん… 法雨くん…」

緑・飯・法「!?’

麗「頑張ろうね！体育祭！」

緑「顔がアレだよ麗日さん!？」

芦「どうした？全然うららかじゃないよ麗日?」

法「ドえれえ気合い入れてるって顔だな。」

峰「… 生… (バチーン)

麗「皆!!私!!頑張る!!」

法「オー… スゲー勢いとキャラがふわふわしとる…」

などを話していると、相澤先生がやつて来て

相「おい、法雨はいるか?」

法「ん? はい?」

相「少し話したい事あるから、ちょっと来い。」

法「あ、はい。」

そう言われ向かつた先は生徒指導室……

法（え？俺何か怒られるような事した??）

不安になりながらも中に入り、相澤先生が話し始める。

相「安心しろ。別になんかやらかしたとか、そんなんじやねえから。」

法「そ、そーなんですか？」

相「そうだ。これから話すのは体育祭の事についてだ。」

法（体育祭の事で？なんだろう？）

相「お前、何時もある傘持つてるよな？アレはお前の個性による物か？」

法「ええ、そうですね。俺の個性の一部みたいなもんですな。」

相「そうか…ならお前はアレ無しでも戦えるのか？」

法「…まあ、出来ますね…」

相「そうか。じゃあ法雨、お前体育祭の本番、傘は使うな。」

法「…………え？」

法「ええ!? 天雨を!?!?」

相「声デケーよ。」

法「え!? なして!? 理由プリーズ!?」

相「一旦落ち着け。お前は戦闘においても、あの傘を使つてるだろ？もし傘によつて個性が発動してるのであれば使うことを許可しようとした。だが、無くとも個性が使えるなら、それは武器と見なされる。ヒーロー科には、個性によるものではない武器の使用許可はされていなくてね。そう言う訳で本番は傘無しでよろしく頼むぞ。」

法「…それが決まりなら… 分かりました。」

これまでの事を振り返ると、殆どが天雨のおかげで何とかなつてき

た。よくよく思えば頼りっぱなしのままだ。何時までも頼つたまま  
じゃ良くないよな！もし天雨が使えなくなってしまった時の為に自  
分自身が強くなる必要がある！おっし！今まで頼つていた分、さらに  
強くなるぞー！！修行じやーー！！

こうして放課後に訓練できるよう職員室へ申請しに行つた。皆も  
考えてる事は同じで、何人か来ていたようだ。ギリギリセーフーー（  
☒？☒；）ー

厄介な相手になるのはやはり爆豪と轟だな。当日には強さも倍に  
なるだろうから2人にも負けないくらいにしねーとな。俺は始まる  
までの2週間、訓練場と家の山でぶつ続けて修行にのめり込んだ。も  
ちろん天雨無しで。修行を始めてみると、やはり天雨が無いと少し劣  
る。がしかし、天雨があるのと同じ…いやそれ以上に出来ねーと意  
味がない！俺はやつたるでい！

なんて言つてる間に時は流れる…

俺はどこまで強くなれただろうか…

## 体育祭だよ！全員集合～！

いよいよ開催される雄英体育祭。事件後といふこともあつて、多少の批判はあつたものの、例年通り大いに盛り上がつていた。

### 1—A 控え室

葉 「コスチューム着たかつたなー」

尾 「公平を期すため着用不可なんだつてよ。」

法（どうどうこの日が来たか…）とりあえず天雨無しで頑張つたけどどこまで強くなれるか…）

飯 「皆！準備は出来てるか!?もうじき入場だ!!」

緑（?!緊張してきた…）

峰 「人人人人人…」ゴックン

轟 「緑谷」

突然、轟が緑谷に声を掛けた。

緑 「轟君…何？」

轟 「客観的に見ても実力は俺の方が上だと思う。」

緑 「へ!?う、うん」

轟「お前オールマイトイ目エかけられてるよな？別にそこ詮索するつもりはねえが…お前には勝つぞ」

上 「おお!? クラスナンバー2が宣戦布告!？」

切 「急に喧嘩腰でどうした？直前にやめろつて…」

切島が仲裁に入るが…

轟 「仲良しごっこじやねえんだ。何だつていいだろ。」

そう言いあとを去ろうとすると…

緑「轟君が…何を思つて僕に勝つって言つてんのかは分かんないけど、そりや君の方が上だよ。実力なんて大半の人に敵わないと思う…客観的に見ても。」

切 「緑谷も、そーゆーネガティブな事は言わねえ方が…」

緑 「でも！皆、他の科の人も本気でトップを狙つてるんだ。僕だつ

て……遅れをとるわけにはいかないんだ！　僕も本気で獲りにいく！」

プロ『雄英体育祭!!ヒーローの卵たちが我こそはとシノギを削る年に一度の大バトル!!どうせテメーらアレだろ!?こいつらだろ!?敵ヴィランの襲撃を受けたにも拘わらず鋼の精神で乗り越えた奇跡の新星!!ヒーロー科!!1年A組だろおお!!』

入場と共に歓声が沸き上がる。

緑「わああ……人が凄い……」

飯「大人数に見られる中で最大のパフォーマンスを発揮できるか、これもまたヒーローとしての素養を身につける一環なんだな」

切「めっちゃ持ち上げられてんな。なんか緊張すんな爆豪！」

爆「しねえよただただアガるわ」

その他の科の生徒も続々と入場していく。

「選手宣誓!!」

と取り仕切るのは18禁ヒーローこと、ミッドナイトである。今年の主審でもあるらしい。

切「ミッドナイト先生……なんちゅー格好してんだ！」

上「流石は18禁ヒーロー！」

常「18禁なのに高校にいて良いのか？」

峰「良い!!」

峰田が食い気味に言う。つーか、学校側もよく許したな。

ミ「静かにしなさい!!選手代表！　1－A　法雨　天之助！」

法「はい！」

ミツドナイト先生に呼ばれ、壇上に立つ。

法『選手宣誓……』

とつらつら聞き慣れた言葉を言い、最後に……

法『そして、敢えて言いますが、皆さんも同様に……てつぺんを狙っていることでしょう。しかし、強敵も多い。自分ではこいつにや勝てない……なんて思うこともありますよう。が、それでも諦めず、頑

張つて、てっぺんを取りたいでしょ？なので潰されないよう…

全力で叩き潰し返していきましょう。』

と圧をかけるように言つた。元々声が低い方なので、低音がいいアクセントになつただろう。他のクラスは少し驚き、だんまりな様子。

緑「みみ、法雨君！今のはちょっと…」

法「俺は思つた事をそのまま言葉にしただけ。これで多少は本気を出してくれたらいいんだけど。」

俺が戻るとミッドナイトが説明をし始めた。

ミ「さて、それじゃあ早速第一種目行きましょう！」

麗「雄英つて何でも早速だね。」

ミ「いわゆる予選よ！毎年ここで多くの者がティアドリンク！さて運命の第一種目！今年は…コレ！」

ミッドナイトの後ろにプロジェクターが現れた。種目はルーレット形式で発表するようだ。ドキドキ…そしてプロジェクターが出したのは…『障害物競走』だった。

緑「障害物競走…！」

ミ「計11クラスでの総当たりレースよ！コースはこのスタジアムの外周、約4km！我が校は自由さが売り文句！ウフフ…コースさえ守れば何をしたって構わないわ！さあさあ、位置に着きまくりなさい！」

そう言われ、スタート位置に着く。ゲート上にあるランプが点滅し…

『スタート!!』

皆が一斉にスタートした。したはいいものの、ゲートが狭い為、だ

いぶ混雑してはいるが、他にもあるだろ、通れるとこ。

法「よつ！」

「えつ!？」

「アイツ、壁伝いに！」

法（お先に失礼）「と、地面が凍つてゐる… 轟だな…俺には関係ないけど

プ『さーて実況してくぜ！解説アーユーレディ!? イレイザー!!』相「無理矢理呼んだんだろうが…」

轟が地面を凍らせていく中

八「甘いわ！轟さん！」

爆「そう上手く行かせねえよ！半分野郎！」

皆負けじと進んで行く。俺はと/or/うと…

法「霧滑渾！」

地面を滑つて移動する霧滑渾。いつもより多く滑つております。

轟「クラス連中は当然として、思つたより避けられたな…」

その中で峰田が自分のもぎもぎで地面に付け、上手いこと移動していた。

峰「轟の裏の裏をかいてやつたぜ！ざまあねえつてんだ！喰らえ才

イラの必殺、G R A P E…」

峰田が攻撃をしかけようとした次の瞬間…

ぼごお

峰「あーーーー！」

緑「峰田君!？」

そこに現れたのは…

「ターゲット… タイリヨウ！」

# 緑「入試の…仮想敵！」

目の前に立ち塞がつたのは入試の時の仮想敵。しかも0Pが何体もいる。

『さあいきなり障害物だ!! まずは手始め! 第一関門口ボ・イン  
フェルノ!!』

轟  
一般入試用の仮想敵つてやつか。」

ハ「ど」からお金出でくるのかしら?」  
法(?)? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ?

（…、…、…）「それな  
か…」丁度良いくらいだな、うん。）

轟が即座に凄まじい冷氣で凍らせ  
て、1体を再起不能にした。

「足の間から通れる！」

そう思い進もうとするが…

轟「やめとけ！不安定な体制で凍らせた。倒れるぞ。」  
途端にOP敵は崩れ、轟は第一閨門を突破した。

『1—A！轟!! 攻略と妨害を一度に!! こいつあシヴィー!! スゲエ  
な！ 1抜けだ！ コイツはアレだな、もうなんか… ズリイな!!』  
相『合理的かつ戦略的行動だ。』

「流石は推薦入学者!!」

シユバババババ!!

法「ほい。2抜け。」

「おおーっと！ いつの間に抜けていやがったー！ 轟に続いて、2  
抜けしたのは、入試の特待生!! 法雨天之助だーー!!」

く。他の人らも段々抜けてきた。

プ『オイオイ第一関門チヨロいつてよ!!んじや第二はどうさ!?落ちればアウト!! それが嫌なら這いつくばりな!!ザ・フォール!!!』

法「ここはさつきよりは簡単だな。」

颯爽と雲霄に乗り、上空を駆ける。

プ『轟と法雨! 難なく渡りきり、激しいデッドヒートを見させてくれてるぞーー!!』

法「楽勝すぎたか?」

プ『先頭が2人抜けて下は団子状態!! 上位何名が通過するかは公表してねえから安心せずに突き進め!! そして早くも最終関門!! かくしてその実態は… 一面地雷源!! 怒りのアフガンだ!! 地雷の位置はよく見りやわかる仕様になつてんぞ!! 目と脚酷使しろ!! ちなみに地雷の威力は大したことねえが、音と見た目は派手だから失禁瀕死だぜ!!』

相『人によるだろ…』

法「ここも特に気にする事なく雲霄で行けるな。」

すると後ろから

爆「俺には関係ねえ! テメエ、宣戦布告する相手を間違えてんじやねえよ!」

爆豪が爆発しながら飛んでおり、轟と競り合っている。

プ『ここで先頭が変わったーー!! 喜べマスマメディア!! お前ら好みの展開だああ!! 後続もスパートかけてきた!! だが引っ張り合いながらも… 先頭二人がリードかあ!?』

法「… 雲霄で行こうと思つたけど、やっぱやめた。それに、それ以前に俺は…」

ビリビリイイ!!

爆・轟「?」

法「爆発する前に遠くに行けてるわ。」

プロ『ワーオー！見えたか？おい今の見えたか？法雨が目にも止まらぬ速さで爆豪と轟を追い抜いて地雷源を抜けたあーー!!』

俺が通った後に爆発が起こり、他者を巻き込んでいた。ゴメンネ。そしてそのままの勢いでゴールへと向かつた。

プロ『そしてそのままゴオーーール!! 1着は法雨天之助だアーー!!迅雷の権化!! パネエーー!!』

会場は大いに沸いた。

プロ『遅れて2着はー！ 緑谷出久!! 逆転したー！』

法「霹靂もだいぶ板に付いてきたな。成長の実感だ・・！」

爆「ハア・・・ ハアツ、また・・ クソつ・・！ クソがつ！」

遅れて着いた爆豪はとても悔しそうだつた。着々と他の人もゴールし・・：

ミ「1年ステージ、第一種目も漸く終わりね！ それじゃあ結果をご覧なさい！」

1位 法雨 天之助 (A組)

2位 緑谷出久 (A組)

3位 轟焦凍 (A組)

4位 爆豪勝己 (A組)

e t c . . . . .

ミ「予選通過は上位4名！ 残念ながら落ちちゃつた人も安心しなさい！ まだ見せ場は用意されてるわ!! そしていよいよ本選よ!! これからは取材陣も白熱してくるわよ！ 気張りなさい!!」

法（次は確か・・）

ミ「さーて、第二種目よ!! 私はもう知ってるけど〜〜〜何かしら!! 言つてる側からコレよ！」

プロジェクトが示したのは『騎馬戦』だった。

法（あ。俺狙われる奴だ。）

ミ「参加者は2〜4人のチームを自由に組んで騎馬を作つてもらう

わ！ 基本は普通の騎馬戦と同じルールだけど、一つ違うのが……先程の結果に従い各自にポイントが振り当てられる事！」

佐「入試みたいなポイント稼ぎ方式か。わかりやすいぜ！」

麗「つまり組み合わせによつて騎馬のポイントが違つてくると！」

芦「ああ！」

ミ「アンタら私が喋つてんのにすぐ言うね！」

法（相手どうしよう…）

天之助は相手探しを考えていた。

ミ「ええそうよ！ そして与えられるポイントは下から5ずつ！ 44位が5ポイント、43位が10ポイント… といった具合よ。そして、1位に与えられるポイントは…… 1000万!!」

1000万と言われた途端、皆が俺を見る。見るなよ。そういう視線に慣れてねーからDon't look meだよ。

ミ「上位の奴ほど狙われちゃう… 下克上サバイバルよ!!」

法「より一層相手を考えなきやな…」

## 騎馬戦

ミ「上に行く者には更なる受難を。雄英に在籍する以上何度も聞かされるわよ。これぞPlus Ultra! 予選通過一位の法雨天之助! 持ち点1000万ポイント!」

法「ぬう…」

視線がガンガン突き刺さる。ナズエミデルンディス!!

ミ「制限時間は15分。振り当てられたポイントの合計が騎馬のポイントとなり、騎手はそのポイント数が表示されたハチマキを装着! 終了までにハチマキを奪い合い保持ポイントを競うのよ。取つたハチマキは首から上に巻く事。取りまくれば取りまくるほど管理が大変になるわよ! そして重要なのはハチマキを取られても、また騎馬が崩れても、アウトにはならないってところ!」

八「て事は…」

佐「44名からなる騎馬11～13組がずっと同じフィールドにいるわけか…」

青「シンド☆」オナカイタイ…

芦「一旦ポイント取られて身軽になっちゃうのもアリだね。」

蛙「それは全体のポイントの分かれ方を見ないと判断しかねるわ、三奈ちゃん。」

ミ「個性発動アリの残虐ファイト! でも……あくまで騎馬戦!! 悪質な崩し目的での攻撃等はレッドカード! 一発退場とします! それじゃこれより15分! チーム決めの交渉タイムスタートよ!!」

チーム交渉開始!!

法（うくん…）皆絶対俺を避けるだろうし… 原作のデツクンもこんな気持ちだつたのかな…）

実際は俺が1000万だがデツクンは難なく原作通りの組み合わせになっていた。

法（うーーーん！ホントどうしよう… うーーん……………ん  
？）

ふとある人物に目が止まる。居たわ、組める人。  
あつという間に15分が経過し…

「そんじやよろしく頼むぜい！尾白君！」

尾  
—う、うん…：（ホントは組みたくなかった…）

ポイントは合計せると10000001115p

フ『よオーし組み終わつたな!!準備はいいがなんて聞かねえぞ!!い  
くぜ!!残虐バトルロイヤルカウンtdown!!3!2!1!STAR

T!  
!

開始と同時に殆どが俺狙いで来た。

尾 「うわあー！？来たー！？」

法「心配することはない。俺の言つた通りにすれば問題ない

そう言つて俺は息を思いつきり吸う。

・・・・・  
・・・・・  
・・・・・  
・・・・・  
・・・・・  
・・・・・  
・・・・・  
・・・・・  
・・・・・  
・・・・・

息を吐いた瞬間、口からナニかが出てきた。

「な、何だこれ?」「これは……霧!」「

「ヤバッ!? 見えなく……」

これぞ名付けて……

霧作むさくい

みるみる内にセンターが隠れてゆく。

プ『なんだーー!? 法雨天之助が霧みたいなの吐いて、中央が隠れていくぞー!! てかもう見えなくなつちまつたー!!』会場がザワついている。そんな中……

「くそー！ なんも見えねーー！」

「慌てるな！ 落ち着け！」

「下手に動かない方がいい！」

「するとその時！」

「十時！ シュツ！」

「ツ?!? 取られた?!?」

「一時！ シュツ！」

「え?!? 取られたの?!?」

「二時！ シュツ！ 十二時！ シュツ！」

「やられた!!」

法「…… フフ、おおよそ取れたからもう良いかな〜、イヨツ！ 霧

天日和！」

ブワア!!

プ『うお！ いきなり霧が晴れた！ 何が起こつてんだよ!? ってエエエエ!? おいおい!! 法雨の手を見てみろよ!!』

プ『あの霧の中で、大半のハチマキを奪つたつてーのかー』

相『視界を奪つた後、何かしらの方法で取つたつて訳か。』

その通り。まず霧作爲で視界を奪う。そしたら俺も見えないじやないかつて？安心してください。俺には靈探心視があるじやない。それで位置を把握して、尾白君に時計方角で指示して動いてもらつた。いんやくこうも事が上手くいくと気持ちく!!あ、メインは取つてないよ。

「してやられた！」

「こうなつたら1000万のハチマキだけでも取るしかない！」

どうやら1000万に狙いを定めたようだ。

法「そう来るか……フフフフ……」

尾「法雨？」

すると天之助が自分のハチマキを取り

法「お前ら……そんなにコレが欲しいかい？なら……」

ハチマキの一部が凍り、ボール状になつた。これは雹の力である。

そしてそれをどうするのかというと……

法「取つてこーーい!!」

1000万ハチマキ付きの雹を空高く投げた。

ブ『マジかーー!?こいつアクリエイジーーイ!!自ら1000万を投げやがつたーーー!!』

相『確實に上位に入るため、あの霧を発生させてからポイントをある程度奪い、ポイントに余裕ができたら1番危険な1000万を捨てる事によつて、自分は危険から免れるつて所か。』

尾「ええー!?法雨！何やつてんだよ!!」

法「ダイジョブダイジョブ。どうせ4位以内に入ればいいんだから。ポイントもだいぶあるし、これからは逃げに専念しよう！」

尾「それでいいのか…。」

一方投げられた1000万を取ろうと多くのチームが狙っていた。

爆「俺のもんだーー!!」

爆豪は爆破で飛び、取ろうとするが  
パシツ

緑「取った！」

先に緑谷に取られた。

爆「クソデクテメエーーー!!」

発「フツフツフー！どうやら私のベイビーちゃんの方が1枚上手だつたようですね～！」

そんなこの人は発目 明さん。 サポート科で、言わざと知れた発明オタク

法「おーおー、向こうはデックンが取った1000万を狙つてる狙つてる。」

尾「とりあえず俺らはこのまま逃げで良いんだよな？」

法「OK！頑張つて逃げ切れよ！行けー！尾白丸ー！！」

尾「了解！」

「そつちに行つたぞ！」

「法雨を逃がすなー！」

プ『さあーーまだ2分も経つてねえが早くも混戦状態!!各所でハチマキ奪い合い!!1000万を狙わず2位～4位狙いつてのも悪かねえ!!』

そんな俺らは逃げ回るのに専念中。何チームか追いかけて来ている。

法 「尾白君や、大丈夫かえ？」

尾 「ああ！法雨思つたより軽いから全然大丈夫！」

法 「そつか。だが無理はするなよ。俺も全力でサポートすっから。」

すると前方からB組の宍田・鱗チームが向かって来た。

鱗 「ポイントなら法雨の奴も多い！突っ込もう！」

宍 「了解ですぞ！」

法 「突っ込むか… その判断が悪いって訳じやないけど…！」

バンッ！

宍 「うおつ！？」

鱗 「なつ!? 銃弾!?」

法 「迂闊に近づくと、俺の零弾が火を吹くぜ。零なんだけども。」  
零弾の指 v e r。威力調整で前まではパチンコ玉くらいだったが、  
今ではデコピンと同等の威力に抑える事に成功した。

法 「よーし、このまま進めー！撃たれてー奴は出て来やがれってん  
だ！！」

尾 「ちよつ!? あんまり煽らない方が…」

轟 「そうか？ なら来てやるよ。」

やつて來たのは轟チーム。

尾 「轟達が來たー！しかも下が飯田だからめっちゃ速い！」

法 「フツ、俺が飯田君に対して何の対策も練つていないと思つてい  
るのか…！」

轟 「何…？」

すると天之助が手に力を込めるようにしていると水が生成され、両  
手を天高く挙げた。

法 「ハアーーー！ いでよ！」

.....  
水団!!

ザツバーン!

【ギャオーー!!】

「法雨ー!! 今度は何したー!? 水の龍!! さつきから驚かせる事しかしてねーな!? おい!!」

法 「行けー！」

【ギャアーー!!】

飯 「うつ!?

上 「わあー!? 避けろ避けろ!!」

轟 「フツ!!」

飯田の機転で何とか止まれ、轟が凍らせようとしたが、ギリギリの所で水団に避けられた。

上 「はあー、あつぶねー‥‥ けど、相手は水! こつちは氷! 凍らせちまえばなんて事ねーんじやねーか!」

法 「少し違うな‥‥ 水団は攻撃用に出したんじやない。言つたでしよう? 逃げに専念するつて。」

宙を舞つてた水団が急に地面に伏せた。

法 「良し、尾白丸! 乗れ!」

尾 「え!? 乗るの!?」

法 「いいから乗れ!!」

尾 「わ、分かつたよ!」

いやいやながら尾白は水団の背に乗つた。

法 「ようし。尾白君、ここからは俺の運転だ! 振り落とされないよう俺にガツチリ掴まつとけよ!!」

尾 「お、おう‥‥ !」

天之助が指の先から糸のような水を出し、それを水団に繋げると、水団の水流が勢いを増し

法「行つくぜ——！」

上一速

轟「くつ！ 飯田！ 追えるか！」

金華縣志

俺らと轟チームの追いかけっこが、今始まつた。

## 決着

尾白君に肩車された状態で水団を操作して逃げてる天之助

対

必死になつて天之助を追いかける轟チーム

プロ『さあー！騎馬戦ももう終盤に差し掛かつて来たぞーー!!この状況下、1番熱いのは法雨チーム対轟チームの追いかけっこ!!激しいデッドヒートを見せてくれてるぜー!!』

法「いいやつほオオい！」

尾「うわー!?

轟「速えな。」

飯「うおおおおおお!!」

法「いいゾ～飯田君。頑張れ頑張れ。」

尾（すつづ）い余裕そうな顔しててか俺は落ちないようにしつかり掴まつとかないと！）

上「飯田！お前体力とか大丈夫なのか!?」

飯「まだ問題ない！必ず追いついてみせる！」

飯田は更にフルスロットルになり、徐々に法雨に近づくが

法「よつ。」

天之助が急カーブし、飯田が行き過ぎてしまう。

飯「しまった!?

八「なら、ここは！」

八百万が創造で出したのは、鉤付きのワイヤー。それを前方に突き刺した。

飯「つ！なるほど！」

飯田は理解したかと思うと、ワイヤーを持ち勢いを着け、その反動で見事カーブに成功した。

飯「よし！」

法「ほー、中々やるなー。」

轟「ハア!!」

法「ジャンツ！」

轟が冷氣で水団を凍らせようとするが跳ねて避けられた。

轟「チツ！」

法「いやあ、危ねえ危ねえ……な！」 BANG！

轟「くつ!?」

八「させませんわ！」

天之助が零弾で狙い撃つが、八百万に盾で防がれてしまう。

法「ババンバーン！バンババーン！バン！Bang Bang SHO

O T I N G !!」

八「弾数が多い……ですが守ってみせます！」

そんな攻防戦が続く中……

尾「つ法雨！前前！」

尾白が指摘したのは競技場の白線。天之助は後ろに気を取られていて気付けなかつたもよう。もうすぐそこに白線が迫つている。このままでは場外になつてしまふ。が……

法「(ヽ、ヽ)フツ」

天之助はそのまま直進していた。

尾「おい！何やつてんだ!?このままじや出ちまうぞ！」

プ『おうおうどーした!?まさか自らリタイア宣言かー!?

白線はもう目の前だ。あと1メートルという所で

法「雲霄！」

3メートル上空付近に雲霄を発動させ、水団を操作したまま乗つた。

プロ『なんと法雨！白線ギリギリの所で雲に乗つて場外の危機を逃れたー!!』

相『いや、どうやらそれだけじゃないらしい。』

雲の上で水がまるで発進するかのように飛沫を上げている。一体何をするのか。

ザバザバザバザバザババババ

そして

法「行つけーー!!」

バツシャーン!!

天之助は水圧の勢いで空を舞い、反対側の端へと、ひとつ飛びして行つた！

尾「うおおおおおお!!?!!」

法「てゆーか何でさつきから驚いてんの？」

尾「お前のせいだよ!!」

上「えー!?んなのアリかよ!?

緑「追い込まれたと見せかけて直前に雲に乗つて、一気に反対側へ飛んだ！逆境を見据えての判断力！」

無事に反対側に着地したところで…

プロ『終ーー了ーー!!』

騎馬戦が終わりを迎えた。結果は

一位	緑谷チーム	10000105 p
二位	法雨チーム	1650 p
三位	轟・爆豪チーム	同率810 p
四位	心操チーム	725 p

「おをーい！3位が同率！やり直しか!?」  
相「いや…このまま進めよういちいちはそんな事するのは合理的  
じゃない。」

「うーん…まいいや！」

「いいのかよ!?」「…」

「そんじや、一時間ほど昼休憩を挟んでから午後の部だぜ！じゃ  
あな！おい、イレイザーヘッド。飯行こうぜ。」

相「…寝る。」

法「あく、腹減った。何食おう？」

## 1 or 1 のトーナメント戦

『さあさあ皆楽しく競えよレクリエーション！それが終われば最終種目！進出4チーム総勢16名からなるトーナメント形式！一対一のガチバトルだ!!』

昼休憩が終わり、俺は遅れて会場へと戻るとプレマイ先生のアナウンスが聞こえた。あのセリフということはチアの部分は終わつたのか？

切「あ！おい法雨！遅ーぞ！どこ行つてたんだ！」

法「便所。食つたらすぐ出るの。」

他愛のない話をして、説明を聞く。

ミ「さて、それじゃあ組み合わせのくじ引きしちゃうわよ。組が決まつたらレクリエーションを挟んで開始！レクに関して進出者16人は参加のするしないは個人の判断に任せるわ。息抜きしたかったり、温存したい人もいるしね。んじゃ1位チームから順に…」

と言うように着々と進む。原作と違っていたのは、尾白君が棄権しなかつた事。鉄哲らが入らなかつた事。この改変がトーナメントでどういう安牌になるのか。

くじ引きの結果は

第1試合

緑谷出久 対 心操人使

第2試合

轟焦凍 対 瀬呂範太

第3試合

上鳴電氣 対 青山優雅

第4試合

飯田天哉 対 発目明

第5試合

法雨天之助 対 八百万百

第6試合

常闇踏陰 対 芦戸三奈

第7試合

切島銳児郎 対 尾白猿尾

第8試合

爆豪勝己 対 麗日お茶子

あー、ちょっと変わってるな。上鳴と青山かー。どっちも使い過ぎるとダメになるから如何に個性を温存させるかなんだけど……そつちはいいか。俺はヤオモモさんとかあ……瞬で終わらすか？でも原作じや、だいぶ悔やんでたからな……見せ場作るか？

そんな事を考えながらレクリエーションをやつていると、あつとう間に終わった。

ブ『さあ！レクリエーションも終わっていよいよ本戦だ！最終種目！ガチンコトーナメントスタートだ!!』

いよいよトーナメント戦開始。だけど、ここからは天之助以外大雑把な説明だ！許せ！

緑谷 対 心操——原作通り  
轟 対 瀬呂——原作通り  
上鳴 対 青山——ギリギリで上鳴が勝った。  
飯田 対 発目——原作通り

そして俺とヤオモモさんの第5試合。

プ『さあーて!! 気を取り直して第5試合!! 万能創造! 推薦入学とあつて、その実力は折り紙付き! 八百万百!! バーサス!! コチラは入試の特待生! 各種目でも色々驚かしてくれた、法雨天之助!!』

八「法雨さん。」

法「ん?」

八「あなたの個性はある程度把握しました。とても強力なものです。ですが私も負けるつもりはありませんので!」

法「ん。本気で来なされや。」

プ『それでは、第5試合! START!!』

八「フツ!」

ヤオモモさんは創造で鉄棒と盾を出し、様子見のようだ。なら俺は

法「電光刀」

と両手に電気状の剣を模したモノを出した。

法「ホツ!」

八「ハア!」

ガキーン!

金属がぶつかつた時に似た音が会場に響いた。

法「ヨツ! ホツ! ハツ!」

八「うつ!」

プ『法雨が果敢に攻め続け、八百万! 防戦一方だ!!』

法「あーらよつ!」

八「つ! そこですわ!」

八百万が盾の内側から出したのはネット。それで俺を覆い吸着す

るよう に体に張り付き、ネットの先端の返し付きの槍が上盤に刺さ  
る。しかもただのネットではなく

八「そのネットは電圧を流す仕組みになつておりますわ！いくら雷  
を使うあなたでも！」

ブ『八百万の策略で法雨が一気に大ピンチ！最早為す術ナツシング  
かー!!』

切「法雨の奴大丈夫か!?」

緑「普通ならピンチだろうね‥‥ 普通だつたのなら。」

法「フフフフフ（＼＼＼＼＼）フフ‥‥」

八「何が可笑しいのですか！」

法「確かに上鳴あたりとかの放電系には有効かもだけど‥‥ 残念  
だつたな。放電系ならまだしも、俺の場合は【雷そのもの】なんだよ。」

八「雷‥‥ そのもの？それつて一体‥‥」

法「こういう事。」

バリイ!!

八「!?消えた!?」

ブ『消えただと!?どんなトリック使つたんだよ!! つーかどこ行つた  
!??』

どこに消えたか探してると、最初に見つけたのは相澤先生だつた。

相『‥‥ 上だ。』

ブ『え? 上?‥‥ あ―――!! いた―――!! 高つ!? ゼツテー50  
メートル行つてんだろう? てか落ちてきてねーかアレ!?』

切「法雨!?」

耳「このままじや墜落しちゃう!」

上「誰かネットか何か早く!」

麗 「いいや、法雨くんなら大丈夫だよ！」

蛙 「お茶子ちゃん？どうして言いきれるの？」

麗 「それは… 法雨君だから！」

「「「「え？」」」

緑（麗日さん） 語彙力が… でも、確かに法雨君ならあの高さ、なんて事ない！）

フイーーーン…

法雨に（うーんと… アーレでコーして… うん。とりま霾で体制整えよ。）

地面までの距離が10メートルに近づいた所で霾を発生させ、何事もなく地面に着地した。

法 「どう？俺が落ちてくるまでの間、理解できた？」

八 「ええ… 言葉の通り… 正しく雷となり、ネットの中から逃れたのですね。」

法 「そゆこと。」

八 「でもだからといって、諦める理由にはなりません！」

法 「威勢がいいね。けど、モーそろそろ終わらせるよ。」

八 「なんですって？」

天之助は左手の親指と人差し指で丸を作り、右手で左手を添えるよう<sup>う</sup>に置き、丸の部分を口元に近づけ、こう言う。

霎強風  
しょうじゅうふう  
ビュンツ！

八 「キヤツ!?」

天之助が息を吹いた瞬間、八百万が凄い勢いで後ろへと吹き飛ばさ

れた。

八「くうつ!?」

立ち上がるとして、再度挑もうとするも、それは叶わなかつた。

ミ「八百万さん！場外！勝者！法雨天之助!!」

(((((ワアーーー!!!))))))

歓声がワツと上がる。パツと見呆氣ないよ？

八「負けてしまいました‥」

ヤオモモさんはとても不甲斐なさそうだな。

法「ヤオモモさんは、俺対策でのネット創造したんでしょ？挑みに来ただけでも偉いと思うよ？」

八「ですが、負けは負け。私の力不足‥ まだまだ足りないものだらけ‥」

法「あんま気負い過ぎなさんなよ。十分貢献したじやないかい。負の経験を次に活かさな進めんよ？」

八「‥ それもそうですわね‥」

法雨天之助 2回戦進出

## 影に水をぶつける

さて俺は難なく上がれましたな。んでもって、また雑な説明だ！

常闇 対 芦戸 原作通り

切島 対 尾白 切島の勝利

爆豪 対 麗日 原作通り

爆豪とお茶子ちゃんが戦う少し前：

法 「よつ。お疲れちゃん、尾白丸。」

葉 「お疲れ様！」

尾 「ああ、法雨、葉隠さん、ありがとう。でも結果的には負けちゃったけど。」

葉 「ううん！ 尾白くん頑張つてたじやん！」

法 「そーそー。シンプルな近接戦闘で中々熱いもんだつたぜ？ それによう言うだろ？ シンプルイズベストつて。だからそのシンプルさで尾白丸にしかできんことを探しんしやい。」

尾 「……うん。ありがとな。法雨。」

法 「良いってことよ。」

葉 「そういえば次、相手は常闇くんだつけ？」

法 「そうだな。ま、何とかなんでしょ。」

尾 「法雨が言うと本当に何とかなりそうだな。」  
とか言つてる内に1回戦が終わり、2回戦に突入した。

緑谷 対 轟 原作通り

上鳴 対 飯田 飯田の勝利

時間の流れの感じ方つて日によつて変わるよね。早かつたり遅かつたり…今は早いかな。

ブ『さあー!! ガンガンいこうぜ!! 続いては!! 黒きサムライ! 常闇踏陰!! ヴァーサス! 奇天烈な特待生! 法雨天之助!!』

法「奇天烈…？」

ブレマイ先生の言葉が引つかかる。と常闇君が  
常「法雨天之助。」

法「ん? てか何故フル?」

常「攻撃力、移動速度からしてお前よりも劣る所もあるだろうが、俺  
は全力でお前を倒しにいく。ただそれだけだ。」

法「お、おう…（。д。）」

ブ『双方、Are you ready?… START!!』

常「黒影!!」

ダ『アイヨツ!!』

開始と同時に黒影を出した。

法「黒影か、だつたら俺は… 水団!!」

【グガアアア!】

黒影と水団がぶつかり合い、互いに攻撃している。

ブ『常闇の黒影に対しても法雨は水団を出して来たー!! モンスター対  
決だーー!!』

法「俺の水団と常闇の黒影。何方がより優れているか、勝負といこ  
うじゃないか。」

常「…面白い。いいだろう、その勝負… 乗った!」

ダ『俺ノ方ガツエーヨ!!』

法「んなもんやつてみなきや分からんぜ?」

【グルオオオオ!!】

ダ『オラオラオラア!!』

果敢に黒影が攻める。それを見て天之助はふと思つた。黒影には

自我はあるが水団にはない。意思があれば連携も取れるし、遠隔なら情報の確保にも便利だろう。

【グラアア!!】

ダ 『グウツ!?』

だが自我がない方にもいい事はある。それは怯まない事と自分だけで操作出来る事。なんかグルルって言つてると思うけど、これは天之助が言わせてるだけよ。

プ『1回戦の切島と尾白みてーにシンプルながらも中々見応えのある戦いだなー！水V S影!!制するのはどつちだ!!』

法「つてい！」

不意を突いて別角度から攻撃するも

常「！、右だ！黒影！」

ダ 『アラヨツ!』

常闇の判断で回避されてしまった。すると

常「ハア！」

プ『おつと！常闇自身が動いた！自らも戦闘に参加か!?』

常「ハアア！」

法「おおつと!？」

途端に俺と常闇の戦闘が繰り広げられた。おそらく俺が水団を作してる間、俺は動けないと踏んで、自身が出てきたのだろう。だが実際は動きながらでも操作出来るんだけどなー。というわけで

法「油断大敵だぜ？常闇君や。」

【グアア！】

常「しまった！黒影！」

ダ 『サセルカ!』

ギリギリの所で何とか防御できたみたいだ。

ダ 『大丈夫力！踏陰！』

常「嗚呼、問題ない。が、油断していた。操作しながらでも動けるとは…不覚。」

法「そのことも想定してたら良かつたんだけど、しゃーないと思

うな。俺は。さあ、第2ラウンド始めつか！」

常「来い！」

ダ『イクゾーー！』

【グオオオ！】

再び激しいぶつかり合いが会場を沸かせた。攻防一体の黒影と水団。だがやはり上手だったのは天之助であつた。

法「黒影は文字通り影。つまりは光にめっぽう弱い。だから俺はこうする。」

すると水団に電流が走り始めた。

常「何か仕掛けて来るぞ！ 気を付けろ！」

ダ『何ダロウガ関係ネエ！』

常闇の忠告を無視するかのように突っ込んできた黒影。それが命取りになるのぞ。

法（今だ！）

水団の電流が光だし、

法「でんじだいひやっこう電磁大白光！！」

天之助がそう叫んだ瞬間、辺りは激しい光に包まれた。

ダ『キヤンツ！？』

常「うおつ！？」

プロ『うわっ!? 眩しーー！ グラウンド越しでもこの眩しさって！ 直視したら目がイカレそうだ!!』

常「何という電光！ グラウンドのライトの比じやない！」

法「トドメ！」

【グラアー！】

常「しまつ！？」

ドガツッ!!

常「グウ！」

常闇は水団の体当たりによつて、場外に押し出された。  
法「良し。」

押し出した事を確認して、光を消した。ミッドナイト先生も遅れて  
気づき

ミ 「常闇君！場外！勝者！法雨天之助！」

常「俺もまだまだ技量不足だ。その事に気付かせててくれた法雨には  
感謝する。」

法「そうなの？まあ君がプラス思考で良かったよ。俺としても個性  
の改善の余地つて結構ありそうだし。」

常「…お前はどこまで強くなるつもりだ？」

法「さあね。」

I d o n, t d o a n y t h i n g t o  
h i m.

法（常闇君、ヤオモモと似たようなこと言つてたな。  
俺つて案外ライバル視されがちなのかな？

んー試合見よっかなー、

でも直ぐに呼ばれそだからなー。

んー、待つとこ。作者が教えてくれるつしょ。）

作者〈おい〉

切島 対 爆豪——原作通り

準決勝  
轟 対 飯田——原作通り

法「ほらね。」

作者〈ほらね。じゃねーよ！こつちはただでさえ  
文章力そんな無いんだから！〉

法「ハイハイ。そんじや俺は行くかなー、  
爆豪と闘り合いに。」

否、法雨天之助無双劇。」

プ『1回目の準決勝は…まあ大方察しは付いてたが

轟がコマを進め、続く準決勝2回目だー!!

ちよいと不評はあるが、実力は確か!爆豪勝已!!

対するはー!水と雷つてもはや属性使いだな!!

俺的にはコツチに勝つてほしい!法雨天之助!!』

轟「テメエなら来ると思つてたぜ‥‥ 水溜まり野郎。」

法「俺もやるからにや、勝ちに行かななーつて。

バツクンもそうじやないの?」

轟「ああん!?誰がバツクンだ!」

法「アンタ」( ̄ ̄ )『

轟「そーゆー事じやねーわ!止めろ!そのあだ名!』

法「バツクンが俺のこと水溜まり野郎

つて言わなくなるまで止めない。』

轟「んだとおー‥‥

法( ̄ ̄ )冗談はさておき爆豪、

お前さんいや悪いがこの試合では‥‥

プロ『両者バチバチの中!今試合が‥‥ START!!』

## シユンツ

法「見せ場を作らせない。」

轟「ツ!?このy「ボゴオ‥‥」ガハツ!?』

爆豪は天之助の右カーブの腹パンを受け、  
腹を抱えて痛がつていた。

プロ『ワアー!!モロ!爆豪モロにくらつた!!  
高速移動で後ろに回つたかと思えば、  
振り向きざまに腹パン!!狙つたなコイツ!』

麗「うわあ‥‥ 痛そー‥‥

切「中々にエグいぞ‥‥ あれ。」

耳「流石の爆豪もアレは効いたでしょ。』

爆 「テメ…エ…」

法 「流石にキてるな。

もうちよい加減した方が良かつたか?」

爆 「…巫山戯るなアアアアア!!」

爆破で攻撃しようとするも

法 「遅い!」

バゴ!ボゴオ

爆 「うあつ!?」

法 「かくらうの、雷公鞭!」

試合が始まる直前に作った新技。雷公鞭。指の間から鞭状の雷を発現させ、相手を痺れさせたり捕縛する技だ。

バシイ

爆 「何イ!?」

法 「…ぬうううん!!」

勢いよく振りかぶつて天之助は爆豪を振り回し、思いつきり地面に背中から叩き付けた。

バヂゴーン!

ブ『Oh!これは痛い!!手も足も出てねえ!!この状況で爆豪に打開策はあんのかあ!?』

法 「どうだい?自分がやる前にやられて、自分の考えが上手くいかなくて悔しいかい?」

爆 「舐めやがつてエ…」

法 「まー、来るなら来なはれ。但し言つとくけど、お前はもう出来上がつていてる。」

爆 「ハア?どーゆー意味だよ!!」

法 「んく、もう分かるんじやね?」

爆 「巫山戯んのも大概にしろやー!!」

爆豪が手をこちらに向け爆破しようとした。

シ――――ーン・

しようとした… しようとしたのだ

爆 「な！ 何で爆破しねえんだ!?」

法 「♪♪」

爆 「水溜まり野郎！ 何しやがった!!」

法 「さうあね。」

爆 「テメエ！ 説明 s・・・ !?」

すると突然、爆豪が止まつた。

麗 「止まつた… ?」

切 「アレ？ 爆豪のヤツ急にどーした？」

緑 「かつちやんが止まつた？ それに  
爆破させなかつた？ どうして？」

爆 （何だ!? なんなんだこの寒気は!?)

爆豪は自分の腕を見て、不思議と  
寒そうにしている。

法 「答えが知りたいかい？」

爆 「何しやがつた!! 答えろ!!」

法 「そこまで知りたいのか、仕つ方ないな。  
じやパパツと言うね。答えはな、

バツクンの体の内側に霜を仕込んだから。」

爆 「何だとオ・・・」

緑「霜だつて!? はつ! そうか! かつちやんの個性は汗腺から二ト口を出して爆破させてるから、つまり体温が一定より高くなれば

爆破はできない! 法雨君はそれを知つてたんだ!」

上「え? でもどのタイミングで

爆豪に霜を入れたんだ?」

緑「おそらく…… 法雨君が殴った時だ。殴った際にかつちやんの体に霜を入れて、

そこからじわじわと侵食していくって、体温を下げていったんだ。

だからあの時爆破しなかつた……いや、出来なかつたのか。」

爆「クソが! 変な小細工しやがつて!」

しかし動こうにも、体温冷え続け、体のゆうことが利かない。

爆「ヴウツ!!」

法「どうする? 早くしないと低体温症でぶつ倒れるよ?」

爆「…… らねえ」

法雨「え?」

爆「勝ちは…… 譲らねえ!!!!」

爆豪は体が冷えても諦めず、天之助に向かつて走る。

プロ『爆豪体が冷えても、突っ込むのかよ! やべーだろ! 僕も心配になつてきたぞ!』

法(爆豪……お前)

爆「ぶつ殺す!!」

殴りにかかるが、動きが遅く、  
簡単に躲せてしまうほどに。

爆「ハア……ハア……俺は……  
俺がNO. 1になるんだ……！」

法「なら聞くけど、どうしてそこまでNO. 1に拘る？」

爆「俺はなあ……いずれオールマイトを超える  
ヒーローになる！ ただそれだけだ！！」

法「……それがバツクンなりの信念ってやつかい？」

爆「そうだよ!!」

法「ふうーん……（　・・・）——スツ

天之助が左手を前にやると爆豪に変化が起きた。

爆（ツ！ 体が寒くなくなつた？）

法「霜を解除したんよバツクン。いや、爆豪。」

爆「ああ？」

法「お前の信念は分かつた。ならその信念、  
俺にダイナマイティングにぶつけて来い！」

爆「フ……フハハハ!! いいぜえ!! やつてやらあ!!  
水溜まり野郎!! いや、法雨イー!!」

そう言うと爆破を連続で起こし回転してゆく。  
アレが出るんだな。だったら俺も……

法「ハアアアアア……」

天之助が構えると両足に電気が流れ、  
次第に大きくなっていく。

プロ『どうやら次の一撃で決まるみてーだ！  
他の奴らも目工離すんじやねーぞ!!』

爆「死いいねええ!!」

法雨「行くぞーーー！ トオ!!」

爆豪は下から、天之助は上から決める！

爆法 [ハウザード法] 榴弾砲着弾!!  
「雷?」  
■必殺撃!!

バグオーラン!!

## 衝突と同時に

天地を揺るがす程の爆音と、会場にどよめきが聞こえた。

とせん太勝一太の太

ミ 「ケホツケホツ… もうまた飛ばされた！」

それより勝ったのはどーセン?」

煙が晴れ、舞台に立っていたのは……

ミ「爆豪君！戦闘不能！」

法「ふいー、や!つぱし強えなあ爆豪。色んな意味で。」

その爆豪はと言うとうつ伏せに倒れていた。

すぐさま救護口が来て、爆豪を連んで行つた。

目指すものなんてあつたかな……。」

# 雨冠 技一覧 —検索—

## 震撃一突

地面を叩くことで地震を発生させる技。  
範囲次第で地割れ・津波・土砂崩れなどの  
災害レベルにまで達する。

リアル グラグラの実の能力。

## 霎霆

一瞬にして雷を打たせる技。

打たれた後は暫く硬直し、無防備になつてしまふ。

## 羆の舞

風と一緒に土が生成され、相手を巻込む広範囲技。  
土の硬さは泥～岩程度の調整具合。

## 霸力天下

パワーとスピードに特化し、  
ラツシユを叩き込むゴリ押し技。

加減を間違えると、相手の全身の骨が  
粉碎骨折するので要注意。

## 満？怨靈

後ろに黒い謎の煙で扉を型取り、  
開ければ中から無数の黒い手が現れ、  
標的を中へと引き摺り込む唯一の禁じ手。  
呑まれた者の安否は天之助本人も分からぬ。

## 電光刀

雷状の刀。触れば勿論痺れるが、切れ味も日本刀と同威力である。

## 霎強風

左手の親指と人差し指で丸を作り、右手で左手を添えて、丸部分に息を吹くと突風を起こす技。いわば空気砲のような物。

## 電磁大白光

とてもない程明るい光を発する技。暗い場所での探索や目眩しに使う。

## 雷？団必殺擊

両足に電気を貯め、上に飛んで双龍と共に両足キックする大技。

団は「落ちる」、？には「恐れるさま」の意味がある。  
『嘗ての双龍が雷を纏い、恐怖を携え襲い来る…』

## ここから新技

## 瞬転電遊

上空に飛び宙返りして全方位に放電する無差別技。

また上鳴みたいにアホにはならない。

### 無音の霍

打たれ心地の良い小雨が降り、  
相手は放心状態となつて、  
その隙にトドメを刺す技。この時相手は  
攻撃された事に気付けず、そのまま気絶する。

### 横雪崩

最大積雪量3tまでの雪を横に殴るように放つ技。  
最悪圧迫死させる危険性もある。

### 爆碎乱霰

上から絨毯爆撃が如く、大粒の雨を降らせる技。  
威力は本気のハリセンで叩かれたくらい。  
雨粒の大きさはバレーボール程度。

### 遠麗雹山

空気中の水分を操り、雹を作り出す技。  
雹は自在に操作出来る。

邪魔がなければ、直径20メートルの雹を作れる。

ドゥーモ。K A M E N R I D E Rです。

こんな小説を気に入つて頂いた方々が100以上とは  
凄いですね。（ 。 ）

書いてる方も頑張れます\*（ 。 ? ） ?

決勝の方はもう少々お待ち下さい m ( \_ ) m  
では！

# ELEMENTAL BATTLE

水団みずおかみ

水の龍。指示すれば色々なことをしてくれる。  
背中に乗れば、水上スキーにもなる。  
水なので当然物理攻撃は効かない。

ついに来た……決勝戦が。

法「うう……プレッシャーが俺を襲つてる気が……  
だが逆境を乗り超えてなんぼのヒーローだ。  
やらなきややられる時代でっせ。」  
ブツブツと言いながら歩いてると

法「おや？」

「ああ、いたいた。君が法雨天之助か？」

俺の目の前には、轟君の父親で、

敵検挙率ならオールマイトを

上回るN.O. 2ヒーロー。エンデヴァーが居た。

待つてたの？ずつと？

法「何か用ですか？」

エ「君の個性、実に素晴らしいものだ。

水や雷の応用技。そしてあの戦闘力。  
パワー・スピードからしても、

オールマイトと同等かそれ以上の力だ。」

法「はあ…。」

エ「家の焦凍には、

オールマイトを超える義務がある。

君との戦闘においても、有益な物となるだろう。  
焦凍も必ず君相手なら本気で挑みに来る筈だ。

くれぐれもみつともない試合はしないでくれよ。」

法「さいですか。んでその台詞、誰かに似たような事  
言つた気がするのは俺の気の所為かな?」

エ「！」

法「それとあんさん、余計な世話かもしんねえが、  
一人の父親として家族も劳れんのか?

少しさはそんな心持ちなされよ。泣く事になるぞ?  
後から気付いてからじや遅せーぜ?

言ひてえ事はそれだけだ。では。」

エ「何故そう思う?」

法「さあ?自分で考えといてくだせえ。」

そう吐いて後を去つた。言ひたいこと言つたつた。  
反省も後悔もしてない。

普『待たせたな!リスナー諸君!!

これまで白熱した試合もいよいよ決勝戦だー!!

轟V S 法雨! 両者共々強力な属性使いだぜ!!

どちらが勝つてもおかしくねーが、

優勝するのはどつちだーー!!

轟「法雨…お前、親父に何か言われたか?」

法「言われた気はするが何て言つたかは忘れた。」

まー今は試合に集中しまつしょい。」

轟「… そうだな。」

プ『そんじやあ行くぜー！ 最後の闘い!!  
トーナメント決勝戦!!今!

S T A A A A A A A A A A A A A A A R T !!!!

相『長えよ。』

轟「ハアツ！」

轟は開始早々、いきなり巨大氷で来た。

プ『うおおい！ 轟！ 初つ端からそれかよ!! 法雨は大丈夫か!?』  
氷に巻き込まれたと思われた天之助は氷の  
先端部分へ回避していた。

轟「チツ！ 分かっちゃいたが避けられたか。』

法「うーん… この氷邪魔だな… よーし、〔霸〕。』

天之助は殴る姿勢に入り

法「ぬうんツ!!』

氷を力いっぱい轟に向かつて殴つた。

ビキビキビキッ!!

氷が激しい勢いでヒビが入り、  
しまいには碎け崩れていった。

轟「… 法雨ならやりかねないな。』

法「危ねーえ。うつかり凍つちやう所だつた。』

轟「凍らせてても、何ともねーだろお前は。』

法「まうね。じやあ次俺のターン。』

シユツ

轟「くつ！』

瞬時に間合いを詰めてる。轟は

凍らせようと試みるがしゃがんで躲され、

法「セイつ！』

逆に下から左ストレート蹴を喰らつた。

轟「ガハツ!?」

「法雨ナイスしゃがみ回避！」

そして轟は痛いのを食らつちまつた!!』

法「どおしたあ？ その程度かあ？」

轟「このツ！」

法「電磁大白光！」

カツ!!

轟「しまつ!?」

法「アーンド： 霽の舞！」

ビュイイイン!!

天之助は手を上に掲げ轟が目を隠した隙に、  
霾で風に巻き込ませた。

轟「クソツ！ このままじや場外にされちまう！

何とかしてステージに戻らねえと！」

戻ろうとするが轟の顔に何かが近づいて  
ぶつかつた。

ベチャア

轟「うつ!? これは… 土?」

轟が全体を見ると大量の土が風とともに  
舞つていた。これが霾なのだ。

轟「流石に多いな。」

大量の土が轟を襲う！

ベシツ！ ベチヨ！

轟「ウザつてえな！ フツ！」

ステージに向かつて氷を棒状に伸ばし、  
そのままの勢いで戻つてこられた。が、  
戻つてきた頃には所々に泥が付いていた。

法「あく… 大丈夫？」

轟「ああ。」

法 「ごめんな。物理的に顔に泥を塗っちゃって。」

轟 「そこまで気にしてねえよ。」

法 「そか。まあそれはそれとして、

何時になつたら炎を使って来るんだい？」

轟 「ツ！」

法 「いやだつてさあお前デツクンに感化されて吹つ切れて使つたじやん？俺は感動したんだ。氷と炎。二つの相反する物が合わさる時、驚異的な力が生まれる。生で見たときにや、マジでスゲーって思つたよ。」

この世の中強え奴はゴロゴロいる。

お前もその中の一人に含まれてんだ。

だから俺にも見せてくれよ。その炎を。

じやなきや、俺も全力を出せない。」

轟 「全力を出せねえだと？ナメてんのか？」

法 「そういう訳じやないさ。」

ただ単に俺はお前に全力でぶつかりたいんだ。

その為にも、そつちも全力で来てくれ。

完全燃焼の完膚なきまでな。」

轟 「法雨……」

法 （あと最近ふと気づいたんだけど、俺には明確な目標が無い。

皆にはあるんだろうけど俺には無い。

今現在模索中だけど中々見つかんないもんだね。でもやめた訳じやないさ。

今も探し続けてる。いわば目標を探す目標つて感じかな？この戦いで何かが得られるのであれば、全力で挑みたいんだ。だから……」

法 「御託はいいか……さつさとかかつて来い。」

轟 「お前何かに言われなくつたつて……」

ボオツ!!

轟 「そのつもりだつたよ!!」

プ 『轟!!また見させてくれたぞ熱い炎!!』

法 「なら良かつた。」

俺も心置きなく全力を出せるつてもんだ。」

そう言つて天之助の周りに電気が走る。

ビリビリ・：

轟 「アレが来るか・！――！」

ビリビリビリビリ・：

法 「ハアア!!」

バリバリバリイ!!

天之助は▣・?霆となり、轟の前に立ちはだかる。

プ『ええー!?ナニアレ!?法雨は

雷神かなんかにでもなれんのか!?

ホントどーなつてんだよお前のクラス!?!』

相『話には聞いていたが、これほどまでとはな・・』

緑「▣・?霆・・！」

法 「水▣」

【グルル・】

轟 「覚悟は良いか?法雨?」

法 「無論。では始めよう。氷・炎対水・雷の闘いを。」

そこからの戦闘は言葉で表すにはどうしたら良いのか。どうすれば良かつたのか。誰にも分かりえなかつた。

進撃せし巨氷。紅滾る火炎。

龍が如く水雨。怒れる豪雷。

言葉にするには不十分と感じさせてしまう程に。まるで自然その物の闘いを見ているかのようだ。その激戦に思考を忘れた人達も多々見られた。互いが互いを極めるこの勝負。結末や如何に。

法 「ではそろそろ終幕だ。轟よ。」

轟 「ああ、次で決める。」

轟からはこれまで以上の炎が吹き上がり、会場を熱風が荒々しく吹いた。対する天之助は

法 「うかんしき雨冠紫刃」

ドウーノン・・・ヴァリイツ!!!

雷が紫電へと変化し、空氣すら痺れさせる。

轟 「まだそんな大技があつたのか。」

法 「これは紫電に切り替えたことにより力が増す。技はこれからだ。これが今我が出せる最大の一撃。この一撃を以てして、貴様を倒してみせようぞ。」

轟 「来い!!」

法 「ヒュウウウウ・・・」

天之助が抜刀術の構えをし、

雷もさらに激しく鳴る。一体何が起ころのか。誰にも想像出来ない。それが彼である。

轟  
「膨冷熱波」  
法  
「神威紫電」  
・ 天  
あまのひらめき  
閃

### ゴウオーノン

爆発が起きた。いや、爆発と呼べるのだろうか。  
とても低く籠つた音と絶する衝撃波。  
またセメントスが壁を作るも、  
呆気なく破壊されてしまった。  
ミッドナイトは危険を察知し、セメントスの  
後ろに事前に隠れていた。

ミ 「まったく……さつきの戦いといい、  
もうなんなの？滅茶苦茶じやない……」  
確認の為ステージを見ると、煙の中に  
一人立っている影があつた。

それは……

法雨天之助であつた。

# ひよーしょーしき

ミ「それではこれより！表彰式に移ります！」

体育祭全ての競技が終わり、ミツドナイトが示した先に、煙幕と共に表彰台が出現したが……

爆豪にだけ拘束具が付けられてた。

峰「うわあ……」

耳「何アレ……」

切「起きてからずつと暴れてんだと。法雨があの姿で来なかつた事と自分の順位に納得いかなくて腹立ててるんだとよ。」

爆「ン、ン、ーーー!!」

常「もはや悪鬼羅刹……」

爆「@\*??※ЖЩ団!!」

法「ちよつと何言つてるか分かんない。」

一応順位を確認させてもらうと、

一位 法雨

二位 轟

三位 爆豪・飯田

という形になつた。

飯田君もメダル授与の予定だったが原作通りにインゲニウムが敵やられて重傷を負つたのを理由に早退しました。

ミ「そして今年メダルを授与するのは勿論この人！」

〔H A — H A H A H A H A !!〕

『ワアーー!!』

「オールマイトだ！」

オ「トオツ!!」

歓声と共に競技場の屋根から飛び降りてきた。

ミ「我らがヒーロー！オールマイト！」

オ「私がメダルを持つてえ…来た!!」

……………。

ミ「被つた…。」

オ「ンン…。」

「いや、それにしても今年の一年は良いな。」  
「N.O. 1ヒーローに見てもらえるんだもんな。」

ミ「それではオールマイト、三位から  
メダルの授与を…」

オ「爆豪少年！…と、これは良くないな。（カチヤカチヤ）  
法雨少年との戦いでは中々の善戦だったぞ！」

その不屈の精神！目を見張る物があつた！

プロになつても、その精神を維持してくれよな！」

爆「オールマイトオ…三位じゃ意味ねーんだよ！  
俺が目指してんのは完膚無きまでの一位なんだよ！  
こんな中途半端な結果は俺が認めらんねーんだよ！」

オ（顔スゴ…）  
法（顔がもう敵なんよな…）

オ「まあでも、メダルは受け取つとけよ！  
自分のキズとして、けつして忘れぬように！」

爆「いらねーよ!!」

無理矢理掛けようとして  
最終的に爆豪の口に掛かつた。

オ「轟少年！見事なまでの成長つぶりだ！  
後は力の制御と技術力を上げれば

もつと飛躍的な成長に結びつくだろう！」

轟「ありがとうございます。俺、

緑谷や法雨と戦った時、自分が

自分でいたられた気がして全力で挑めました。  
キツカケをくれた2人には感謝します。」

緑「轟君…」

法「そうだつたんだ…」

オ「さて法雨少年！一位！おめでとう！  
最後まで我々の想像の1歩先を見せてくれたね！

君なら強いヒーローになれるぜ！」

法「どうもです。だけど、俺だつてまだ学生ですよ？  
プロに近づくためにも今以上に強くなないと！」

オ（いや、君の場合はもうプロヒーローの域にいる気がするんだけ  
ど…）

緑（法雨君、まだ強くなるの!?）

アレ以上に強くなるのかと一部の人は少し引いた。

オ「さあ、今回は彼等だつた！しかし皆さん！  
この場にいる誰もが、ここに立つ可能性があつた！  
競い、高め合い、  
共に更に先へと進んでゆくその姿！

次代のヒーローは確実に、

芽を伸ばしている！てな感じで、最後に一言！  
それでは皆さんご唱和下さい！せーの！」

オ「お疲れ様でしたー!!」

…………。

((((えーーーーー!?そこはPlus Ultraでしょ!?オール  
マイト!))))

オ「あ、いや… 疲れたろうな〜つて思つて…」

法「ダメだこりや。」

## ヒーローネーム

体育祭が終了し、連休に入る。

その間も俺は鍛錬を欠かさなかつた。

趣味作ろつかなうとは思うが

この世界に俺の知つてゐる特撮とかアニメは無い。

その前に目標だな。ヒーローとしての目標。

考え方をしながら歩いていると、

「あ！君！法雨天之助くんだよね！」

法 「え？あ、はい。」

「いや、テレビでだけど見たよ！一位おめでとう！」

強いね！雄英頑張れよ！」

法 「あ、どうも。」

やっぱ全国レベルだと知名度あるなー。

そーいや俺の指名どれくらいなんだろう？

そういうしてゐに学校に着いた。

芦 「来る途中めっちゃ声掛けられたー！」

切 「俺も！」

葉 「私もジロジロ見られて、何か恥ずかしかつた！」

尾 「葉隱さんは何時ものことじや…」

法 「恐るべし全国放送。」

瀬 「俺なんか小学生にドンマイコールされたぜ！？」

蛙・法 「ドンマイ。」

ありやドンマイとしか言いようがないかんね。

上「たつた1日で注目的になつちまつたよ。」

峰「やっぱ雄英スゲーな。」

チャイムが鳴り、同時に相澤先生が入つてくる。

相「おはよう」

「「「「おはようございます！」」」

相「さてと… いきなりだがお前ら

今日のヒーロー情報学… 少し特別だぞ。」

「「「「「？」」」」

上（特別!?まさか小テストか!?)

切（ヒーロー関連の法律とかまだ苦手なのに！）

皆が不安になる中、相澤先生が発言したのは…

相「コードネーム。ヒーロー名の発案だ。」

((((((胸膨らむヤツ来たーー!!))))))

相「と言うのも、先日話した

「プロからのドラフト指名」に関係してくる。

指名が本格化するのは、経験を積み

即戦力として判断される2～3年からだ。

つまり今回の指名は、将来性に対した興味に近い。

卒業までにその興味が削がれたら

一方的にキヤンセル… なんてのもよくある。」

峰「くつ！大人は勝手だ！」

相「で、その指名の集計結果がコレだ。」

すると黒板に指名数が表記された棒グラフが出た。

相「例年はもつとバラけるんだが、今年は3人に多く集まつた。」

轟とか爆豪あたりは多いのはまず予想できる。で、もう1人が俺だ。指名が4000越えてた。

やっぱトーナメントの奴らに傾くな。

指名してくれんのはいいんだけど、

他の人も見てやれよって思う。

相「これを踏まえ… 指名の有無関係なく、いわゆる職場体験つてのに行つてもらう。お前らは一足先に経験してしまったが、プロの活動を実際に体験して、

より実りある訓練をしようつてこつた。」

砂「それでヒーロー名か！」

麗「俄然楽しみになってきた！」

相「まあ仮ではあるが適當なもんは…」

「付けたら地獄を見ちゃうよ！」

そう言つて現れたのはミッドナイトであつた。

ミ「この時の名が世間に認知されて、そのままプロ名になつてる人多いからね！」

「「「ミッドナイト！」」「」」

相「まあそういう事だ。

その辺のセンスをミッドナイトに査定してもらう。将来自分がどうなるか名を付けることで

イメージが固まりそこに近付いていく。

それが『名は体を表す』つて事だ。

オールマイトとかな。」

フリップを配つていると相澤先生は寝袋で寝ていた。睡眠時間そんな無いの？

ミ 「それでは、できた人から発表してね！」

(((((まさかの発表形式!)))) )

法（恥ずくない名前… うくん…）

発表と聞いてざわついているが、

将来にかかるんだ。マトモなんにせんとな。  
途中大喜利になりかけたが、

梅雨ちゃんの『フロツピ一』のおかげで  
場の空気が変わった。それからも  
淡々とヒーローネームが決まる中…

爆「爆殺王。」

ミ 「そういうのはやめといた方が良いわね。」

爆「何でだよ!!」

切「爆発さん太郎にしろよ！」

爆「うつせえクソ髪!!」

ヒーローぞ？名前に（殺）入れるか？

わやわや揉めてると、お茶子ちゃんが立ち上がる。

麗「じゃ、私も… 考えてありました。『ウラビティイ』

ミ「洒落てる！」

法（自分の個性の名前からもじつてウラビティイか…  
うん。深く考えちやつてたな。ここはシンプルに…）

残った飯田君も『天哉』と自分の名前にし、  
デツクンも『デク』と決まり、俺も無事決まった。

法「俺は自分の個性の名前を

そのままの意味で出させていただきます。

雨傘ヒーロー RAINY CROWN

ミ「中々カツコイイじゃない！」

切「おお！ シンプルイズベスト！」

葉 「カツコいー！」

実を言うともう決めてたのかも。

爆 「爆殺卿!!」

ミ 「違う。そうじやない。」

## 職の場を体で験す行事

どうも皆さん法雨天之助でし。只今俺は職場体験先に移動中でしてね。

え？ 最初のくだり？ いーじやん別に。 てかもうそろ着くから。

さあ！ やつて来たのはく：

九州一キターー！！

：いや／＼九州か／＼

俺は小学生以来だよ。

ホンダラバツサ、行きますか。 職場に。

「ようこそ、俺の事務所へ。」

この人は九州を中心に活動をしている

N.O. 3ヒーロー『ホーケス』。

選んだ理由としては上位のプロの下に行けば得られる物があるかも… と思うのと個人的に話してみたいというのが本音。 だつて声が中〇悠一なんだよ？ これは最光だな！ つて感じたよ。

ホ 「え／＼名前は法雨天之助君。

ヒーロー名がRAINYCROWNか。

もう知つてるとは思うけど俺はホーカス。

一週間よろしくね。」

法「はい。」

ホ「ところで君の個性、「雨冠」だつけ? こりやまた変わつてんねー。」

法「はい。雨冠の付く漢字全ての能力を使えます。」

ホ「う一つわ強。マジか、雲も雷も雪もみーんな使えるんでしょ? 強過ぎない? そうなるとチートの部類だぜ?」

法「時々自分もそう思いますね。」

ミ「それでどんな事が出来んの?」

法「えーと… 例えば雲を銃弾に見立てたり、雷の速度で移動したり、土付の風を発生させたり、雲に乗つて空を飛んだり、霧を発生させたり、地面を叩いて地震を発生させたり、

雨とか雲を一瞬で晴らしたり、回復させたり、

水状の龍を出したり、雷神になつたり諸々と…」

ミ「うん… 十分過ぎるくらい強いのは分かつた。」

法「さいですか。」

ある程度聞くとホーカスは少し考え込んだ。

ミ（話に聞いてたけど、この法雨天之助という少年、素の戦闘力が異常な程高い。

一体どんな訓練をしてきたんだ?

体つきは普通だが、コイツはギャップが凄すぎる。

加えてこの「雨冠」という個性。そこから生み出した技の数々。どれも侮れない物だ。

体育祭で見てすぐに理解できたよ。この子は、

とてもないくらいに強過ぎた存在だと。

それでもしこの子が道間違えちゃつてたらコツチがヤバくなりそうだつたからな。

雄英に入つてくれてありがたやーだよ。ホント。)

法 「… 考え事でも？」

ホ 「ん？あー！ゴメンゴメン！ボーッとしてた。  
んじやあ、早速で悪いけど出かけるよ。」

法 「どちらへ？」

ホ 「敵退治」

法 「WOWいきなり」

ホ 「こうゆう仕事は常日頃いきなりなんだよ。  
さ、コスチュームに着替えて支度してね。」

そう言われ40秒くらいで支度して、

準備ができ、部屋をあとにし、

事務所を出ると早速説明が入つた。

ホ 「この二人は俺のサイドキック。

分かんない事はこの二人に聞いてね。」

「やあ！RAINYCROWN！

この一週間よろしくな！」

法 「よろしくです。」

軽く挨拶した後、ホーカスから指示が出た。

ホ 「その敵はここ最近よく出没してるらしく、  
強盗なんかをよくしている。

警察でも中々見つかんないみたいで、  
捜索続きだつたんだけども、

ようやく尻尾掴んでアジト見つけたんだ。  
けど残念な事に、その場に居合わせた敵が  
警察の一人を人質にして立て籠り状態つて訳。  
法 「なるほん。」

ミ 「てーな感じではい出発ー。」

そう言つた途端、翼を広げ飛び去つた。

「俺達も行くよ！RAINYCROWN！

早くしないと見失つちゃうから！」

法 「ぬ？見失う？」

「そう。『速すぎる男』それがホーカスの異名。  
その名の通り、彼は全ての事件を  
凄まじいスピードで解決する。たつた一人で。  
つまり俺達サイドキックの仕事は  
その後処理なんだ。モタモタしてると  
どんどん距離を離されちゃうから。」  
法「へー。でもそれは俺も飛べれば  
問題ねーことでは?」

「へ?」

法「雲霄」

「え!? 雲!? あ! ちょっと!」

雲霄に乗り、ホーカスを追いかけた。

ホ「おー、追い付いた。流石だね。」

法「ドヤア」

ホ「それじゃパパッと終わらせますか。」

法「おー!」

天之助とホーカスは敵がアジトとしている  
倉庫へ向かつた。

「くつー! どうすれば…！」

ホ「おまたせー。状況は?」

「ホ、ホーカス! 良かつた!

はい! 状況は敵はあの倉庫に立て籠り、  
仲間の一人が人質です!

倉庫全体を包囲しましたが、  
未だに反応がなく… それとホーカス  
そちらの人は? 新しいサイドキックですか?」

ホ「いや、この子は雄英生だよ。

今日から職場体験だから連れてきたの。」

「え!? 大丈夫なんですか!?

ホ「大丈夫だよ。だつて彼、最強だから。」

おいおいアンタがそれ言うと

中の人が繋がりで

某呪術師と被るからやめときなされい。

「は、はあ……。」

ホ「てな訳で R A I N Y C R O W N。行ける?」

法「ロンリーで。」

ミ「ロンリーで。」

法「一応職場体験なんスけど……まいつか。

何事も挑戦つてか。」

ミ「トーナメント優勝の実力なら

君なら行けるよね?」

法「勿論です。プロですから。」

ミ「いやまだプロじゃないだろー。」

法「あ。そーだつた。いけねー。」(・・・・・)

法・ホ「アハハハハハハ！」

法「行つてきマース。」

ホ「行つてらー。」

「： 本当に彼一人で大丈夫なんですか？」

ホ「うん。あんな事もあつたけど、

それを乗り越え強くなる。て言うのが  
妥当なんだけれど、彼の場合は

もうホントプロだよ。」

「： なるほど?」

ホ（そう。君はもう、プロになつてんだよ。）

人生舐めんと飴なぶれ。

## どつかの倉庫

「つたく！面倒なこと起こしやがつて！」

フツ！まあいい。こつちには人質が居んだ。  
コイツを盾にすりや、サツもヒーローも  
迂闊には手を出せまい！」

そう言つて いるのは連続強盗犯の敵。

個性『棘』を使つて、様々な悪事を働いてきた。  
今回はアジトに帰る途中、一人の警官と  
バッタリと会つてしまい、仕方なく人質にし、  
現在に至る。

「ヒイツ!?

「ケケケツ！あんま動かない方が身のためだぜ？  
じやねえと何するか分かんねえからな！」

(そうだよ！簡単な話だ！コイツを囮に  
一緒に逃げりや、身代金だつてイける！ケケツ！  
意外と使い道があんな！そうすりや大金だつて……)

法「うつわ。 the 小悪党つて感じの敵だ。」

「つ!?な、何だテメエ！一体何時からそこに!?」  
法「面倒なこと起こしやがつてつて所から。」

「最初からじやねーか！」

天之助は敵が喋りだしてから

ずっと真正面に居たはずなのだが、

前世で影が薄かつたせいか、  
此方の世界でも健在だつたらしい。

けど彼はもう影の薄さには慣れていた。

「新手のヒーローか！」

法 「うーん… 近いっちゃ近いかな。」

「ケツ！誰だろうと関係ねえ！こつちには

人質が居るんだ！大人しくしねえとコイツが…」

法 「それってあの人のこと？」

「は？」

天之助が指をさした先に…

「えーーー！」

人質にした筈の警官が扉前に横たわっていた。

「な!?え!?どういう事だ!?

さつきまで俺の後ろに居たはずだぞ!？」

法 「アンタが何か妄想してゐ際にシユツと。」

「はあーーー！」

敵がよからぬ妄想をしている最中、天之助が  
気づかれない内に霹靂で移動して、  
そのまま担いで助けていた。

法 「もうちよい周りに氣い配りなさいよ。」

「クソ野郎が…俺をコケにしやがつて…」

法 「いや自業自得だろそれは。」

「うるせえ!!もう許さねーぞ!!」

敵が怒った瞬間、体中から鋭利な棘が無数に生えてきた。

法 「短気にも程あんでしょーよ。」

「へへ…こうなつた俺は誰にも止められねえ…」

近づきやお前の体をぶつ貫いて、向こう側が

見えるよう風穴空けてやんよ。」

この敵はこれまでこの個性で

大勢の怪我人を続出させていた記録を持つ。  
大層余裕ぶつていて。しかしそれは  
同時に彼の敗因でもあつた。相手が  
新人ヒーローと侮つたばかりに…

法「フフフ… 確かに恐ろしい個性だ。迂闊に  
近づいてしまえば、大怪我ものだ。その言葉も  
中々に良い台詞だ。感動的だな。

だが無意味だ。」（ ^ U ^ ）

「ああ!? ソイツはどういう…」

法「雷公鞭」

バシイ!!

「な!? 何だこりや!?

法「ほいつ!」

バリバリバリ!!

「ぎゃああああ!?

天之助の雷公鞭からの電撃流し。

マトモにくらえれば麻痺不可避。

法「威力で言えば、スタンガンの3倍かな?  
死にやせんから安心しー。」

完全に氣絶してしまつた敵になんて事ない  
言葉を掛ける。

法「おーい、そこの警官の方へ。大事無いですか？」

「あ、ああ……君は一体……」

法「なあに、タダの体験学習生ですよ。」

ガラガラ…：

扉が開いたと同時に警官達が警戒態勢に入る。  
が、その心配は必要なかつた。

法「お疲れサマンサーで～す。」

それは敵を引きずりながら歩いてきた  
天之助の姿がそこにあつた。  
すると一人の警官が近寄り、

「君！大丈夫か？怪我はないか？」

法「なんら問題はなかつたですよ。それより彼を。  
人質とはいえ、痛めつけられてたみたいで。」  
「す…すみませんでした。」

「気にするな。生きていてくれてたのなら  
それで良い。ちゃんと傷を治して、  
また我々と頑張つていこう。」

「…はい！」

ホ「いや～、良かつた良かつた。やっぱ

俺の目に狂いはなかつたね。」

法「外れてたらどうしてたんですか？」

ホ「知らんぷり」

法「……………。」

ホ「なーんてね。冗談だよ。もしホントに

そ う な つ て と し も 僕 が シ ゴ い て た も ん 。 「

法 「 で す よ ね 」 。 「

：

：

法 ・ ホ 「 ン へ へ へ へ へ へ へ 」

ホ 「 あ 。 飴 い る ? 」 「

法 「 貰 い マ ー ス 。 」

ホ 「 納 豆 餃 子 味 」

法 「 遠 慮 し と き マ ー ス 。 」

後 は 何 事 も な く

初 日 の 職 場 体 験 は 終 了 し た の で あ つ た 。

## ヒーローとは

三日目のあの日、「ヒーロー殺し」ステインが逮捕されたニュースを見た。

あの時確かにデツクンから連絡が入つてた。

まあ俺は九州だからなう無理があるなからなう。

でも本気出せば直行して行けつけどな。

なんやかんやあつて今日が最終日。

そんな俺は今までの日を振り返る。

俺の所はこれといつて変わり映えはなかつた。

事件を聞きつけて、駆けつけて、退治の繰り返しで

自分の実践はあつさり系に終わりそうだ。

おそらくだとは思うがこれは何処に行つても同じ結果になつていたのかもしれない。

周りからして見れば、自分はとても強い存在。プロ級のヒーローとも言われている。

法「皆してもうプロヒーローだつて言われつけどホントにそうなのか？自分はまだプロには通用しない域だと思うんだけど。」

ホ「ホントにプロの域に居るよキミは。」

法「あ、ホーカス。」

ホ「おつかれ。所でいきなり質問なんだけどさ。」

法「ぬ？」

ホ「君さ、何でウチに来てくれたの？」

法「何でか…言られてみりや、何でだろ。

プロなら何処でも良いかなつて思つてましたがあつい個性が故に色々なところに引っ張りだこに

なつてるのは思いますが、それでも自分は自分が強いとは思つてません。

プロつてのは、迅速且つ的確に。んで、被害も最小限に抑えないかん訳でしょ？

そりやそれをコントロールできる人らも居るのは分かつてますよ？けれどもし

災害レベルの戦いになつてしまつたら？

それで人を怪我させてしまつたら？

：自分はなるべく他を巻き込みなく解決出来たらそれでいいんでしょうが…」

ホ「んー、それは君が気に入過ぎてるからだね。気にし過ぎて全力を發揮出来てないやつだ。」

法「そんな気にしてました？」

ホ「うん。その思考が悪いとは言わないけど、ネガティブ過ぎるのもダメでしょ。」

人命第一に考えちやつて遠慮しがちになつてそれじや実力が出せないまま終わつてしまふ。」

法「ぐうの音も出ませんな…」

ホ「全力を出せなきや意味がない。つつともこんな街中でやれないと。」

法「まあその辺は訓練と修行で何とかしますよ。」

ホ「そー。ま、その辺りは自分で努力していくしかないな。頑張れよ、応援してつから。」

法「ありがとうございます。」

午後2時だろうか、ホークスが俺を呼んだ。

法「呼び出したあ何ですの？」

ホ「今日で職場体験も終わりじゃん？」

そのお疲れ様的な意味で天之助君に何処か  
美味しいもん奢つてあげようかと。」

法「じゃあ博多の屋台ラーメンで。」

ホ「早っ、即答か。」

法「九州に来たならば一度本場の味を  
食つてみたかつたんですよねー。」

ホ「そか。今日は特に仕事も

無いみたいだから、丁度良かつた。」

法「想像しただけで腹減つてきた。」

ホ「よーし！腹も鳴つてることだし、  
じゃあ早速食べに出発ーー！」

法「おー！」

猛スピードで博多に直行し、着いたら  
屋台ラーメンにさつさと向かい、

本場の味に舌鼓を打つた。

法「豚骨パネエ。」

ホ「醤油も中々に絶品だぜ？大将！替え玉！」

「あいよ！」

法「職場体験、一週間色々と世話になりました！」

ホ「いやいや、君の活躍もあって、仕事が早く  
片付いたのもあるからさ。本当に卒業後にウチに  
来てもらおうかな？」

法「毎度ラーメン奢つてくれるなら。」

ホ「そいつはちょっと無理があるでしょー？」

法「フフツ。冗談ですよ？」

ホ「ならないけどw

それじゃ、また会う日まで！」

法「はい！またいつかー！」

そうして天之助は空港へ向かつた。

ホ「いやはや、この世代にはどんでもないのが  
沢山生まれて来ちゃつたのかもな。  
法雨天之助：彼も彼でスンゴイ事になりそうだ。」

## 期末じゃー。

夏になってきたこの頃、蝉の声も小五月蠅く、  
太陽もメガマブシーと感じるくらいに容赦なく照らす。  
季節の変わり目つて何か妙にワクワク感出るよね。  
それに浮かれる人は少なからずいる。  
が、油断するべからず。掬われるぞ、足。

相「期末テストまで残り一週間だが、  
お前らちゃんと勉強してんだろうな?  
当然知ってるだろうが、テストは  
筆記だけじゃなく演習もある。  
頭と体を同時に鍛えておけ。以上だ。」

そう言つて教室を去つた。その筆記の中では、  
焦る者、樂観的な者、余裕ある者と様々いる。  
俺? 余裕な方だよ。こつち来てから物覚え良いし、  
それに勉強するに越したことはない。

なんたつて天下の雄英だからね。それぐらい  
やつておかないと。来る日の一週間まで  
皆それぞれのやり方で勉強やトレーニングに励み、  
本場へと。筆記に挑み続けること3日間。  
筆記試験が終了し、頭脳全般を使う試験の次は、  
体と頭を使う試験だ。

### 実技試験会場中央広場前

相「それじやあ、演習試験を始めていく。  
この試験でも勿論、赤点もある。林間合宿に行きたけりや、みつともないへマはするなよ。」  
耳「?先生多いな?」

法（ここ重要とは口では言えない。）  
→

相「諸君等なら事前に情報を仕入れて、何するかは薄々分かつてるとは思うが…」

上「入試みてーな口ボ無双だろ!?」

芦「花火ー！カレー！肝試しー!!」

「残念ー諸事情があつて、今回から

内容を変更しちゃうのさ！」

相澤先生のマフラーの中から出てきたのは、白いネズミのような人？の根津校長だ。

校長の発表に2人は真っ白になっていた。

「「「校長先生!?!?」」

八「変更つて…」

根「これからは対人戦闘・活動を見据えたより実戦に近い教えを重視するのさ！」

と言うわけで…諸君等にはこれから2人1組でここにいる教師1人と戦闘を行つてもらう！」

「「「「!?!?」」」

麗「先…生方と!？」

法（そらそつか。U.S.J.であんな事件起きてつから口ボだけじや生ぬるいってか。人とやつた方がよっぽど合理的だな。これなら状況や

相手の能力なんかで戦況も大きく違うし変わつてくるかんな。）

相「尚、ペアの組と対戦する教師は既に決定済みだ。動きの傾向や成績、親密度…諸々を踏まえて独断で組ませてもらつたから発揮してしいくぞ。まず轟と八百万がチームで…俺とだ。

そして緑谷と…爆豪がチーム。」

緑・爆「!？」

相「で、相手は…」

すると空から誰かが降りてきた。その人物こそ…

オ「私が……する！」

緑・爆「オールマイト!?」

数ある壁の中でも更に困難なヤツだ。キツツ。

オ「協力して勝ちに来いよ！お2人さん！」

その後淡々と組み分けが決まり

1	切島・砂藤	対	セメントス
2	蛙水・常闇	対	エクト・プラズム
3	飯田・尾白	対	パワーローダー
4	轟・八百万	対	相澤
5	麗日・青山	対	13号
6	上鳴・芦戸	対	根津
7	耳郎・口田	対	プレゼント・マイク
8	障子・葉隠	対	スナイプ
9	峰田・瀬呂	対	ミツドナイト
10	緑谷・爆豪	対	オールマイト

と、ここで一つ疑問が浮かぶ。

法「ん？俺は？」

対戦リストの中に天之助の名前が無かつた。  
一体どういうことなのか？

相「ああ。それについてだが、法雨。  
それはお前の相手が……」

「俺が相手をするのだから。」

声が聞こえた後ろを振り向くと、  
そこにはあの人物がいた。

緑「ええ！えええ」

「「「エンデヴァー！」」

轟「親父……!?」

法「どゆこつたい？」

エ「君とは一度一戦交えたいと思つていたが、まさかこんなにも早く叶うとはな。」

その表情は非常に嬉しそうな気がした。

飯「先生！一体どういうことですか!?」

何故法雨君ただ1人だけ!?しかも

エンデヴァーもかなりの上位者なのに!?

相「一旦落ち着け。理由としては、

まず個性。お前らも知つての通り、コイツの個性は半端なく強い。技の種類はもちろん、法雨自身の身体能力もだいぶ高い。

状況判断力も意外とあるし、

それ故に俺達にとつちや、プロ同然なくらいだ。そんな猛者とやり合えるのか多少疑問になつた。」

「「「「確かに。」」」

相「それで学校以外のプロヒーロー何人かに法雨の相手をお願いした所、エンデヴァーが真っ先に名を上げたよ。」

法「はえー。」

根「法雨君は今までも十分に強いけど、実際常に前線に立つ者として

エンデヴァーに来てもらつた訳さ！」

エ「そういう事だ。体育祭で見せてくれたあの闘気、俺にも全力でぶつけに来い。遠慮はするなよ。」

法「…………」

轟（法雨の相手がよりにもよつて親父かよ！）

緑（法雨君対エンデヴァー…  
どんな戦いになるんだ!?）

相「法雨は一番最後だ。氣い抜くなよ。」

法「はい。」

そしていよいよ始まつた実技演習試験。

ルールとしてクリア条件は相手にカフスをかける。又は誰か一人でも演習場ゲートから脱出する事だ。この試験の課題は「相性」。生徒に対し、相性の悪い先生を敢えてぶつけ、いかにして対処するかがポイントとなる。

ハンデとして体重の約半分の重量がかかる超圧縮錘を手足首に付けているが…

初戦の切島・砂藤ペアも、滑り出しは良かつたものの、セメントス先生の生成する壁に圧倒されてしまい、クリアならず。

2戦目の蛙水・常闇ペアは、梅雨ちゃんの起点で黒影がエクトプラズム先生にカフスを掛ける事に成功し、見事クリア。

そんな感じで後の上鳴・芦戸以外はクリア。上鳴らん所は手も足も出なかつた。

根津校長の頭が良すぎたな。

そんな天之助にもようやつと出番が回つてきた。

法「さてライト、行きますか。」

轟「法雨。」

法「ん? どしたトドロツキー?」

轟「… 親父の事なんだが。」

法「あく、まさか俺の相手がエンデヴアーダなんて見当もつかなかつたよ。」

轟「ああ、全くだ。それでお前に忠告しに来た。」

法「なんぞや?」

轟「… はつきり言つて親父は強い。認めたかねえが…」

あんなクズでも腐つてもヒーローだ。

余裕こいて力量を見誤んじやねえぞ。」

法「肝に銘じておこう。ご忠告ドーカ。」

さあ、行こうか。  
戦場へ。

誰？

数日前

相「良しつ。ではある程度対戦相手が決まった所で、問題は法雨天之助。

ヤツを何処に入れるかなんですが……」

相澤先生が天之助の名を口にすると、根津校長以外が顔を俯けた。

普「あゝ、法雨ね。うん……」

ミ「ど、何処にぶつけましようか……」

天之助の相手を誰にするのか。と言つても彼等は自分の所に天之助が来るのを、来てしまうのを恐れてる部分があつた。

原因是体育祭で見た☒・? 霧。

あの形態は雷そのものとなると相澤が法雨から説明を受けたが

説明の回想

相（法雨。あの姿はなんなんだ？）

法（☒・? 霧です。）

相（☒・? 霧？なんだそりや？）

法（ザツクリ言えば雷そのものになれます。）

相（……………は？）

それを教員に説明した時

相（と、法雨は雷になれるようです。）

（（（（……は？））））

妥当の反応である。

個性がある時点で常人離れしてゐるが、天之助は

それを上回る力がある。

自然物になれるということ自体、

更に常軌を逸しているのだから。

これでは自信を無くすのも無理はない。

最初は相澤先生が相手をすれば良いのではないかと

言う声もあつたが、相澤先生は

「本人曰く、たましい靈を視て遠くでも

誰が何処に居るかすぐに分かる。」と言つた。

こつちも法雨からの説明がされてあつた。

これには他教員の顔が一気に青ざめる。

遠い距離から居場所の分かつてしまえば

容易に対処されてしまう可能性があるため、

頼みであった相澤先生も、それでは

どうにもできない。

「てかそれ以前に雷でのスピードが厄介だろ。

お前らも見たる？あの目にもとまらぬ速さ。」

この議論で最も注目したのが天之助のスピード。

特に霹靂での移動速度。因みにちょっとした雑学になるが雷の速度には3つの種類があり、

まず電光と言う光の速さで例えた速度は、

秒速30万km。これは1秒に地球を7周半できる速さらしい。次に雷鳴。音の速さで、

こちらは1秒で340mほど進む速さだそう。

最後に本体の稻妻の速さ。光速よりも

ずっと遅いものの、先駆放電と呼ばれる先端から広がつて行くアレは秒速200km程度である。

(光速の約1500分の1)

その後に発生する主雷撃というものは、

秒速10万kmと光速の3分の1の速さにもなる。

この先駆放電が天之助の現在の霹靂の速度らしい。

しかし現在天之助は長距離での移動ならまだしも、

近い距離からとなると、

速度を抑えて使うのでその辺りまだ調整中らしい。

そうは言つても動きを捉えるどころか、

目で追うことすら困難といえる霹靂は

自分達ではどうする事もできない状態だ。

すると根津校長からある提案が出された。

根「それなら他のヒーローに  
頼んでみるのはどうだろう？」

他のヒーロー。自分達以外のヒーローに天之助の  
相手をしてもらえないかという事みたいだが

セ「いやしかし… それでは我々と同じようになつてしまふのでは…」

根「そんな事もないさ。この世には幾多と

ヒーローが存在している。彼との戦闘でも充分に  
渡り合える人材なんて沢山居る筈さ。」

校長の言葉に納得したように頷いた。

さらに校長が続けて

根「で、その相手候補としてある程度の目星は  
付けてある。その1人がエンデヴァーサ！」

エンデヴァーの名に一瞬驚いたが、すぐ様察した。  
ス「確かに彼なら法雨とも張り合えるかもしれない。」

ブ「エンデヴァーに賭けてみつか？」

相「実力、判断力に長けたあの人なら大丈夫だとは  
思うが… まあ一応何かあれば此方も

すぐ対処できるようにしどきましよう。」

その後目星の付けていたヒーローに連絡入れたが  
実力面では勝てないと断られてしまつた。

結局名を上げたのはエンデヴァーただ1人だつた。

※ホークスも行こうと思つたが本拠地が九州なのと  
仕事上の都合で止めたそう。

そんなこんなで

只今戦闘中

普通なら開始からだらうけどまーそれは置いといて  
取つ組み合つてる最中のようで。

法「ていつ！」

エ「フンツ！」

霹靂の移動の利用で蹴りを仕掛けたが、  
見事に見切られた。

法「ありやまー。予想はしていたが、  
そう簡単にはイカンよなあ。」

エ「当然だ。が、こちらも油断出来ぬ相手だからな。」  
エ（何せ相手は天候をいとも簡単に変えてしまう男。  
体を雨や雪で冷やされるのを警戒しつつ、  
攻撃に専念した方がいいな。）

法（エンデヴアーレの個性は獄炎。  
ヘルフレイム

雨降らしても蒸発しそうだし、

ここはアイツが効きそうかな？）

互いが互い、1歩も油断できない状況。

しかし制限時間もあるため早く脱出するか  
カフスを掛けなければ天之助は失格となる。

法（もー考えるのはやめた。時間も惜しいから  
いきなり最大で行くかえ。）

後先考えるのをやめた天之助の足元に  
電流が走り…

バリバリバイイイイ!!

☒・?靄へと変身した。

エ「やはりそれで来るか。そう来なくてはな。」

法「とりまね。最低保証みたいなもんですワイ。」

アンタと渡り合ってや、これくらいじやないと。」

エ「フンッ。… 所で一ついいか?」

法「何すかえ?」

エ「君には大いなる素質がある。実力は勿論、判断力、学力ともに素晴らしい光っている。そこで提案がある。私と一緒に霸道を歩まないか?」

法「はい?」

エ「私と共に来れば、今よりも更に上へと昇り詰める事が可能だ。」

その個性ならば、私を、いや下手をすればオールマイトすら裕に超えられる力がある。どうだ? 私と一緒に霸道を歩もう。」

エンデヴァーの勧誘に対し、天之助はこう返した。法「あのー今何してるか分かります? 戦闘訓練でつせ? 勧誘の時間じやねーですよ? そーゆーのは後にして頂けますかい? でもつて、闘いに集中してください。」

勧誘なら他所でやれとエンデヴァーに言い聞かせ、続けようと言った。

エ「…これは失敬。確かにこんな所でするような話ではなかつたな。では改めて…行くぞ。」

エンデヴァーが本気になり、一瞬で間合いを詰め、炎を纏わせた拳で殴りかかってきた。

対する天之助は返すように雷の拳を突きだし、炎と雷が激しくぶつかり、轟音と衝撃波を生んだ。

ミニタールーム

切「スゲエ! 拳がぶつかつた瞬間に

あんなデケエ衝撃波が…！」

芦「もしかしてのもしかしたらワンチヤン法雨の勝ちあんじやない!」

緑（相手はN.O. 2ヒーロー。けど法雨君なら大丈夫！きっとエンデヴァーと渡り合えるそれ以上の力量を付けてきてる筈だから！）

轟（法雨。絶対親父に勝てよ。

お前ならやつてのけるって信じてるぞ。）

法（敵と思い込めば遠慮せんでいいな。本人もそう言つてたし、お望み通り、オモツクソブツ飛ばしたろかな。）

エ（今まで組み手等を何度かしてきたがここまで骨のある奴は初めてだ。）

ますます引き入れたくなつたぞ。法雨天之助！）  
闘いは依然として五分五分な具合。もし制限時間が無かつたとしたら恐らくどちらかがダウンするまで永続的に続いていたであろう。誰もがそう思った。

が

それを変える不思議な出来事が彼らを震撼させた。

エ「まだ動けるようだな。普通の者ならもうとつくにくたばつて いる頃だがな。」

法「鍛えてますから。」シユツ

エ「ハアツ！」

法「ヌウン！」

天之助とエンデヴァーが同時に攻撃をしようとした

その時

異変は起きた。

ドクンッ

法 「うつ!?

エ 「ツ!?

エンデヴァーは何かを察知し、後退した。

法 「う…あ…」

エ 「急に苦しみだした？ 個性に問題が発生したか？」

天之助は苦しそうに胸と頭を抱え悶えている。

法 「あああああ…」

エ （明らかに様子がおかしい。嫌な予感もする。）

飯 「法雨君が苦しみだしたぞ！？」

「一体、どうしたんだ!?」

轟 「なつ!?

緑 「まさか個性の影響!？」

法? 「…………」

暫くして天之助はその場で立つたまま静止した。

エ 「どうした!? おい！」

意識があるなら返事をしろ！」

法? 「…………」

エ 「聞こえているのか『五月蠅イ』ツ!?

法? 『そウ何度も叫ブな。鼓膜が破ケル。』

エ 「法雨天之助? ……いや、貴様は一体何者だ?」

法? 『察スるのガ早くて助力る。私ハ?』

簡単に言エば?? „彼奴“ のもう1ツの人格トモ言才う。

名は…

レインと名乗ッてオコう。』

力差

エ 「レインだと？」

レ 「そウダ。」

エ 「別人格と言つたが、

それは法雨本人は知つて いるのか？」

レ 「いや、何セ 出て クルのハ 今日が

初めてダカラナ。恐ラク 知ラヌ デアろう。」

エ 「では聞く。何故このタイミングで 出てきた？」

レ 「強者」

エ 「？」

レ 「私は強者ヲ求めた。然しこの世では強者はほンノ一握りダケトなつてシまつタ。

私は『彼奴』が産まれた時から存在して いるが、無論、そノ事を彼奴本人は知ラン。強者が現れるまデの間ズつト奥底で眠つていタからナ。

ソしてソレが今ダ。漸く 来た。貴様がな。」

エ 「私を選んでくれたことは 実に有難いが、お前がただ演技しているのか、

本当に別人格なのかは置いておき、引き続き、お前の力量、見せて k…」

レ 「もう駄弁ルな。鬪え。」

エ 「!」

エンデヴァーが喋つて いる途中、

突如レインが瞬時に背後に移動し、天雨で殴りかかつた。

エ (しまつ・・・！)

グドボオウ！！：

咄嗟にガードしようとするとも間に合わず、  
顔面からくらつた。

エ「グhaar…」

レ「貴様が今こノ場ニ居るのハ闘ウ為だ。  
駄弁る為ジやナイ。」

エ「…容赦がなさ過ぎる氣もするが…：  
応えるしかないか。」

レ「そうダ。それで良い。」

エンデヴァーはすかさず戦闘体制に入るが、  
レインは何の構えもせず、突つ立つたままだ。

エ（挑発のつもりか？何の構えすらしないとは。  
が、油断大敵。ここで慎重に出なければ、  
此方がやられる。）

レ（出方を伺つテいルノ力。なら、  
先手必勝と行コウか。）

バチイツ！

レインは一瞬にして消え、行方を眩ます。

エ（またしても高速移動か。今度は  
何処から来るか？）

しかし待つても一向に攻撃してくる様子はなく、  
ただ周りを飛び交っている。

更にその都度聞こえる電気音は

まるでエンデヴァーを嘲笑うかのように。

エ（何処から攻撃してくるか分からぬ以上、  
下手には動けん。後ろを取るか、  
真正面から来るか。はたまた…）

辺りを警戒しつつ、反撃の機会を待つ。

が、それが叶うことはない。何故なら……

ゴゴゴゴゴゴ……

エ「音？……!?下か！」

ドゴオーン!!

その下からレインが飛び出してきた。

レ「これは流石に分かりやすかつた力。」

エ（周りで聞こえていた音は凶。

その間に地に潜り、攻撃してきたか。）

レ「モツと凝ツた物の方ガ良かつタかな？」

エ「そしたら私はどうなつていたのだろうな？」

レ「さア？……残り時間二はまだ余裕はあるが、一気に飛バして行くゾ。」

レインが持つ天雨に電流が走り、光と音と共に激しきを増してゆくと、

レインは振り払うように横に薙いだ。

ブウウウウウン!!!

薙いだ瞬間、周りの建物は一瞬でヒビ入り、あつという間に倒壊してしまった。

残つたのは建物の残骸とエンデヴァーとレインそれだけであつた。

エ「うう……」

吹き飛ばされてしまつたエンデヴァーは瓦礫の中から這い出てきた。

エ「払つただけであの威力……末恐ろしいな……

それに法雨天之助本人がこの様な無差別範囲攻撃をするとも思えん。

これは本当に別人格の仕業らしいな。」

レ「ヨうやつト理解出来た力。」

そこへ雷インがエンデヴァーの元に近づく。

エ「これだけの被害をだしておいたんだ。」

お前には色々と聞かなければならぬ事がある。」

レ「ヤレるものなラな。」

立ち上がろうとしたエンデヴァーが、ふとある物が目に付いた。

エ「雷の……槍……？」

全長およそ3mはあろう槍状の雷が目に止まつた。

レ「ん？あア此れ力。此レは電氣系統の雨冠ヲ集結さセタ物だ。名は……」

雷霆擊滅槍ケラウノスと呼ブ。」

エ「ケラウノス……？」

レ「一度は聞いた事はアルだロう？

全知全能の神・ゼウスを。彼が持ツテイタ武器だヨ。」

そのオマージュ的なアレだ。……と、

喋力り過ギたな。デハお次に……??」

レインが右手を擧げると掌から小さい雲が現れ、それが空へと広がつてゆき、たちまち空は

鈍色の雲に覆われた。

同時にポツポツと雨が降り出してきて、次第に雨は強くなり、豪雨に近い状態となつた。

レ「これ手良し。サア、倒させてモラ御ウ。」  
レインはそう言うと再び霹靂で高速移動し、翻弄させてくる。

エ「それは先も見た。少しさは……学習しろ!!」  
エンデヴァーはレインがどのタイミングで攻撃してくるのかを計算し、ある程度の行動パターンを予測していた。それはとても正しい判断であった。普通であれば通用しただろう。  
レイン：もとい天之助が規格外でなければの話だが。

バチバチバチイ……

エ「なつ!?

纏炎の拳で攻撃するも拳が体をすり抜けていた。  
今彼は▣・?謄なのだ。

この形態になつた彼に物理攻撃は効かない。

レ「学習しテイないノは……ドつちだ!!」  
直後その隙に雷霆撃滅槍<sup>ケラウノス</sup>で斬りつける。

エ「ぐあつ!!」

斬られた反動で後ろへ飛ばされた。

レ「知らんのか? 私は雷ソノモノ。貴様の生温イ拳でダメージを与エられるダナビト、実に滑稽に思えテクル。

今まで当たッていたのはワザと当テさせていた  
力らだヨ。公平を期ス為ニネ。有難ク思え。」

エ「調子に乗りおつて……!!」

レ「フィナーレだ。楽しかッタぞ、エンデヴァーよ。」

雷霆撃滅槍を天に掲げる。

ゴロゴロ...

雷鳴が聞こえる。電光が見える。

いっぽい  
いっぽい

ゴロゴロゴロゴロオ!!

雲から生成された雷は雷霆撃滅槍に集まり、  
集まつてくる際の雷はシャンデリアの如く輝きを放つ。

危機を察知し、すぐさま防御体制に入るが  
それすら意味を成さなかつた。

雷霆擊滅槍  
世界終焉

最後に聞こえたのは、その言葉だった。

数刻後…

法「うーん…」

」。」  
「

法  
「ん」  
」

法  
「  
」

レ 「オお起キろつツてンダローー!!」

レ「てメエがさつサト起きネエかラだろーガーーーー!!」

法「D A ☆ M A ☆ R E ! 僕あ寝起き悪い方なんだよ！」

レ「知つトるワ！んナ事あよおーー！」

法「だつたら起こすなやーー！」

レ「起コさねート話が進マネえんダよ!!」

法・レ「ハア…ハア…ハあ…」

漸く二人は落ち着きを取り戻し、天之助は先程から気になっていたこの不思議な空間と今の自分の状況について質問していく。

法「なあ、ここ何処?」

辺りを見渡す限り、全てが雲で覆われており、所々には雷も鳴っている。

レ「ココは才前の精神世界ノ中。現実のお前ハ疲労デ眠つてイル。で、気になつテイるとは思ウが私が誰力と言うト、名はレインと言つて、簡単に言エバお前のモウ1つノ人格ダ。」

法「えつ? 何ソレ怖つ…。え? 何時から居た?」

レ「産ミ落とされて直グだ。」

法「結構最初からじやねーか!!」

レ「別に隠シてたトかそウイう訳ではないゾ? 時期を待ッていただけケダ。」

法「時期? 何の?」

レ「強者だよ。ツワモノ。お前も時折思ウダろう? 自分の個性は強過ぎタガ故にマトモに張り合える相手がオらず退屈し、自分と張り合エる奴に出会えルノを渴望していた事ヲ。結果、ソの思いガ無意識ニ私を生み出シた。つて訳だ。」

法「へえー。つまりお前は俺の欲望、闘争心が

形になつて現れた的な存在？」

レ「そうナルな。その相手がたまたま  
エンデヴァーだつたようだな。」

法「ふうーん。てかちよ待て？」

そいや今更ながらサラツと俺の試験  
横取りしてんじやん？何してくれてんの？

もしやり直しとかになつたらどうすんの？

流石の俺も骨が折れそうになるよ？」グイグイクル。

レ「詰め寄りすぎるな。多分エンデヴァーなら  
私の放ツタ技でダウンしテるから

やり直しの可能性は無いと考エられル。

と言ウカ、才前は本当に自己評価が

異様に低イト言うカ。もう少シ前向き二

自分自身ノ評価を上ゲても良かろうテ。」

法「ぬう…まあそれはそれとして、結果は？」

天之助は入れ替わつた後の出来事を

レインから説明された。

レ「…てな感じで私の圧勝同然に終ワつた。」

法「マースゴイ。」

レ「驚き加減が薄過ギヤしないカ？」

法「本来なら俺の相手だつたのにそれを  
お前に奪われたんだからそりや

気分も斜めるわ。」

レ「駄々ツ子か。」

法「悪いカよ。なら憂さ晴らしに  
重いの一発ブウン殴らせろや。」

レ「丁重にお断りスル。」

こんな調子で暫く二人はいがみ合い続け、  
数十分後、やつとこさ落ち着いた。

法「はあゝもゝ…つか何時になつたら  
目が覚めんだよ。」

レ「ん？ そんなノアそこに行けば覚メるゾ。」

レインが指さした方向には小さな穴が  
ぽつかりと開いていた。

レ「あそコから出レば現実へと目覚めるゾ。」

法「先に言え。」

レ「ズット前からそこ二あつタのに  
氣付かナカツたお前が悪いだ口？」

法「ヌツ：まあいつか。あ、出る前に1個聞くけど

いいか？」

レ「何ゾ？」

法「お前が使つたつて言う雷霆撃滅槍ケラウノスだつけ？」

アレつて俺にも使えんの？」

法「練度次第デ使える様になル。アーフ、雷霆撃滅槍ケラウノス以外にも一応

技を四ツくらい作つタンだが。」

法「そーなんだ。それも勿論？」

レ「使工る。技名は……」

法「ふむ、了解。じゃ、もーそろ起きるか。」

レ「そウカ。」

法「じやあな。あ！ 次入れ替わる時は  
俺に相談してからにしろよー！」

レ「あア。」

そう言い残し、天之助は現実へ戻つて行つた。

レ「ん？ さつき入れ替わる際は相談しろ？」

ふと誰かが喋っているのが聞こえてきた。  
現実へ戻ってきたのだと。

法「んうん？ 知らない天井？ 知つてる天井？」

緑「あ！ 法雨君！ 良かつた目が覚めて！」

飯「法雨君！ 気がついたのか！ あの技を打った後  
突然倒れたから心配したぞ！」

試験が終わり、治療室で約2時間寝ていたようで、  
暫くしてクラス全員が見舞いに来たそう。

ふと爆豪に目をやると何か不服そうな顔をしていた。

轟「色々と聞きてえ所だが、まずは  
体の方が大事だ。ゆっくり休んどけ。」

爆「……。」

法「おー……（さて、レインの仕出かした事の説明  
どーしょーか？ 正直に言うか濁して言うか

何方にしよ：『オーい、聞こえるカー？』ツ!?)」

事情の説明を考えている最中、突如頭の中から

レインらしき声が聞こえてきた。

法（あー… うん！ 疲れているからこれは幻聴だな！  
きつと！ そうに違いない！）

レ『現実逃避はやめ口。シっかりお前の頭の中に  
語りかけてル。私はお前デモあるノだ力ら  
コレクらい容易だ。』

法（ナチュラルに平然とやつてのけないで  
くれますかね… てか何用？ ついさつき  
別れたらばつかだよな？）

レ『オ前ガ別れ際二「次入れ替わる際は相談しろ  
ツてソウ言つタダろ？』

法（言つたな… え？ まさか今？）

緑「？… 法雨君どうしたの？ やっぱりまだ  
具合悪いの？」

法 「ん？あ、大丈夫。お気になさらず。」

切 「にしてもえげつねえくらいデケエ雷だつたな！」

芦 「ビックリしたよね！最初何が起こつたか分かんなかつたもん！」

上 「被害とかは尋常じやなかつたけど、やつぱカツケーつて思つちまつたよ！」

俺 「あんな風になれつかなー！？」

耳 「いや無理でしょ。上鳴アホだし。」

上 「何回言うんだよ！それ！」

瀬 「改めて法雨がとんでもねえ奴だつて自覚させられたよ。」

常 「雨冠の猛者…悔るなかれ。」

レ『まあツマリは私が言えバ話が早く進ムと思うぞ。』

法（ウーム… そうかなあ余計な混乱を招きそうな気もすつ k…）

ガラガラ…：

相「法雨が目え覚ましたようだな。」

そこへ相澤先生もやつて來た。容態と例の件について言及しに來たのだろう。

相「法雨。分かっているとは思うが、試験の事についてだ。单刀直入に聞く。何故あんな事をした？」

お前の放つたあの衝撃波はお前を中心にお

演習場の大半が殆ど跡形もなくなちまつた。ヒーローとしても有るまじき行為だ。

その理由は何だ？」

法「…」

相「法雨？」

緑「法雨君?」

法「…………。」スウ

法雨?はゆつくりとベッドから降り、  
相澤先生の元へ近づき、  
まじまじと見つめだした。

相「どうした?」

レ「……初メテ見ルが此奴が教師?  
あマリそ二は見えンがナ。」

「「「!?!」「」」

相「は?」

レ「もう少シ身なりヲ綺麗にシタラどうナんだ?」

飯「法雨君?!いきなり何を!?」

爆「……いや、法雨じやねえなテメエ。」

轟「お前は一体誰だ?」

上「え?!どゆこと?!法雨じやないって何!?」

レ「ハハっ!誰だ?:かエンデヴァーも最初  
氣付イた時、同ジ言葉を発しテいたナ。」

轟「ツ!」

相「……で、誰なんだ?」

レ「そコまで警戒せんでいい。危害も加えるつもりも  
毛頭ない。では自己紹介といこう。」

私の名はレイン。タだの二重人格者だ。」

## 林間合宿までの話

相澤 side

法雨の二重人格・レインと名乗るソイツ。パツと見変わつていないうるように見えたがよくよく見ると目の色が違つていて、元の乳白色から鈍色に変化している。あと喋り方か。えらくカタコトだが。と、この話はいいな。本題に戻ろう。

奴は試験での出来事は全て自分のせいであつて、法雨のせいではないと言つてはきたが、まず俺は二重人格説を疑つた。

個性だからと言う理由だけではなく、普通に考えての話だ。有り得ないからだと個性にはそういうしたものも珍しくはないが、可能性的にも低いと判断し、いくつかの質問をした。  
⋮ 質問が進むにつれ、

段々と二重人格説が濃くなつてきた。いや、最初こそ作り話かと思つたさ。作るにしても出来すぎかとも感じたがどの話も妙に信憑性が高いのなんの。

挙句には俺の過去をクラスにバラすと脅されたんでも不本意ながらレインの存在を一先ず信用することにした。

その後レインは寝ると言つてベッドに沈んだ。

天之助 side

法「……………ハツ！」

相「お？ 法雨に戻ったか？」

法「あり？ ……はあ。あんの野郎また勝手に。」

相「法雨。起きて早々で悪いんだが、  
レインから伝言がある。」

法「ぬ？ レインから？」

相「『代ワリにエンデヴァー治しトけ。』つて。」

法「テメエのケツも拭けんのか。」

それと、他の皆さんは？」

天之助が再び目を覚ました時には、

緑谷達の姿はなかつた。

相「彼奴らなら教室に帰つたよ。  
いつまでもここに居られるのも  
時間の無駄だからな。」

まあコレがこの人だなと思いつつ、  
エンデヴァーのいる保健室へと向かつた。

相「失礼します。」

エ「来たか。」

相「お身体の方は？」

エ「ああ、リカバリーガールのおかげで  
回復は順調だよ。」

相「何事もなくて良かつたですよ。まつたく、  
レインの奴がここまでしなきやの話ですがね……」

法「いや俺見て言われましても……」

エ「あまり彼を責めないでやつてくれ。

当の本人も知らなかつたようだし。何より

レインと戦つてみて分かつた。奴の前では俺は…

：無力同然だつた。」

その言葉からは霸気が全く感じられなく、  
プロヒーローとは思えぬくらい弱々しかつた。

余程悔しかつたのだろう。

天之助も今日初めてレインの存在を知つたが、  
レインには全身が殺氣で押されているかのような  
謎の威圧感が放たれており、とてもじやないが  
逆らえば即殺されそうな雰囲気を醸し出しており、  
天之助も肌でひしひしと感じていた。

法（つか、今までのずっとあんな恐ろしいのが  
自分の中に居たつてなると余計怖えな。）

相「それはそれとして法雨。エンデヴァーさんのこと  
治せんだけ?俺と13号の時みたいに。」

法「あー、その事なんですが、怪我の状態から見て  
時間がかかりそうに思います。

なので手つ取り早く治す為に相澤先生らの時とは  
別の方法で怪我を消します。驚きすぎて

腰抜かさないようにお願いしますよ。」

相（まさかまたどんでもねえ事するんじや…）

法「ではエンデヴァー。いきますよ。」

エ「よろしく頼む。」

天之助はエンデヴァーの額に手を付けこう言つた。

その言葉と同時に

エンデヴァーの体に変化が起きた。  
体に巻きついた包帯が剥がれるやいなや、  
なんと受けた傷がみるみるうちに塞がつてゆく。  
まるで時が戻るかのように。

相・エ「[!?!?]

こうして数分も経たないうちに  
エンデヴァーの傷は完全になくなつた。

法「ふいー、終わりましたよ。」

相「おい…お前今…何した？」

エ「傷が癒えた？いいや、それとは  
また違う…一体何をした？」

法「え？まーそーですなあ…簡単に言えば  
時間を巻き戻したって所ですかな。」

天之助の何気ない言葉に二人は絶句した。

何事にも時間には逆らえない。

それが自然の摂理。が、この男は時間の巻き戻しを  
なんの躊躇いもなくやつてのけた。

異常としか言いようがない。

相「時間を巻き戻した…だと…」

法「何言つてんだこいつって思いましょうけんど  
これは事実なんですマジのマジで。」

エ「時間を巻き戻す。見ようによつては

便利な力かもしれない。

だが、それは世界においては大問題の発端になりかねん。

たとえそれが事実だとしても軽々しく話すことでもない。この事は

教員と俺と君だけの秘密事項にてしおくぞ。」

法「了解致しました。」（ O W O ） ッ

エ「分かつてもらえた所で、

先の能力の詳細を教えてはくれるか？」

法「はい。針零戻刻<sup>リワンドゼロ</sup>と言うのは

対象物、対象範囲内の者を

自分の決めた時間帯までに時間を戻す能力です。戻せる時間は1週間前まで。

これによる他の時間。つまり周りへの干渉は一切ありませんので問題ないです。

あくまでも1対象なので。

そして同じことが繰り返されない限り、

元の状態にはなりませんのでご安心を。」

エ「成程な。俺の場合は状態を見るから察するに戦闘前までに戻されたと言つたところか。」

法「Exactiy. こつぴどくやられてましたからね。」

なので始まる前の状態に戻させていただきました。」

相「お前はどんだけ規格外な技編み出しや気が済むんだよ。」

法「あ、でもこの能力は俺じゃなくてレインが作つてたみたいですよ。」

相「作つてた？ 作つたではなく？」

法「もう何個が出来てるのがあるみたいで。あの時の雷霆撃滅槍<sup>ケラウノス</sup>とか。」

相「…もう驚かねえぞ。」

疲れるということ自体に疲れてきた。」

なんやかんやあつてエンデヴォーの体調も完治？  
したので良しとしよう。

法（さて、いよいよ林間合宿も近くなつてきている。  
強化に向け新たに作つた技を磨かなければな。）

翌日

法「おはようおーござ……んす？」

天之助が教室に入ると、そこには暗い顔をした

切島・砂藤・芦戸・上鳴がいた。

法（まるでこの世の終わりだな。）

芦「みんな……合宿の土産話……

楽しみに……してることから……。」

緑「ま、まだ分かんないよ？」

どんでん返しがあるかも知れないよ!!」

瀬「よせ緑谷。それ口にしたらなくなるパターンだ。」

上「試験で赤点取つたら林間合宿行けずに補習地獄。

そして俺らは演習試験クリアならず……！」

コレでもまだ分かんねーのなら、

貴様の偏差値は猿以下だ——!!

緑「ア、——!!」

荒ぶる勢いで緑谷に目潰しをかます上鳴。

瀬「落ち着けそんで長え。

俺自身だつて分かんねえのに。」

かく言う瀬呂もクリアこそしたもののは、

途中で寝てしまい、そのほとんどが

峰田のおかげであるため、判定に不安があつた。

法「f f 外から失礼しますえ。採点基準つてまだ明かされてないよな？」

ちゃんと聞かな分からねえんじやねいか？」

上「同情するならもう何か色々くれー!!」

相「呼び鈴鳴つたら席に着け！」

相澤先生の掛け声と共に全員が席に着く。

シーケンス：

相「おはよう。今回の期末テストだが、残念ながら赤点が出た。よって林間合宿は……

全員行きます！」

((((（どんでん返しキタ——!!!!)))

相澤先生の思いもしなかつた発現!に4人は心の中で大いに喜び叫んだ。

法（わーめつさ喜んでおられるな）。

天之助は表情から読み取つてる訳ではなく、常時『靈探心視』が発動しているので、心の声がも丸聞こえなのだ。

相「赤点者だが筆記の方はゼロ。実技で

切島・上鳴・芦戸・砂藤。あとは瀬呂が赤点だ。」

瀬「やつぱりかく……」

相「今回の試験。我々敵側は生徒達に

勝ち筋を残しつつ、

どう課題と向き合うかを見ていた。

でなけりや、課題がどうとかの別に詰む奴ばかりだつたろうからな。」

尾「じゃあ、全力で叩き潰すつてのは…」

相「追い込むためさ。

そもそも林間合宿は強化合宿だ。

赤点取つた奴こそ

ここで力を付けてもらわなきやならん。

合理的虚偽つてやつさ。」

((((合理的虚偽イイイイ!!!))))

法(いつもの!)

相「ただ全部嘘つて訳じやない。赤点は赤点だ。

お前にはベッドに補習時間を設けてる。

ぶつちやけ学校に残つてやるよりキツいからな。  
どちらにしろ地獄が待つてゐる事に  
絶望する5人なのであつた。

そして天之助は忘れていた。

奴  
ら  
が  
来  
る  
事  
を。

## 一步踏み込む

授業の後、林間合宿で必要な物を皆（一部を除いたメンバー）で買いに行く事になり、天之助も誘われたのだが、

他に用事があると言い誘いを断つた。

それはレインから教わった技の特訓だ。

本人曰く、

天之助が創る技よりも練度が必要らしく、  
例えば前に使つた針零戻刻（リワインドゼロ）。

あれはレインの補助があつたため即座に使えたが、  
レイン抜きで使用すると

どうなるのか確認するため、家に帰ってきてすぐ、自分の部屋のゴミ箱から紙屑を取り出し、

それで実験してみた結果、

少し歪みが生じたのち、一瞬で消えた。

法「……え？」

：引いた。とても引いた。

目の前で自分がやつた事に。

意識の集中はしていた。が、それでも失敗した。

つまり、今の自分自身の力ではダメなのだ。

上手くコントロール出来ないと

取り返しのつかない事態になりうる。

上手くコントロール出来ないと大切な物が消えてしまうという危機感を覚えた天之助は

これは遊んでる暇はないと思い、

更に修行を厳しくする事を決意した。

他の皆には申し訳ないが、

遊び相手をしてやれない罪悪感もあつた。

そんな中レインはと言うと、

暇されあればまた新しいのを創ると言つてのだが  
お前は暇もクソもないだろと心の中でツッコんだ。  
法「…先は長い。けれどやるつきやない。  
必ずこの林間合宿でも断然手を抜かずには  
レベルアップしてレインの技も物にしてやる！  
…と言いたいんだけど

まずはあつちの方を何とかしなきやだからなあ。」

迎えた林間合宿当日

物「え？ 何何A組補習いるの？  
つまり赤点取った人がいる… つてこと!?  
おかしくない⁈ 2

A組はB組よりも優秀な筈なのに!?

あれれれれれ!?

と煽りちらかす物間にすかさず拳藤が手刀を入れ、  
気絶させた。

拳「ごめんね。」

緑「あ、はい…。」汗

「物間怖ツ。」

「体育祭じやなんやかんやあつたけど、  
よろしくね！ A組！」

そんなB組の女子を見て峰田はまた興奮していた。

峰 「よりどりみどりかよ‥」

切 「お前ダメだぞ。そろそろ。」

飯 「A組のバスはこつちだ！席順に並びたまえ！」

蛙 「‥‥。」キヨロキヨロ

A組の生徒もバスへ移動する中、梅雨ちゃんが  
あることに気が付いた。

芦 「‥‥？どしたの梅雨ちゃん？」

蛙 「それが、法雨ちゃんの姿が見えなくて‥‥」

そこに天之助の姿がなかつたのだ。

芦 「え？あ！言われてみれば！」

先生！法雨が居ないんですけどどうしたんですか？」

緑（本当だ。居ない。）

その指摘を受け、他の皆も疑問に思つた。

相「法雨は学校の方で別件があつてな。  
俺達より遅れて来ることになつてる。」

上「別件？何すかその別件つて？」

相「それはお前らが気にするもんじゃねえ。  
分かつたらバス乗れ。」

そう言われ皆が不思議に思いつつも、  
バスへと乗つて行つた。

緑（別件‥‥一体何だろう？）

雄英高校・給湯室

法「…………。」

オ「…………。」

そこには向かい合つてソファに座つて いる天之助と  
オールマイト（トゥルーフ）の姿があつた。

しばらくの沈黙を破つたのはオールマイト。

オ「それで、君はどこまで知つて いるんだい？  
私のこと、傷のこと、緑谷少年のこと……」

ワン・フォー・オールのことを。

法「さあて、どこから話したものか。」

遡ること昨日の放課後

職員室へ戻る最中のオールマイトは  
オ（緑谷少年、自壊はまだ多いものの、  
着実に成長しつつある。

私も陰ながら支えてゆかねば！）

と

法「でも過度にやり過ぎないのも  
またそれらしい。」

オ「!?」

法「ドーカ。」

そこには下校した筈の天之助が  
待つて いるかのように壁に寄りかかつて いた。

オ「法雨少年……？」

(今私の言葉、口にしていないはず……)

法「それは俺に読心能力がある事を想定すれば  
容易いのでは？」

オ「なつ!？」

法「ま、それはいいとして、ちとアナタに  
用がありやーしてね。」

オ「私に? …… その用とは?」

法「そんな身構えんでもいいですって。  
なあに簡単な話ですよ。」

アナタが5年前に受けた腹の傷  
の件でちょっとね。」

オ「!!?」

オールマイトは驚愕した。

5年前、かつて悪の象徴として君臨していた  
ヴィラン、黒幕 A F O。その戦いの末

何とか勝利できたものの、  
右腹囲に深手の傷を負わされ、  
活動限界を強いられてしまった。

この事はごく一部の人間しか知らない事実。  
それを何故この男が知っているのか。  
法「さつきから驚きっぱなしですね。  
まあ無理もありませんわな。」

オ「… 何が目的だ?」

法「疑う気持ちも分かりますが、別にマスゴミとか  
に言いふらしたりとかは微塵もないんで。  
そこでこの話の内容はまた明日に。合宿は  
俺は遅れて参加させてもらうようについて。」

自分と話があるからってオールマイトから  
相澤先生にそう伝えておいてくれませんか?」

オ「……。」

オールマイトは少し考え、

オ「分かった。この話は他の先生方にも  
伝える方向でいいね?」

法「勿論それで構いません。では、また明日。」

そう言つて天之助はその場を去つて行つた。

オ「何故彼が傷の事を……。」

まさかOFAや緑谷少年の事も?」

法「さーてライト、これで良かつたんだなレイン?」

レ『ああ。

後ハ俺が教えタアノ技をマスターすれば、  
奴は完全復活ラ果たすでアロう。』

法「それでも

何でお前がオールマイトを気にかけんだ?

ファンになりそうな性格でもなさそうだし。』

レ『ナあにタダの気まぐれさ。奴にはまだ  
働いてもラウつもりなダケさ。他意はない。』

法「ホントかよ。』

レ(マー、オールマイトと1戦

やり合ツてみたイガ為の嘘なんだが、

どうやら此奴ハはなツカラ助ケるつもりで  
いタようだ。これが所謂win-winダツけか? )

法(既に原作改変起きてるかもだけど、

俺の手で起こしてみたいなうとは思つたが…

まさかレインからオールマイトの傷を治せだなんて。

雨でも降んのかと思つた。雨冠なだけに（笑）。

しかももう創つてたし、技。

でももし本当にそれが俺に出来るのなら

とことんやつてやろうでねーの。

よーし！帰つたら最終調整ダオラ！）

そして今に至る…：

法「まあ、俺の知る範囲では

あなたが緑谷にOFAを受け継がせた事。

OFAは代々継承されてきた個性だという事。  
そしてあなたは5年前に深手の傷を負い、  
活動限界がある事。つてどこですかね。」

オ「そこまで知つているのかい。」

と睨みを利かせるオールマイトに対し

法「つつても全てを知つてる訳じゃなくて、  
俺が把握してるのは今言つた3つだけですから。」

オ「本当に？」

法「確かに。」

と言うがあながち間違いでもなく、前世では  
途切れ途切れにしか観れていない。  
なので抜けている箇所もある。

特に序盤は観れておらず、あらすじでしか  
経緯を知らなかつた。

法「それはさて置き、サテライト。

ここから本題に入らせてもらいますが、

宜しいでしようか？」

オ「…具体的にどうするつもりなんだ？」

法「オールマイト。俺があなたに話がある理由。  
それはあなた自身に起こつた出来事……  
いいですか？落ち着いて聞いてください。

オールマイト。

その腹の傷……

消せると言つたらどうします？」

そして○○に○る。

法 「その腹の傷、消せると言つたらどうします？」

オ 「ツ!!（消す・・・と言つたのか？この傷を？）」

法 「驚き方のレパートリー少ないですね。」

オ 「す、すまない。だが、他の医師や

リカバリーガールですら治せなかつたこの傷を、

君はどうにか出来ると言うのかい!?」

興奮しているのか食い気味になるオールマイト。

法（ま、今までその傷のせいで

苦しんでただろうからな。そりやまー

興奮するんも無理ないか。）

法 「えらい食い気味ですね。ハハハツ。

勿論可能ですよ。瞬く間にね。」

オ 「！ そうか！ だが本当に

何の要求も条件も無いのかい？

こういうのは何かしらそういうものが付き物そうに  
思うが・・・」

法 「普通はね。俺達はヒーロー。

見返りを求める者も少なくはない。

けど個人的にや俺は見返りとかそういう物は  
求めちゃいないのでね。

それと少し話は変わりますが、今の俺には  
明確な目標つてのがなくつて。

如何にして皆から認められるようなヒーローに、  
人間になれるか。

自分の個性に聞きたいくらいですね。」

才

オールマイトは少し目を大きく見開いた。

注一にれと  
貰ふる物は貰ふておきゆうす

憧れを抱く人がいたりしたら。

ま、そんな日が来ればの話ですけどね。」

「――来るや、あつと。」

卷之二

天之助に聞こえない声でオールマイトはそう呟いた。

## 一方その頃……

辿り着ける気がしねえ——!!

耳「じゃあ何!? 諦めんの!?」

上「ツ そうは言つてねーだろ!」

どう足搔いてもやる二毛やねーんだろか!

耳「だよね！」

A組が魔獣の森に挑戦している真っ只中であつた。

緑（法雨君、今頃何してるんだろう？）

： そういえば忘れ物取りに教室に戻ろうとした時、  
法雨君とオールマイトが廊下で何か話してた  
気がするけどそれと関係が…？）

【ギャオオオ!!】

緑「ツ!? しまつ!?」

などと考えていると魔獣に襲われそうになるが

D O O O O M !!

緑「！」

ギリギリで爆豪が割り込んで來た。

爆「おいコラ、クソデク!! 邪魔だ！」

無論優しさの欠片もないが

緑「ご、ごめん！」

緑（法雨君の事も気になるけど、  
今は目の前の事に集中しろ！）

法「さて、そろそろ準備はいいですか？」

オ「ああ、よろしく頼む。」

オールマイトは服を捲り、傷のある腹部を見せた。

法「なるほんなるほん。では。」

天之助は傷の部分を天雨で当てた。

オ（彼は・・・一体どんな方法でこの傷を・・・）

最初に言うがこの男はまだ驚愕させていく。  
何故かつて？

この男は予想以上の行動を起こしてばかり。  
治すとか時間を巻き戻すとか  
また違うベクトルでえげつない能力。

その技の名が・・・

と、言うのだから。

オ「!!」

目を疑うのも無理はない。

何せ5年前に受けた傷<sup>代償</sup>。治療不可とされた傷が焼き剥がれる様にボロボロと落ちていく。  
まるで最初からなかつたかのように。

オ「こ、これは……！」

法「これが【そして零に成る】。あらゆる物や事象を無かつた事にする能力です。

こつちは時間関係なく無条件でね。」

オ「無かつた……事に……。」

オ（やれやれ。彼はまたとんでもない力を持つてしまつたようだ。）

オールマイトは内心呆れつつも、

天之助の凄まじさに再度驚いていた。

法「それでどうですか？身体の調子は？」

オ「どれどれ……フンツ!!」

オールマイトはマッスルフォームになり、パンチ、キック、筋トレ等を行い、

身体の具合を確認した。

その結果は……

オ「何てこつた…

身体が思うように動く！腹も痛まない！  
まるで全盛期に戻ったかのようだ!!  
わーたーしーがーー……

復活したーー!!!

どうやら無事成功できたようだ。

天之助も安心ような顔をし、内心で喜んだ。

オ「ありがとう法雨少年！」

返しても返しきれない借りが出来てしまつたよ！  
この恩は一生忘れはしない！！

法「いやいや俺は何も。それに

礼を言うならレインにお願いします。

この技創つたのアイツなんで。」

オ「そうか！レイン！君からも感謝する！」

すると急にレインが入れ替わってきて  
レ「気ニスるな。只單にオ前にハモウ少し

ヒーローとしテの責務ヲ全ウしてモラうだケさ。」

オ「H A H A H A !! そーか！

ならばより一層励まねばな！」

それを聞くとレインは引つこみ、

天之助の中に戻つて行つた。

この改変が良い方向に転べば良いが…

法「さーてライト、用事も済んだし、  
俺はそろそろ…」

オ「あ！ちょっと待ってくれ法雨少年！」

法「ん？何ですか？」

オ「行く前に先に校長室に寄つてくれないかい？」

法「… 校長室う？」